

2013年度

修士論文

都市における閉領域とその周辺環境との関係性について

—参道という観点からの考察—

Study on relationship between urban enclosure and its surrounding  
from the viewpoint of Japanese traditional approaching road to sacred area

加藤 大樹

Kato, Daiki

東京大学大学院新領域創成科学研究科  
社会文化環境学専攻

---

## 目次

1	序論	
1-1	はじめに	6
1-2	閉領域と結合関	8
1-3	目的	14
1-4	意義	15
2	社寺参道の空間的様相	
2-1	社寺参道の意義	18
2-2	社寺参道の概念的空間性	20
2-3	社寺参道の物理的空間性	22
2-4	社寺参道の様相	24
3	東京の閉領域と〈参道〉	
3-1	事例の選出	28
3-2	事例における〈参道〉の設定	44
3-3	事例の分析	44
	早稲田大学	46
	東京芸術大学・谷中霊園	52
	青山霊園	58
	日赤医療センター	62
	明治神宮外苑絵画館	66
	浜町公園	68
	教育の森公園	74
	上智大学	76
	法政大学	78
	国立劇場	80
	代々木公園	84

---

4	<参道>の空間的様相の一般化	
4-1	<参道>の形成過程	92
4-2	<参道>の様相	94
4-3	<参道>の効用	98
5	結論	104
	参考文献一覧	106
	謝辞	





# 1. 序論

---

1-1. はじめに

1-2. 閉領域と結合関

1-3. 目的

1-4. 意義

本章では、研究の着想から既往研究の調査・分析を通しての仮説の立案に至るまでの経緯について論じる。そして本研究の目的と意義を明確化し、その枠組みを示す。

## 1-1 はじめに

都市において、ある強い個性をもつ閉じた領域を重心として、特徴的なにぎわいをもつ境界が形成されることがある。典型的な例は、社寺境内と門前町である。江戸や明治の東京の名所絵には、社寺境内と門前町が一つのにぎわいをもった境界として一緒に描かれているものが少なくない(図1、2)。ここで注目すべきは、人々の住む・働くといった日常的生活空間がその大部分を占める都市空間の内に、神域である社寺境内という異質な領域が存在し、両者が参道という遷移空間を介して接続されていることである。そしてその参道に商店が並んだり、幟が立ったり、催し物が開かれたりすることで社寺という異質な領域の個性は周囲の都市空間にまで波及し、門前町というにぎわいをもった個性的な境界が生まれている。つまりこの参道という接続空間が異なる領域間の矛盾を調停することで、そこに両者の様相が融合したともいえる特徴的な都市空間が生じているのである。

江戸期にその大まかな都市構造が確立した東京は、その後、明治維新、関東大震災、戦災、オリンピックなどの大きな変革期を経験し、その過程で社寺境内とはまた異なる種類の異質な閉じた領域を内包するに至る。例を挙げるとすれば、広大な敷地を囲い込み、都市を統べる秩序とは別の秩序を内包する大学や都市公園などは近代以降に出現した都市における異質な閉じた領域であるといえる。

このような都市における異質な閉じた領域の存在を指摘する研究は少なくないが、その領域と周辺環境との関係性を論じた研究は見られない。しかし閉じた領域とはいえ、その異質さと巨大さゆえに都市の中で強い存在感をもつそれは、何らかの形で周辺環境との関係性をもっているのではないかと予想する。そこで、日本古来より両者の関係性をとりもつ空間としての役割を担ってきた参道空間に着目し、それに類似した空間の存在を想定して両者の境界を調査・分析することにより、現代の都市空間における両者の関係性が見えてくるのではないかと考える。

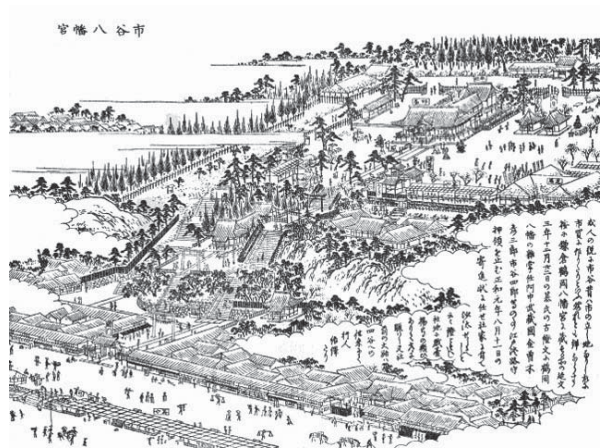


図1 市ヶ谷八幡宮  
出典：江戸名所図会



図2 善国寺縁日  
出典：新撰東京名所図会

## 1-2 閉領域と結合閾

### 閉領域の構造

都市における異質な閉じた領域に着目するにあたり、閉じた領域（以下、閉領域）という概念とその様相が人間の営為とどのように関わっているかを明らかにする必要がある。これについては原広司らの研究グループが世界の集落調査をもとに論考を行っている。彼らは集落と住居との関係がもつ共通した構造について以下のようにまとめている<sup>[1](p36)</sup>。

1. ひとつの〈領域〉はただひとつの支配あるいはモードの体系に対応している。
2. 〈領域〉は閾によって閉ざされている。
3. 〈領域〉はポテンシャルを内包している。
4. 2つ以上の〈領域〉が互いに交わりあって並立することはない。
5. 2つ以上の〈領域〉が互いに交わりあって同時に存在するとき相互に干渉しないでその交渉を可能にするための装置、結合閾をもつ。

この論考では、「領域」は「閾」によって閉じられ、その内に有する「モード」や「ポテンシャル」といった特性により他からの異質性を際立てていると論じている。「閾」とは「領域の特性の漏出、あるいは他の特性の侵入を防ぎ、一定の特性を維持しようとする役割を持つ「ただ物理的、用意的な境界なのではなく、意味的な境界」であると定義している<sup>[1](p26)</sup>。そして、「モード」とは、「行為そのものではなく、ある行為を行おうとするときの、態度、作法、マナー、あるいはとりきめ、ルールなどのこと」であり<sup>[1](p24)</sup>、「ポテンシャル」とは、「〈領域〉のなかの諸部分」が「全体との関わりの中でそれぞれの序列を与えられている」ことを表象する「空間の配列」であると定義している<sup>[1](p26)</sup>。

そして特に本研究において着目すべき点は、異なる領域間の関係性にも言及していることである。異なる閉領域は並立に交わることはないが、一方が他方を包含するという関係の場合、両者の境界には「結合閾」が存在し、「二種の相異なる領域を同時に存在させ、それが互いに他を干渉しないで接触させるための装置」として両者の関係性を構築しているとされている<sup>[1](p33)</sup>。さらに、「結合閾はスケールを捨象され、空間の意味の同一性においてのみ成立する概念なのである」とされ、様々な空間のスケールにおいて見られるものであると論じられている<sup>[1](p35)</sup>。

以上は集落と住居の関係性から導かれたものではあるが、筆者らが「我々の家族や共同体も全く同じ構造をもっているはずなのである」と述べていることから、この領域論を普遍的なものとして想定していることがわかる<sup>[1](p36)</sup>。都市を扱う本研究においても、規模は異なるものの都市が本質的には人間の営為の成果であることを考慮すると、この領域論を踏襲することは妥当であり、これが都市における閉領域とその周辺環境の関係性を考察する際に重要な手がかりとなりうると考える。

この領域論の観点から先に挙げた都市における社寺境内という事例を見ると、都市という領域と社寺境内という領域はそれぞれ別々の「モード」と「ポテンシャル」をもっており、都市という領域は社寺境内という領域を内包しているという構造が見えてくる。そして、両者の間には結合閾が存在し、社寺参道はその結合閾の一種であるといえるのである(図3)。

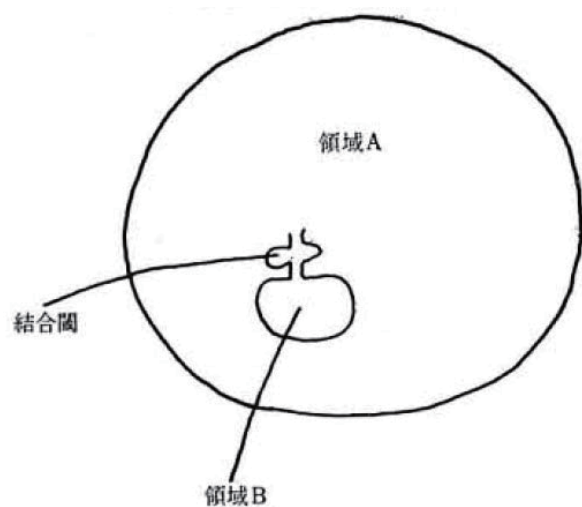


図3 閉領域と結合閾

出典：原研究室(1973)『住居集合論I』33項

## 東京の都市空間における閉領域

東京のような大都市における閉領域について考察する際には、集落や住居とは異なり、閉領域の異質性を表すものとして「モード」や「ポテンシャル」だけを想定するのでは不十分であろう。そこで東京に関する論考のうち、東京における閉領域の異質性について言及している論考を収集し、何がその異質性を生み出しているかと捉えられているのかを読み取った。

まずは、陣内秀信による論考を挙げる。彼は江戸の山の手のモザイク状の構成を指摘し（図4）、それは地形の微妙なあやに従って都市組織の一片一片が適正にレイアウトされていったからであると述べている。その結果、地形に合わせて様々な原理が複合化したバラエティに富んだ都市空間が生まれ、近代化し、均質空間化しつつある東京のなかにあっても、山の手の広い範囲に個々の場所のイメージがいまだによく継承され、無性格化への歯止めとなっていると述べている<sup>[2] (pp36-37)</sup>。つまり、現代においても東京のモザイク状の都市構造は維持され、それは地形的特徴に適応した部分的な都市の秩序が生み出す領域性によるものであると読み取ることができる。

また、欧米の都市の部分構成するのが建物であるのに対し、日本の都市の部分構成する主要な単位である「敷地」についても言及し、「内部に日常の俗なる空間ばかりか庭園や祠などの聖なる空間をも取りこみ、多様な要素、意味を濃密に詰め込んで、それ自体が一つの小宇宙を形づくっている」と述べ、領域としての強い異質性を指摘している<sup>[2] (p43)</sup>。

次に、鈴木博之による論考である。彼は都市とは「現実には都市に暮らし、都市の一部分を所有する人たちが、さまざまな可能性を求めて行動する行為の集積として」つくられていくという認識を示し、「都市そのものの歴史」を研究することで東京の潜在的構造を解読しようとしている<sup>[3] (p10)</sup>。それにあたり、「土地の歴史という視点は、「地霊」という概念に、あるところまでゆくと突き当たる」と述べ、「地霊」という概念を導入している<sup>[3] (p10)</sup>。地霊とは「単なる土地の物理的な形状に由来する可能性だけではなく、その土地のもつ文化的・歴史的・社会的な背景と性格を読み解く要素もまた含まれて」いる概念であり、この観点から東京の歴史的・重層性に着目した都市の成り立ちについての解明を試みている<sup>[3] (p12)</sup>。特に地霊と都市の領域性の関係が読み取られるのが、彼が Christopher Thacker の論文を引用しながら「地霊」についての解説を与えている次の一節である<sup>[3] (p272)</sup>。

彼は「ある場所の『雰囲気』がそのまわりと異なっており、ある場所が神秘的な特



性を持っており、そして何か神秘的なできごとや悲劇的なできごとが近くの岩や木や水の流れに感性的な影響をとどめており、そして特別な場所性がそれ自体の『精神』をもつとき」、そこには「ゲニウス・ロキ」があると述べるのである。

つまり、地霊のもたらす異質な雰囲気は都市の領域性をつくりだしているといえるのである。

最後に、中沢新一による神話的観点からの東京の領域についての考察を挙げる。この論考は、東京の領域を宗教的な観点をもってとらえている点で前の両者とは異なる視点をもっている。中沢は東京の様々な場所でみられる現象を、洪積層と沖積層のはざまにおける縄文人の聖域性と結び付け、神話的に論じている。この聖域は「無の場所」であり、「猛烈なスピードで変化していく経済の動きに決定づけられている都市空間の中に、時間の作用を受けない小さなスポット」であると述べている<sup>[4](p14)</sup>。そして、この「無の場所」がもつ霊的な力が無意識的に現代の都市にまで影響を与え、独特な雰囲気をかもし出す異質な領域が生まれているという。

以上三者の論考から、東京の都市空間において異質性を認識することのできるある領域が存在していることは明らかである。その領域が何かしらの「閼」によって閉じられているかどうかはそれぞれの論者が分析の対象とした領域により異なっているが、都市における閉領域の異質性の根拠として、地形的適応性、敷地的独立性、歴史的重層性、宗教的聖域性という観点が考えられるのではないかという知見を得た。



図4 モザイク状の東京の都市構造  
出典：陣内秀信(1992)『東京の空間人類学』35頁

### 東京の都市空間における結合閾

東京の都市空間に周囲と異質な閉領域が存在しているとして、次に、その結合閾としての役割をもつと考えられる空間概念を探る。そこで、本研究では槇文彦が提示した「到達する道」の概念に着目する。

槇文彦は著書の中で、一般的な道の性質として、「つなぐ」、「区画する」を挙げ、さらに日本に多くみられる道の性質として「到達する」を挙げている<sup>[5] (p33)</sup>。そして、この「到達する」性質をもった道（以後、到達する道）のなかで、最も儀式性の高いものとして社寺参道を例として挙げている。先に述べたように、参道は社寺境内と都市空間の結合閾であるという立場からすると、この到達する道も都市における閉領域の結合閾について考察する際の手がかりとなりえる。さらに槇は次のように述べている<sup>[5] (p36)</sup>。

参道としての儀式性は都市の中にも移植される。この「到達する」、あるいは「わけいる」という樹木でいうならば、枝道的な道のあり方は、山林のような自然界に於て、最も普遍的にみられるが、日本の都市ではそれが自然界とはまったく対照的な位置にある都市に随所にあらわれていることに注目しなければならないであろう。

このように槇は都市における到達する道の存在についても言及している。さらに、到達する道は都市における「ある極めてあいまいな周縁性をもった領域に到達している、末端神経的なものに相似しているとみるべきであろう」とも述べており<sup>[5] (p39)</sup>、到達する道が都市における閉領域の結合閾としての役割を担っている可能性は高い（図5）。

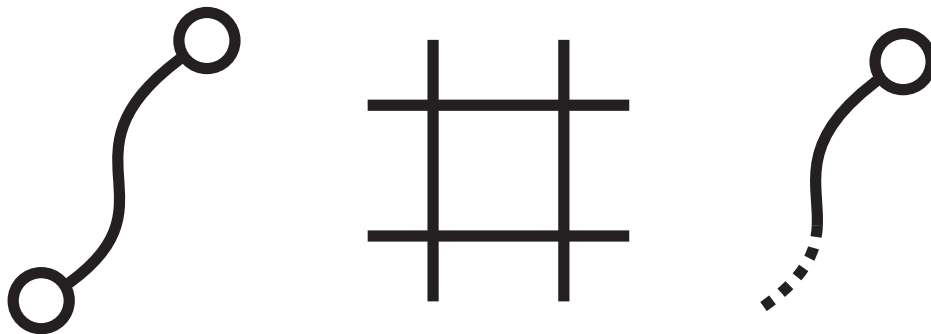


図5 槇による道の性質の記述



---

## 東京の都市空間における閉領域と結合閥の可能性

以上の既往の論考より、日本に伝統的にみられる社寺境内と参道のような閉領域と結合閥の空間構造が、異質領域と到達する道という一般性をもって現代の東京の都市空間においても成立しうるのではないかと考えられる（表1）。

そしてそれが成立していれば、参道が門前町を形成したように、到達する道は人々が異質領域へ行きつくために唯一の道であるがゆえ、その空間には到達する領域と関連する何らかの現象が表出し、個性的な都市空間の形成に寄与している可能性がある。

表1. 閉領域と結合閥の空間構造

	閉領域	結合閥
伝統的	社寺境内	参道
現代的	異質領域	到達する道

## 1-3 目的

本研究の目的は現代の東京の都市空間における閉領域とその周辺環境との関係性を解明することにある。そして本研究ではこの関係性を解明するにあたり、一連の既往の論考を踏まえ、分析の観点として以下の仮説を設定する。

「現代の東京の都市空間に存在する閉領域は社寺参道に類する結合閾をもつ」

仮説中の「社寺参道に類する結合閾」は本研究における重要性から、以後「<参道>」と表記し、社寺参道と区別して用いる。そして、本研究の目的は以下の具体的な検証事項により達成される。

1. 現代の東京の都市空間に存在する閉領域が<参道>をもつことを示す。
2. 閉領域と<参道>という都市構造の様相を明らかにする。
3. 閉領域とその周辺環境との<参道>による関係性を明らかにする。

---

## 1 - 4 意義

明治維新において大名屋敷が官庁施設へ、戦後において軍用施設が公共施設へ、高度成長期において国有施設が民間高度利用施設へと更新されていったように、東京における閉領域の更新はその時代の変化と発展とともに行われてきた。関東大震災、戦災を経たにもかかわらず、東京の都市の骨格が江戸時代から大きくは変わっておらず、日本が成熟時代を迎えようとしていることを考えると、今後も都市骨格の大変革はなく、閉領域の更新が東京の発展の主な要因となっていくことが予想される。よって、都市空間における閉領域がその内部を超えてどのように都市環境の形成に寄与するかを明らかにすることは、豊かな東京の都市環境の形成を目指す上で非常に重要である。それを読み解く際に、そこに日本に伝統的にみられる寺社境内と参道に類する空間構造の存在を仮定し、それが現代においても個性的で都市的なにぎわいをもった境界の形成に寄与していることを想定しながら分析を行う点に本研究の独自性がある。そして、その様相と都市的価値を明らかにすることは、都市空間における異質な閉領域を異質なものとして隔絶するのではなく、それを都市の個性と捉え、都市の資源として有効に活用していくための一助となる。



## 2. 社寺参道の空間的様相

---

- 2-1. 社寺参道の意義
- 2-2. 社寺参道の概念的空間性
- 2-3. 社寺参道の物理的空間性
- 2-4. 社寺参道の様相

<参道>という観点から東京の都市空間における閉領域とその周辺環境との関係性を分析するにあたり、社寺参道の意義や空間的様相をまず明らかにしておく必要がある。本章では、社寺参道に関する既往の論考を読解することによりそれらを究明する。

## 2-1 社寺参道の意義

古来からのものとしては伊勢神宮や出雲大社、近代以降に創建されたものとしては明治神宮や靖国神社など格の高い神社においては、決まって長い参道を辿らなければその社殿に行き着くことはできない。神道と仏教とが歴史的に混交してきた日本においては、寺院にまでも参道が形成されている。そして参道は山や森といった自然のなかだけではなく、都市においても形成され、鎌倉の鶴岡八幡宮や江戸期東京の護国寺や増上寺のようにそれが都市の空間構造を決定づけている場合もある。また、現代の東京の都市空間に無数に存在する神社にも規模は小さいながら必ずといっていいほど参道が整備されている。このように社寺と不可分の関係にある参道とは何であるのだろうか。1章では参道は閉領域としての社寺境内の結合閥であると述べたが、本章ではその空間の本質的な意義や様相について論じる。

国語辞典によれば参道とは「神社や寺院に参拝する人のために作られた道」とされてるが<sup>[6]</sup>、これではその本質的な意味を知ることはできない。そこで参道について専門的に論じた文献を探したところ、造園家であり明治神宮の林苑計画の中心人物でもあった田阪美德による論考がその意義を明快に記述しているように思えた<sup>[7] (p39)</sup>。

概念的に云へば参道は俗界より神域に入り廣前に到達するの道程である。参道に一度足を踏み入るや、俗界すなわち人間界から聖域即ち神の世界に入り來つたのだとの感銘を先ず持たしめ、一步一步進む毎に落附いて緊張した心持に誘ひ導き得るところに参道の参道たる意義が存する。

ここで記述されている参道の意義とは、俗域から聖域への空間的・心理的な遷移を誘導することにあると要約することができる。そしてこの記述からは、参道は最終的な到達点における信仰へ向けての精神的な高揚を促すための社殿に付属した空間であるにとらえていると読み取ることができる。

一方で、榎文彦による「奥の思想」、上田篤による「遙拝の道」という概念も参道の意義を理解する助けとなる<sup>[5] (p220), [8] (p11)</sup>。

奥性は最後に到達した極点として、そのものにクライマックスはない場合が多い。

---

そこへたどり着くプロセスにドラマと儀式性を求める。つまり、高さではなく水平的な深さの演出だからである。

そのすぐれた空間の演出力によって、人は参道自体に恐懼し、参道をトコヨの一部と認識し、あるいはトコヨにつながるものとして参道上からトコヨを遙拝するのである。遙拝は、参道空間の極限にあつて、いわば自からの意識をトコヨへと送出する行為である。

彼らの態度に共通するのは、田阪が信仰の場はあくまで到達した社殿にあるととらえているのに対して、参道は信仰を誘発する空間性をもち、その道行きそのものに信仰的価値を見いだしている点である。この場合、最終到達点である社殿と参道に主従の関係はなく、同等の信仰的価値をもつ空間としてとらえることができる。

これらの参道の意義の複数のとらえ方は、解釈の問題であるためどちらの側面も認めることができ、厳密にひとつに定義するのは困難であるし、本研究の趣旨でもない。よって、ひとまず多様な参道の解釈の仕方を認め、両者を並立するものとして考える。

## 2-2 社寺参道の概念的空間性

次に前節で認められた意義を満たすために、参道はどのような空間性をもつのかを探る。方法としては参道の空間性について論じている文献を収集し、そこで述べられている参道の空間性の記述について分析した。収集した文献は表2のとおりである。複数の文献を通読したところ、意義の解釈が複数あったように、空間性の解釈や着眼点も著者によって複数存在しているようである。本節では特に概念的な空間性に関する記述について着目して分析したところ、参道の概念的空間性はおおまかには三種類に分類することができるのではないかと結論付けた。その分析と分類をまとめたものが表3である。

まずその空間性として挙げられるのが連想性である。前節で明らかにした参道の意義より、参道はそれ自体が神を連想させる空間性をもっていなければならないのである。それは水平的な空間の奥深さによってもたらされることもあれば、鳥居や注連縄といった神の領域を連想させる要素によって演出されることもある。神の存在場所については、社殿なのか、それとも山奥なのかという様々な信仰の考え方があにしろ、少なくとも参道は神の存在を連想し、信仰を誘発するような空間性をもっていなければならないのである。

次に参道の空間性として重層性が挙げられる。一般に格式の高い社寺はそれ相応の長い参道をもつ。しかし、その空間は単調なものではなく、変化に富んだものであることが多

表2. 調査対象文献リスト

文献ラベル	文献名, 著者, 出版社, 出版年
文献1	日本の都市空間, 都市デザイン研究体, 彰国社, 1968
文献2	見えがくれする都市, 榎文彦 他, 鹿島出版会, 1980
文献3	続・街並みの美学, 芦原義信, 同時代ライブラリー, 1983
文献4	空間の演出力, 上田篤, 筑摩書房, 1985
文献5	東京の空間人類学, 陣内秀信, ちくま学芸文庫, 1992
文献6	神社の参道—境内林苑論の序説として—, 田阪美徳, 神社協会雑誌第三十六年第三号, 1937
文献7	アプローチとしての歩行空間に関する基礎的研究 -神社・寺院のアプローチ-, 北村真一・鈴木忠義・樋口忠彦, 土木学会年次学術講演会梗概集, 319-320, 1974
文献8	参道空間の分節と空間構成要素の分析(分節点分析・物理量分析) 参道空間の研究(その1), 船越徹・積田洋・清水美佐子, 日本建築学会計画系論文報告集第384号, 1988-2
文献9	神社参道の空間構成に関する研究, 斎藤潮, 第24回日本都市計画学会学術研究論文集, 457-462, 1989



くの文献で指摘されている。つまり、参道はある空間のまとまりごとに分節化されており、全体として重層性をもつ空間となっているのである。そしてこの重層性が景観の変化や奥深さ、目的地への到達感などの効果を生むと指摘されている。

そして最後に挙げられるのが参道空間の指向性についてである。指向性とは人々がある一定の方向へ向かうように空間が構成されていることである。そしてこの指向性は導入部があいまいであり、明確な到達点をもつ半直線的な道のあり方にみられる空間性である。またそれに付随して、人々を奥へと引き込む空間的演出の存在も指摘されている。

以上のように、参道空間の様相を明文化する上でその概念的空間性を3つに分類したが、それぞれの特性は独立して存在するものではなく、相互依存的な関係であることもそれぞれの文献の記述から読み取れる。

表3. 文献における概念的空間性に関する記述

文献ラベル	文献名	連想性	重層性	指向性
文献1	日本の都市空間	1-1	1-2	
文献2	見えがくれする都市	2-1	2-2	2-3
文献3	続・街並みの美学			3-1
文献4	空間の演出力	4-1		4-2
文献5	東京の空間人類学			5-1

—各文献の引用一覧—

1-1	「日本の神域を構成する主要素は、しばしば象徴的である。」「しめ縄によって囲われた地域は、齋殿すなわち浄められた神聖な領域を暗示していた。」「鳥居は神域への入り口を象徴する。」(p94)
1-2	「空間は内から外へ向かって段階づけられており、その中心には権威のシンボルを置いている。神社でいえば、参道を一の鳥居、二の鳥居と段々神域に近づいてゆく。この鳥居は、空間が質的に変化するところに置かれている。」(p32)
2-1	「「奥」は水平性を強調し、見えざる深さにその象徴性を求める。」(p219)
2-2	「百メートルの距離でも、あるいは十メートルの距離の中にも、相対的に「奥」を認識し、奥に至る道程を設定することによって、」「重層化された空間のひだ」をつくろうとする(p205)
2-3	「到達する」性格の強い道の中で「もっとも儀式性の高いものは、社寺を到達点とする所謂参道であり」(p36)
3-1	「特徴の一つは、その終端部に街のシンボリックなものを持っていることである。浅草仲見世は「前方目的型」とでも言うべく、正面に金龍山浅草寺をもった単極型である。」(p194)
4-1	そのすぐれた空間の演出力によって、人は参道自体に恐懼(きょうく)し、参道をトコヨの一部と認識し、あるいはトコヨにつながるものとして参道上からトコヨを遙拝するのである。(p11)
4-2	人々が求めるトコヨの世界)「つねに、到達した地点のその先にあるものなのだ。西行が詠んだように、奥にはまだ奥があるのである。トコヨの世界とは、永遠の道行における奥というひとつのベクトルを示すものでしかない。」(p11)
5-1	世俗の空間である市街地から離れ、参道により静寂に包まれた奥の宗教空間へ引き込まれるような演出が必ずなされている。(p127)

## 2-3 社寺参道の物理的空間性

次に、前節で明らかにした参道の概念的空間性はどのような物理的空間性により生み出されるのかといったことを表2の文献を用いて分析した。特に文献1と文献7, 8, 9は社寺参道の物理的空間性に焦点を当てて分析しており、その物理的な空間構成要素にまで詳細に言及している。文献を通読した結果、物理的空間性の記述には空間の構成の手法に関するものと、空間の構成の要素に関するものがあると読み取れた。両者の項目について分析と分類をまとめたものが表4である。

表4に示された参道空間の構成の手法が前節で明らかにした連想性・重層性・指向性といった参道の概念的空間性を生み出している物理的な要因であると考えられる。そしてその手法に従い、表に示された構成の要素が参道空間を形成しているのである。構成の要素に関しては、さらに道の属性と人工物、自然に類別することができる。特に人工物にお

表4. 文献における物理的空間性に関する記述

文献ラベル		文献1	文献2	文献4	文献5	文献6	文献7	文献8	文献9	
構成の手法	分節	1-1					7-1	8-1	9-1	
	軸と障り	1-2							9-1	
	到達度の暗示							8-1	9-1	
	見えかくれ		2-1					8-1	9-1	
	連続性	1-2					7-1		9-1	
	明暗の変化	1-2						8-1	9-1	
	疎密の変化	1-2						8-1		
	街道からの分岐		2-2	4-1	5-1					
構成の要素	道	高低差	1-2	2-1		5-2	6-1	7-1	8-1	9-1
		屈曲	1-2	2-1			6-1	7-1	8-1	9-1
		幅						7-1	8-1	
		橋							8-1	9-1
	人工物	門	1-2	2-1	4-1			7-1	8-1	9-1
		宗教建築物	1-2		4-1				8-1	9-1
		一般建築物							8-1	
	自然	植物		2-1		5-2	6-1	7-1	8-1	9-1
		水	1-2			5-2	6-1		8-1	
	その他	表層の質感	1-2				6-1	7-1	8-1	
		物語	1-2					7-1		

る門とは、鳥居や注連縄、一對の灯籠など境界を明示する要素を示す。また、その他における表層の質感とは門前町ののれんや旗や土産物、石垣や樹木の肌理などを示し、物語とは眠り猫や三猿といったようなその背後に逸話をもつ物理的要素を示す。これらは構成の要素全般にわたって考えられるべき要素である。

以上の物理的空間性も前節の概念的空間性と同様に、それぞれの手法や要素は相互依存的なものでありこれが厳密な分類であるとは言い切れないが、参道の空間的様相を明らかにするという本章の目的を果たすものではあると考える。

—各文献の要約及び引用一覧—	
1-1	日本における空間骨格を形成する概念のひとつとして「重畳」が挙げられている。その項目の中で、終点にむかって経路が分節される神社の参道が「重畳」の空間骨格をもつ例として述べられている。(pp.32-33)
1-2	日本の都市空間の実例として、密教型という項目で日光と金刀比羅の空間が分析されている。その特徴として「地形に対する有機的対応」「障りの連続」「テクスチャとメモリーの変化」「流動する空間」を挙げている。(pp108-117)
2-1	「多くの寺社に至る道が屈折し、僅かな高低差とか、樹木の存在が、見えかくれの論理に従って利用される。それは時間という次数を含めた空間体験の構築である。神社の鳥居もこうした到達の儀式のための要素に外ならない。」(p220)
2-2	神代雄一郎が発見した村落コミュニティにおける街道筋と直角な宗教軸は「まさしく道からちょっと奥まって、樹木を背にした神社という形式で、今日東京をはじめいたるところで見られるパターンの原型でもある。」(p211)
4-1	参道の道行は「天下の公道である街道を折れて一の鳥居をくぐる。二の鳥居、三の鳥居、手水屋、廻廊、拝殿、玉垣、正殿、御神体の鏡と続く道である。」(p10)
5-1	「どの主要街道も、こうして郊外へさしかかるあたりに、明暦の大火後、江戸中心部から転出した寺を計画的に配し、ちょっとした寺街を形づくった。そして寺へのアプローチのため、表の町屋の間に参道がとられた。」(p50)
5-2	市ヶ谷八幡は「山の手における宗教施設の典型的な立地のあり方を示している。下には川が流れ、門前には家並みが並んでいる。その間からアプローチの参道を登りつめて、小高い場所に設けられた境内へ入る。」(p126)
6-1	参道の意義、参道の類別的考察、参道並木および参道林の三章からなり、参道の物理的空間性については、路面の曲直、勾配、舗設に言及し、特に樹木に関してはその樹種や樹形、手入れに至るまで詳細に考察している。
7-1	神社・寺院の参道を対象として、主に景観の変化という観点からアプローチ空間の快適性と演出性の分析を行っている。
8-1	金刀比羅宮・春日大社・出雲大社・皇大神宮・賀茂別雷神社を対象とした、参道の分節点分析、要素の物理量分析からなる論文である。分節点の構成要素として、象徴的要素・地形的要素・自然的要素・人工的要素を挙げ、これらの観点から分節の原理を分析し、また、物理量分析では、主に緑量・天空率・鳥居・レベル差・折れ曲りなどの要素の定量的変化について分析している。
9-1	大神神社・伏見稻荷大社・松尾大社・金刀比羅宮を対象とした、ゲート・社殿類・参道軸線と立面のなす角とずれの大きさを指標とした参道の空間体験の分析から参道のデザイン手法をまとめた論文である。デザイン手法として、ゲートの空間的役割・参道空間の要素の視覚的接続・意味論的接続・参道空間を目標物のもとにひとつにまとめる手法が論じられている。

## 2-4 社寺参道の様相

本章では参道の意義、概念的空間性、物理的空間性を文献の読解から明らかにしてきた。これらを社寺参道の空間的様相としてまとめたものを表5に示す。日本に伝統的な社寺参道の空間は、様々な要素が長い時間をかけて相互依存的に複雑に構成されてきた空間であるがゆえ、表を参道の空間的様相として厳密に定義することは不可能である。しかし次章以降、東京の都市空間における閉領域とその周辺環境との関係性を分析するにあたり、〈参道〉という観点を設定するには十分に価値をもつものであると考える。

表5. 社寺参道の空間的様相

概念的空間性	意義	俗域から聖域への空間的・心理的遷移の誘導 道行きによる信仰の誘発					
	性質	連想性		重層性		指向性	
物理的空間性	構成の手法	分節 連続性	軸と障り 明暗の変化	到達度の暗示 疎密の変化	見えかくれ 街道からの分岐		
	構成の要素	道	高低差	屈曲	幅	橋	表層の質感
		人工物	門	宗教建築物	一般建築物		
自然	植物		水				





## 3. 東京の閉領域と〈参道〉

---

3-1. 事例の選出

3-2. 事例における〈参道〉の設定

3-3. 事例の分析

本章では研究対象とする具体的な都市空間を選定しその分析を行う。選定は既往研究と実地調査により行う。そして事例として選定したそれぞれの閉領域について〈参道〉をもつと認定する要因とその空間の様相について分析を行い、合わせてその〈参道〉の形成過程を調査する。

### 3-1 事例の選出

#### 研究対象とする閉領域

東京における閉領域とその周辺環境との関係性を検証するにあたり、その関係性を構築する要となる〈参道〉を介して、閉領域と周辺環境が何らかの形で関係性をもっていると考えられる具体的な都市空間の事例を選出する。

東京の閉領域についてはそれを網羅的に記述しているものとして寺田による研究<sup>[9]</sup>を選出の参考とした。この論文では東京の都心部である山手線の内部とその沿線を対象に、東京都の用途別土地利用現況図から、用途別の色の塗分けによって周囲から浮かび上がって見える比較的大きな領域を選び、東京の100の閉領域としてまとめている。ただし、この研究以降に用途が変化した閉領域についてはそれを修正して参考資料とした。

本研究で分析の対象とする閉領域は不特定多数の人々が入り出り可能なものであるべきと考え、寺田が選定した100の閉領域に含まれる皇居などの一般人が立ち入れない領域や、集合住宅地などの特定の人々しか立ち入れない領域は対象から除外する。なぜなら、これらの閉領域は防衛的側面が強く、周辺環境との関係性をもっているとは考えにくいからである。よって、本研究の調査対象とする閉領域は表6に示すものとする。



表 6. 研究対象とする閉領域一覧

番号	閉領域の名称	用途	番号	閉領域の名称	用途
1	飛鳥山公園	公園	35	染井霊園	霊園
2	旧古河庭園	公園	36	雑司が谷霊園	霊園
3	荒川自然公園	公園	37	谷中霊園	霊園
4	六義園	公園	38	青山霊園	霊園
5	上野公園	公園	39	駒込病院	病院
6	小石川植物園	公園	40	国立国際医療研究センター	病院
7	後楽園	公園	41	東京医科歯科大病院	病院
8	新宿中央公園	公園	42	東京女子医大病院	病院
9	新宿御苑	公園	43	聖路加病院	病院
10	日比谷公園	公園	44	国立がんセンター	病院
11	浜町公園	公園	45	慶応大学病院	病院
12	清澄公園	公園	46	日赤医療センター	病院
13	明治神宮外苑	公園	47	NTT東日本関東病院	病院
14	代々木公園	公園	48	ホテルニューオータニ	ホテル
15	旧浜離宮	公園	49	ホテルオークラ	ホテル
16	旧芝離宮	公園	50	都ホテル東京・八芳園	ホテル
17	有栖川公園	公園	51	高輪プリンスホテル	ホテル
18	自然教育園	公園	52	品川プリンスホテル	ホテル
19	林試の森公園	公園	53	文京グリーンコート	複合施設
20	教育の森公園	公園	54	六本木ヒルズ	複合施設
21	西が原みんなの公園	公園	55	東京ミッドタウン	複合施設
22	立教大学	学校	56	サンシャインシティ	複合施設
23	東京芸術大学	学校	57	アークヒルズ	複合施設
24	学習院大学	学校	58	恵比寿ガーデンプレイス	複合施設
25	お茶の水女子大学	学校	59	国立新美術館	美術館
26	早稲田大学	学校	60	国立劇場	公共施設
27	東京大学本郷	学校	61	東京体育館	体育施設
28	上智大学	学校			
29	青山学院大学	学校			
30	慶応大学	学校			
31	聖心女子大学	学校			
32	聖心女学院	学校			
33	明治学院大学	学校			
34	法政大学	学校			

〈参道〉をもつ可能性のある閉領域の選定

本研究では〈参道〉の存在を仮定して東京における閉領域と周辺環境の関係性を分析するため、社寺境内と参道との空間構成に着目し、対象とした61か所の閉領域から〈参道〉をもつ可能性のある閉領域を選定する。

社寺境内と参道との空間構成を図式化すると図6のようになる。社寺境内は神域という領域の性質上、俗域である街道筋から離れて位置しているのが一般的である。それらをつなぐ役割をもつのが参道であるが、ここで社寺境内の境界のあり方に注目する。一般的に社寺境内は森林に囲まれていたり、高台に位置していたりと強い境界性によって神域としての独立性を保っており、そこへの到達経路は参道に限定されているのである。つまり、社寺境内の境界は参道に対してのみ開かれており、その他の周囲に対しては閉じられているのである。

これらの社寺境内の街道からの隔離と境界のあり方という空間的特徴に着目し、この特徴を指標として、〈参道〉が形成されている可能性をもつ閉領域を選定する。

この分析の手法として、寺田の研究における閉領域の境界分析の手法を参考とした。寺田の研究では閉領域における境界の種類を図8に示した六種類に分類して分析を行っている。本研究でもこの境界の類別に従い、研究対象とした61か所の閉領域に対して図7に例を示すような作図を行い、境界の特性を分析する。また、閉領域の境界が幹線道路（都道）と接触する部分、閉領域の正門と考えられる出入口も合わせて作図することで閉領域の幹線道路からの隔離性も検証する。

閉領域の境界の特性の分析は、「境界強度」を定義することにより行う。「境界強度」とは、閉領域の境界がどれほど内部と外部に隔たりを生んでいるかを数値化したものである。数

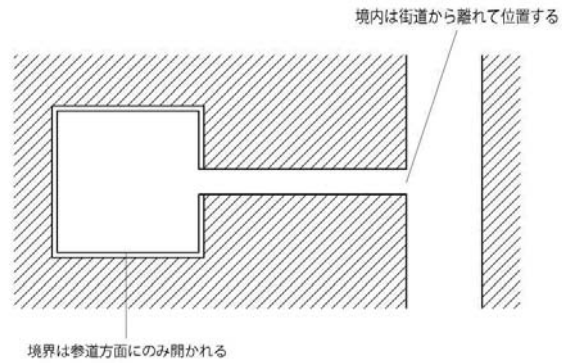


図6 社寺境内と参道と街道の関係

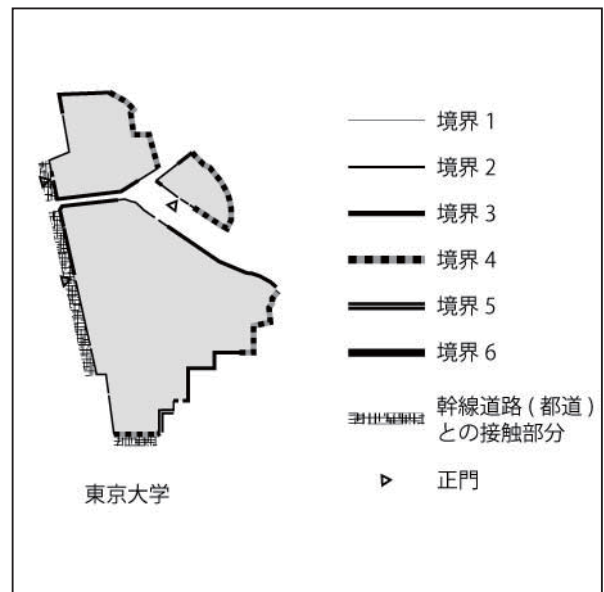
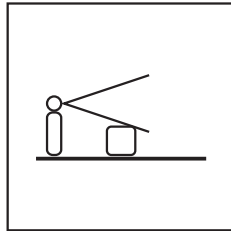
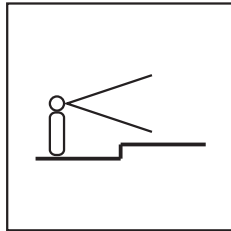


図7 境界の作図例

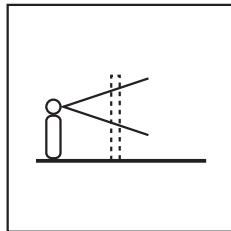
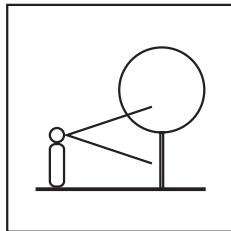
境界1  
敷居のみ

侵入は防いでいるけれども視線は遮らないもの



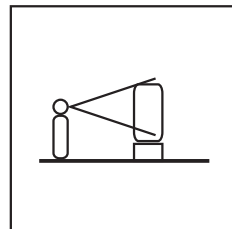
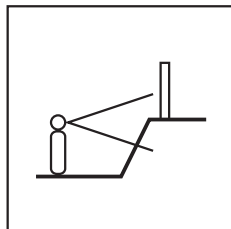
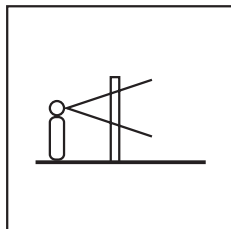
境界2  
中が見える扉

視線を一部遮るが中の様子がうかがい知れるもの



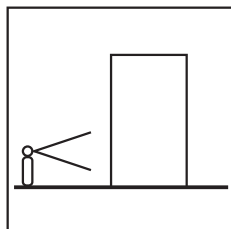
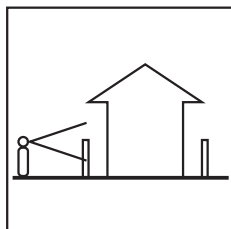
境界3  
中が見えない扉

視線の通らないすべてのもの



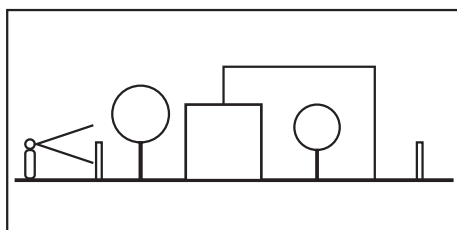
境界4  
建物

住宅や高層ビルなどの建物が境界となっているもの



境界5  
広い敷地

学校や公共施設などの比較的大きな敷地が境界となっているもの



境界6  
交通インフラ

高速道路や鉄道などの交通インフラが境界となっているもの

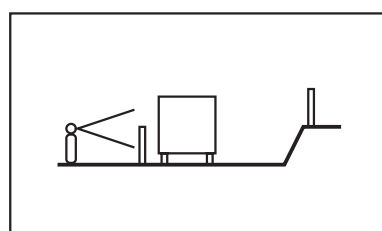
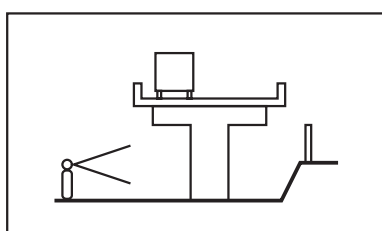


図8 境界の分類

値は、隔たりが最も小さいものを1、最も大きいものを4として、表7に示した基準により定義を行った。そしてそれぞれの閉領域において、境界の種類ごとに周長を測定し、以下の式に代入することで閉領域ごとの「平均境界強度」を算出した。この「平均境界強度」とは、閉領域の平均的な境界の特性が、図に示した六種類の境界のうちどれに近いかを示すものである。

$$\text{平均境界強度} = \frac{1 \times (\text{境界1の周長}) + 2 \times (\text{境界2の周長}) + 3 \times (\text{境界3の周長}) + 4 \times (\text{境界4,5,6の周長})}{\text{境界の全周長}}$$

次に研究対象とした61か所の閉領域に対して、平均境界強度を用いた境界の特性と、正門と幹線道路との関係性から導かれる幹線道路からの隔離性を指標とした分類を行った。

境界の特性としては、それが開放的境界であるか閉鎖的境界であるかということが考えられる。これを平均境界強度との対応で考えると、開放的というのは閉領域の内部が外部から見通せる境界強度であり、表6と照合すると平均境界強度が2以下のものであると考えられ、これを弱い境界性とする。同様に、閉鎖的というのは閉領域の内部が外部から見通せないものであり、平均境界強度が3以上のものであると考えられ、これを強い境界性とする。そして、実際の閉領域の境界は、1～4までの境界強度をもつ境界が混在していることから、平均境界強度としては開放と閉鎖の中間的な数値である、2より大きく3より小さいものも多数存在し、これを混在した境界性とする。

次に閉領域の幹線道路からの隔離性の指標として、閉領域の正門と幹線道路との関係を考える。正門が幹線道路に面して接触して位置している場合、閉領域は幹線道路から隔離されていないと考える。また、正門が幹線道路から離れた場所に位置し、非接触の関係をもっている場合、これを閉領域が幹線道路から隔離されていると考える。

以上の二つの指標を用いて、図9に示すように分類を行うと、A～Fまでの六つのグループに分けることができる。これらのグループごとに、閉領域の境界の種類と幹線道路との接触部分、正門の位置を作図したものを次項以降に示す。

表 7. 各境界の境界強度の設定

境界の種類	境界強度	境界の特徴
境界 1	1	視線を遮るものがなく閉領域内部を見通せる
境界 2	2	一部視線が遮られるが閉領域内部が見える
境界 3	3	完全に視線が遮られ閉領域の内部は見えないが、様子をうかがうことはできる
境界 4 境界 5 境界 6	4	完全に視線が遮られ閉領域の内部は見えず、様子をうかがうこともできない

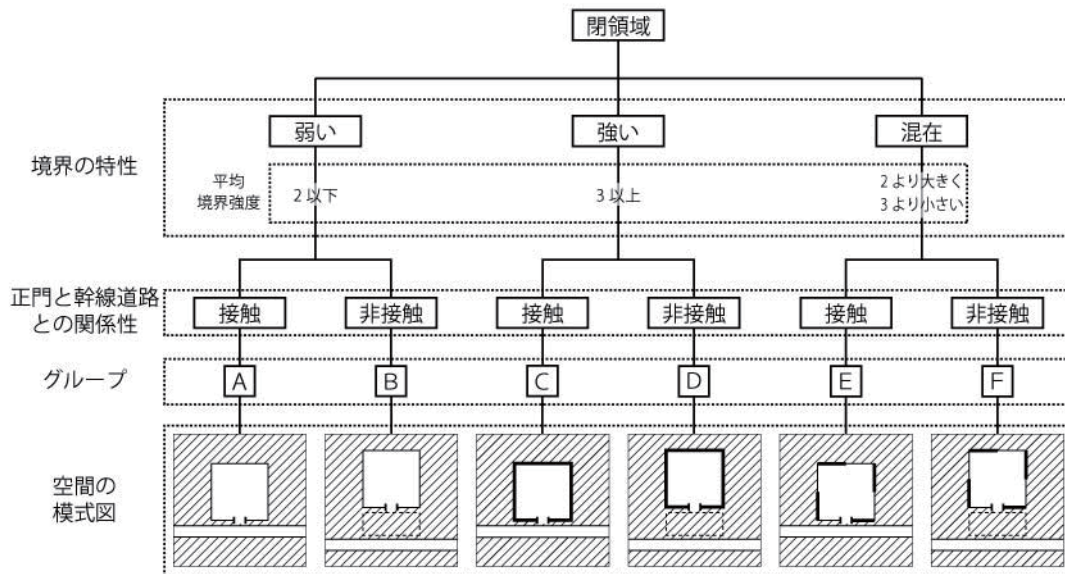


図 9 境界の特性と街道からの隔離性による閉領域の分類

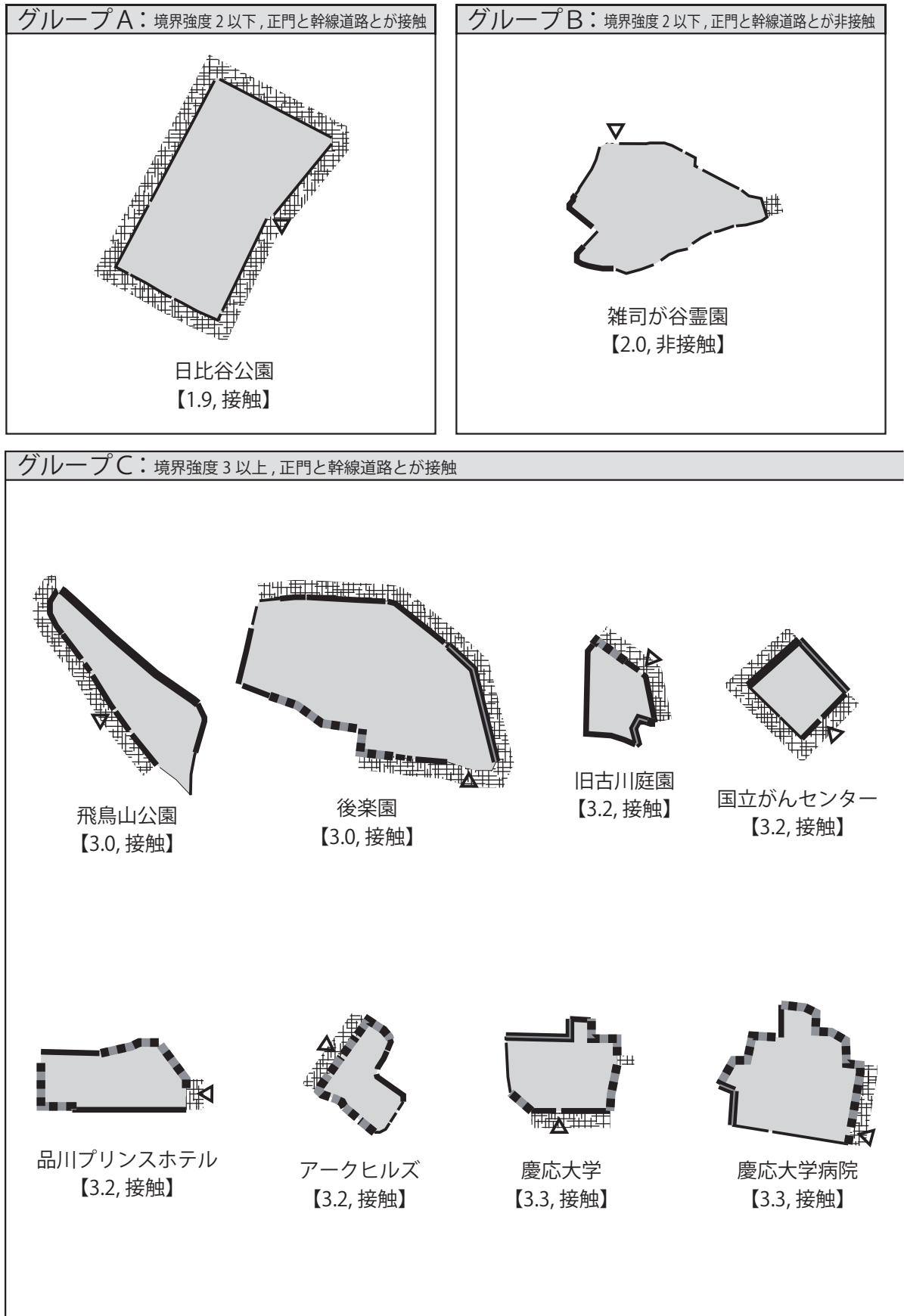
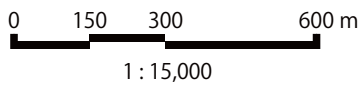
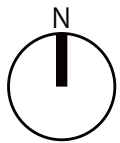
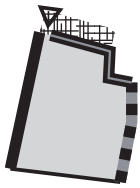


図 10 閉領域の境界性と街道からの隔離性の分析 1

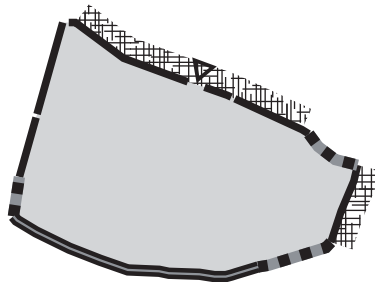


閉領域の名称  
【平均境界強度, 正門と幹線道路との関係性】

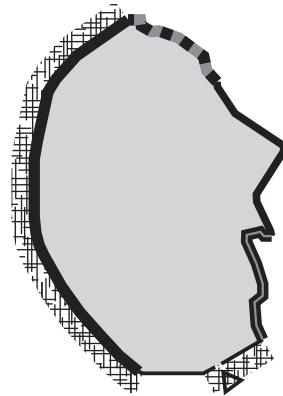
- 敷居のみ
- 中が見える塀
- 中が見えない塀
- ▬ 建物
- 広い敷地
- 交通インフラ
- ▨ 幹線道路(都道)との接触部分
- ▷ 正門



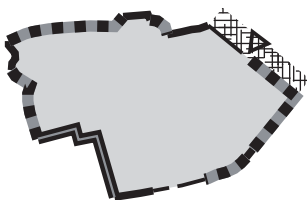
旧芝離宮  
【3.4, 接触】



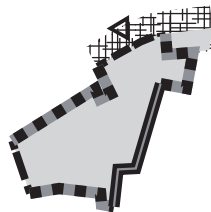
学習院大学  
【3.4, 接触】



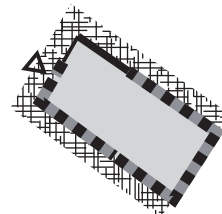
自然教育園  
【3.5, 接触】



お茶の水大学  
【3.5, 接触】



都ホテル東京・八芳園  
【3.5, 接触】



サンシャインシティ  
【3.7, 接触】

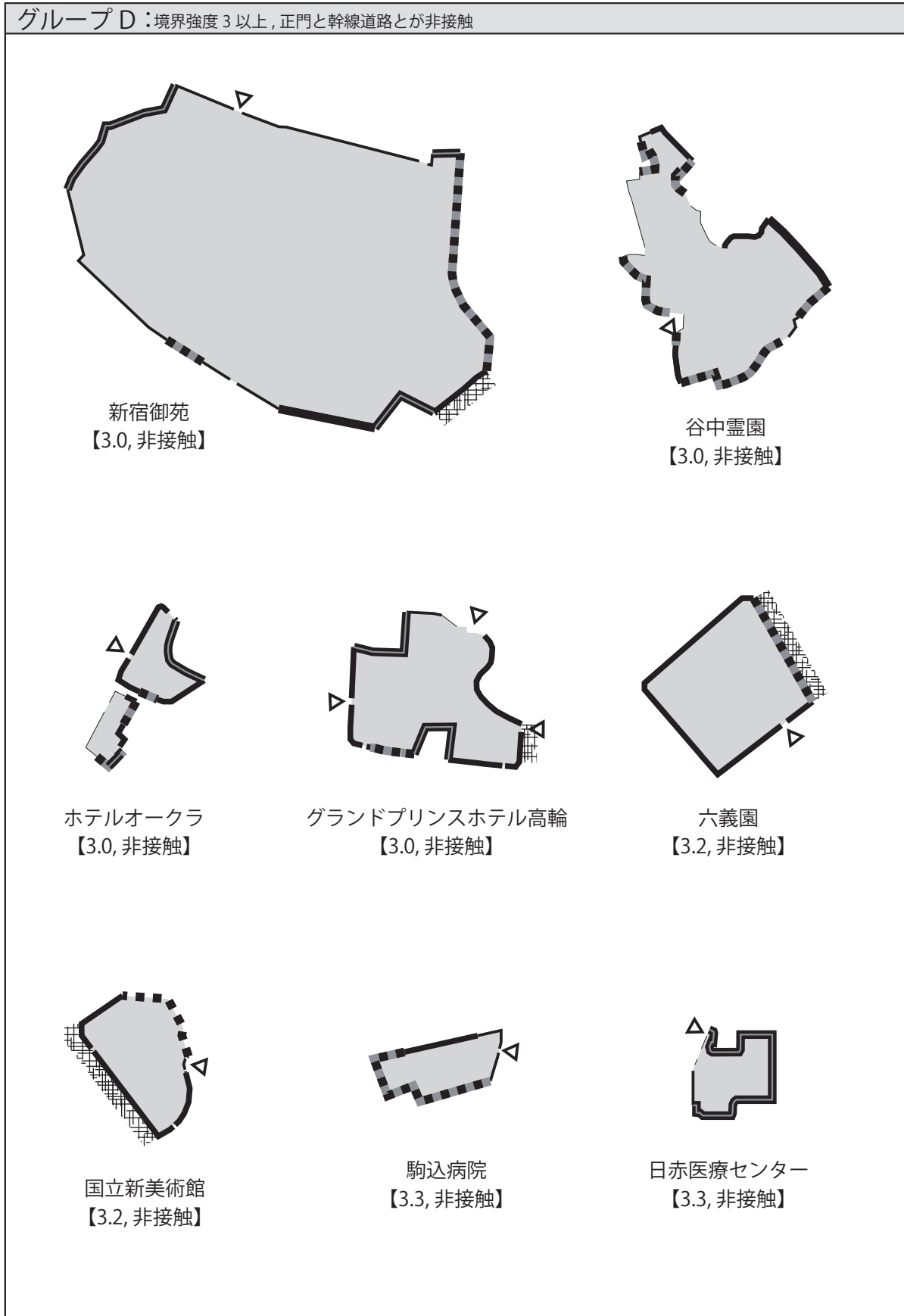
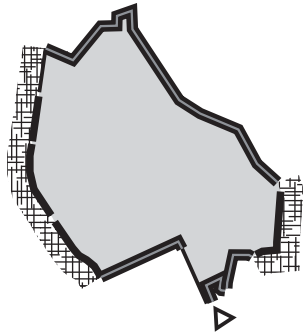


図 11 閉領域の境界性と街道からの隔離性の分析 2





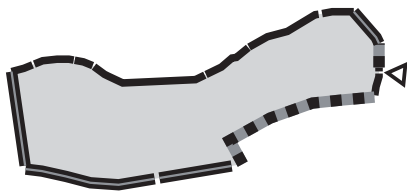
代々木公園  
【3.3, 非接触】  
※S=1:30,000



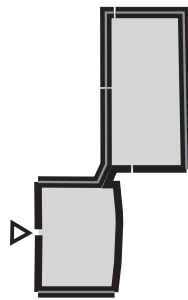
聖心女学院  
【3.4, 非接触】



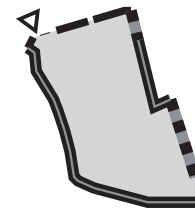
明治学院大学  
【3.4, 非接触】



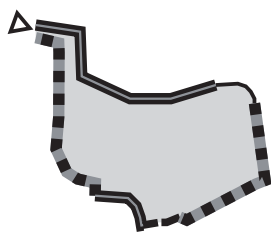
林試の森公園  
【3.5, 非接触】



荒川自然公園  
【3.6, 非接触】

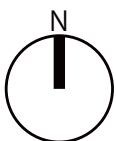


ホテルニューオータニ  
【3.6, 非接触】



聖心女子大学  
【3.8, 非接触】

- 敷居のみ
- 中が見える塀
- 中が見えない塀
- 建物
- 広い敷地
- 交通インフラ
- 幹線道路(都道)との接触部分
- ▶ 正門



0 150 300 600 m  
1:15,000

閉領域の名称  
【平均境界強度, 正門と幹線道路との関係性】

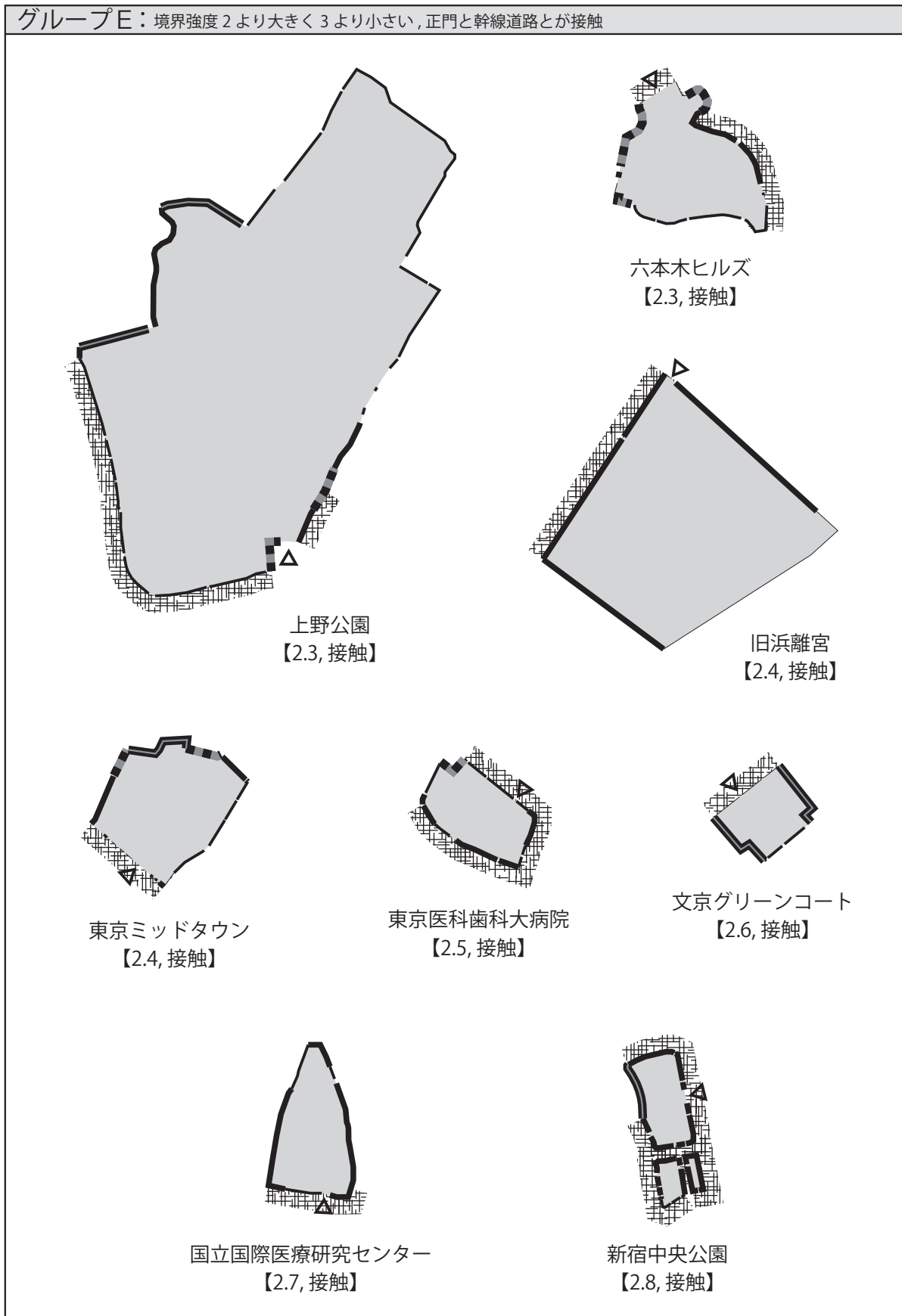


図 12 閉領域の境界性と街道からの隔離性の分析 3



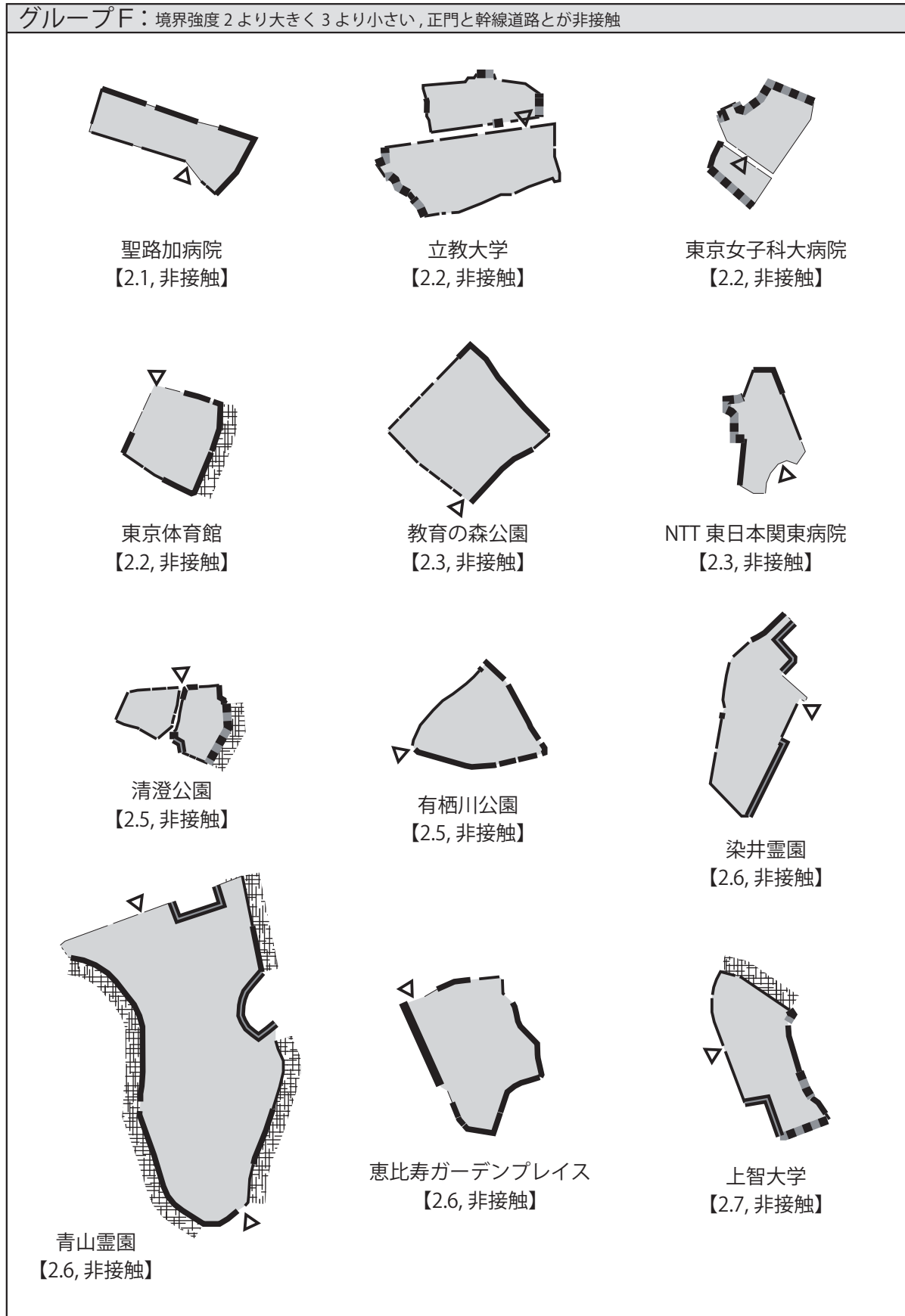
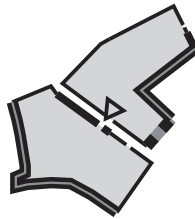


図 13 閉領域の境界性と街道からの隔離性の分析 4



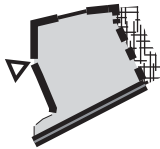
西が原みんなの公園  
【2.8, 非接触】



東京芸術大学  
【2.8, 非接触】



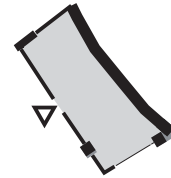
法政大学  
【2.8, 非接触】



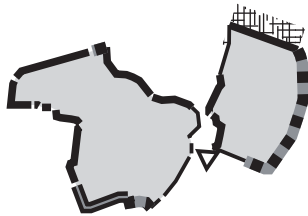
国立劇場  
【2.8, 非接触】



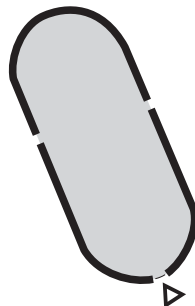
小石川植物園  
【2.9, 非接触】



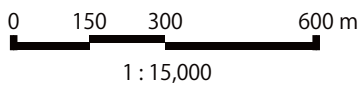
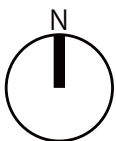
浜町公園  
【2.9, 非接触】



早稲田大学  
【2.9, 非接触】



神宮外苑絵画館  
【2.9, 非接触】



閉領域の名称  
【平均境界強度, 正門と幹線道路との関係性】

- 敷居のみ
- 中が見える塀
- 中が見えない塀
- 建物
- 広い敷地
- 交通インフラ
- 幹線道路(都道)との接触部分
- ▶ 正門

研究対象とした 61 か所全ての閉領域を以上の A～F までのそれぞれグループに分類したところ、各グループに分類された閉領域の数は図 14 のようになった。これらのグループの中で、社寺境内と街道の関係性と同様に、閉領域が幹線道路から離れて位置しているものが、グループ B、D、F である。そして社寺境内の境界はある程度強い境界性をもっているため、この中のグループ D、F を〈参道〉をもつ可能性のある閉領域として選定する。

グループ D、F に含まれる閉領域には、幹線道路からそこへと至る接続道路が存在していると考えられる。この接続道路が〈参道〉としての可能性をもつ道空間であるが、ここで機能的に幹線道路と閉領域を接続するというだけの道空間と、〈参道〉を区別しなければならない。〈参道〉は 2 章において考察したように、道としての機能性だけではなく、何らかの意味性をもっている空間なのである。ここでいう意味性とは、道空間にみられる閉領域との関連性とする。

〈参道〉をもつ可能性があるとしたグループ D、F の 35 か所の閉領域から、接続道路に何らかの意味性がみられる閉領域を選定する作業は、これらの全閉領域の実地調査によって行った。この実地調査によって、接続道路に閉領域との関連性がみられる道空間を〈参道〉として選定した。

その結果 35 か所中、11 か所（谷中霊園と東京芸術大学を同事例とする）の閉領域に〈参道〉と考えられる道空間がみられた。選定の際の関連性の基準については、「商店街の形成」、「樹木による演出」、「建物による配慮」、「資本の集中的投入」とした（表 8）。これらを〈参道〉をもつ閉領域の事例として選出し、詳細な調査対象とした。

グループ	A	B	C	D	E	F
空間の模式図						
全ての閉領域の数	1	1	14	15	10	20

図 14 各グループに分類される閉領域の数

表 8. グループD、Fからの選定

グループ	番号 閉領域の名称	商店街の形成	樹木による演出	建物による配慮	資本の集中的投
D	1 新宿御苑				
	2 谷中霊園	○			
	3 ホテルオークラ				
	4 グランドプリンスホテル高輪				
	5 六義園				
	6 国立新美術館				
	7 駒込病院				
	8 日赤医療センター	○			
	9 代々木公園				○
	10 聖心女学院				
	11 明治学院大学				
	12 林試の森公園				
	13 荒川自然公園				
	14 ホテルニューオータニ				
	15 聖心女子大学				
F	16 聖路加病院				
	17 立教大学				
	18 東京女子医大病院				
	19 東京体育館				
	20 教育の森公園		○		
	21 NTT東日本関東病院				
	22 清澄公園				
	23 有栖川公園				
	24 染井霊園				
	25 青山霊園	○			
	26 恵比寿ガーデンプレイス				
	27 上智大学		○		
	28 西が原みんなの公園				
	29 東京芸術大学	○			
	30 法政大学		○		
	31 国立劇場				○
32 小石川植物園					
33 浜町公園		○			
34 早稲田大学	○				
35 明治神宮外苑絵画館		○			

### 3-2 事例における〈参道〉の設定

詳細な調査対象として選出したそれぞれの閉領域の事例について、〈参道〉の存在を客観的に実証する。この実証は以下を論じることで達成できると考える。

1. ある道を閉領域と強い関係性をもつ道として着目する要因
2. その道における空間の様相と社寺参道の様相との類似性

これらを論じることにより、それぞれの閉領域の事例において着目した道空間は「〈参道〉」として設定することの妥当性が示され、その閉領域は〈参道〉をもつ閉領域であると客観的に認められるのである。

### 3-3 事例の分析

前節の観点を念頭にそれぞれの事例において分析を行い、〈参道〉の設定を行う。また表9と図15に示すように、事例は閉領域との関連性の基準としたそれぞれの道空間における現象ごとに列挙する。社寺参道であれば鳥居前の商店街の形成と境内林苑の樹木による演出が同じ参道上で複合してみられることがあるが、東京の都市空間においてはそのような異なる現象の複合はほとんどみられなかった。そのため、それぞれの現象ごとに事例を列挙して分析を行う。

表9. 〈参道〉をもつ閉領域の一覧

道空間における現象	閉領域	ページ
商店街の形成	早稲田大学	46-51
	東京芸術大学	52-57
	青山霊園	58-61
	日赤医療センター	62-65
樹木による演出	明治神宮外苑絵画館	66-67
	浜町公園	68-69
	教育の森公園	74-75
	上智大学	76-77
	法政大学	78-79
建物による配慮	国立劇場	80-83
資本の集中的投入	代々木公園	84-89





図15 <参道>をもつ閉領域の東京の都市空間における配置



## 〔早稲田大学〕

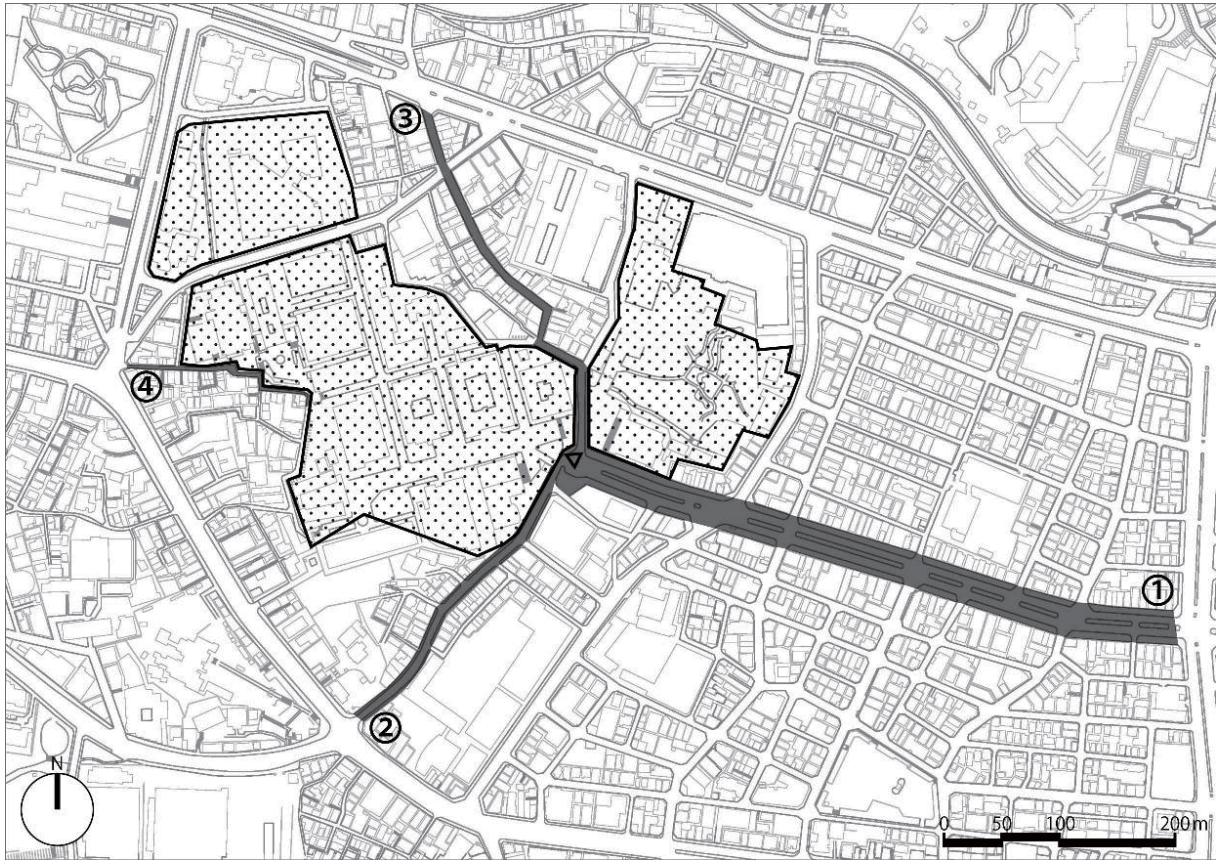


図 16 早稲田大学と＜参道＞

## ＜参道＞の設定

早稲田大学の周辺における実地調査の結果、＜参道＞としての可能性をもつ道として図 16 中に示す①～④の道に着目した。以下、これを＜参道＞として設定する要因を示す。

これらの道は東京の主要幹線道路から分岐し、都市における閉領域である早稲田大学の門へと到達する道である。①～③の道は新宿区によりそれぞれ「早大通り」、「早大南門通り」、「大隈通り」と道路通称名が設定されている。そして、新宿区の土地利用現況図から商業系用途を抽出して作成した図 17 をみると、これらの沿道には商店が並び、商店街が形成されていることがわかる。①～④の道における商店会の名称はそれぞれ、「早大通り商栄会」、「早大南門通り商店会」、「大隈通り商店会」、「早大西門体育館通り商店会」として新宿区商店会連合会に登録されている。これらの名称はいずれも早稲田大学に関連する言葉を含んでおり、①～④の道が早稲田大学と強い関係性をもつ道であることがわかる。

さらに①の道に関しては、道の中央にケヤキ並木が配置されている（図 18）。この並木は戦災により壊滅的な損害を受けた早稲田鶴巻町の戦災復興事業の中で形成されたものであり、戦前から早稲田大学の学生街として栄えた鶴巻町の中央を通り、早稲田大学正門へ

と続く大通りとしての演出効果をもたらしている。

以上の要因により、①～④の道は都市における閉領域である早稲田大学と強い関係性をもつと考え、その社寺参道の様相との類似性を検証する。

まず考えられるのは道空間に表出する閉領域の連想性である。早稲田大学の周辺が古くから学生街と呼ばれているのは、そのいたるところに大学を連想させる要素を認めることができるからであると考えられる。

図 19、22 は①～④の道における商店会の店舗業種を調査し、その構成比と分布を示したものである。これをみると業種の中でもいくつか突出して割合が高いものがあることが分かる。特に不動産業と印刷・製本業は大学と関わり深く、大学周辺ならではの業種であると考えられる。また、全体における割合は高くはないが、他に大学と強い関わりをもつと考えられる業種として、書店やペナントショップなどがあげられる（図 25）。飲食関係の業種については割合が高く出ているが、これらが都市における大規模集客施設周辺に集中することは一般的な現象であり、この事例において特異な点ではない。しかし、それらの店舗の様相をよく観察すると、学生割引のような大学に関連したサービスを行っているものが少なくない。以上のように閉領域である大学へと到達する道における商店街の店舗の様相を観察してみると、そこには大学の

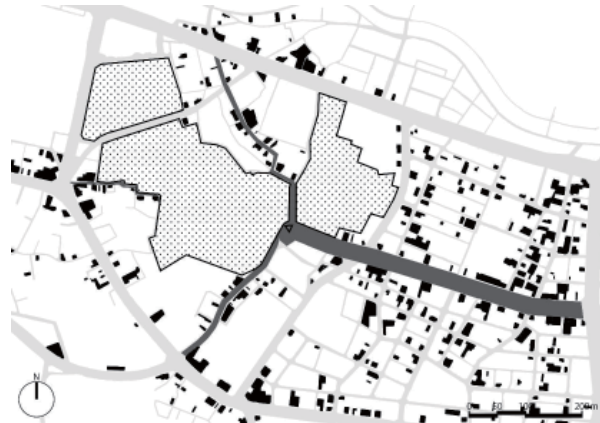


図 17 商業系土地利用分布  
出典：新宿区土地利用現況図より作成



図 18 樹木の分布  
出典：Google マップより作成

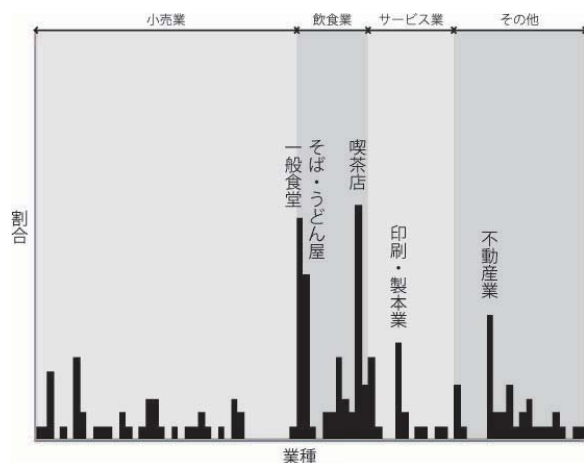


図 19 商店街の業種構成比



存在が連想されるのである。

また、商店街の装飾にもこの連想性が見て取れる。それが最も顕著なのは②の道（図20）であり、街路灯には学生へ向けた広告旗が設置されている。店舗の中には学生サークルの広告を店頭に掲示するものや、大学生協との提携関係を明示した看板を掲げるものもみられる（図24）。この道は学生の往来が①～④の道の中で最も多く、この人々の往来も道空間を飾る一要素として考えられる。

次に道空間の指向性についてである。①は外苑東通り、②④は早稲田通り、③は新目白通りといずれも東京の主要幹線から分岐して早稲田大学の門へと到達する道である。1章において論じたように到達する道は前方にのみ目的をもつときの道のつくられ方であり、指向性をもつといえる。実際に最寄り駅が幹線道路上にあるため、多くの人々が徒歩でこの経路をたどって閉領域である大学へと到達する。またこの指向性は連想性とも不可分である。前述したように、道に大学の存在が連想されているからこそ前方に目的をもつことが認識されるのである。物理的な空間の様相が指向性を表出している要素としては大隈講堂の時計塔がアイストップとなり目的の方向性を示している。これが認められるのは②の道だけであるが、道をたどっていくとある地点で時計塔が見え始め、目的の方向性とそこへの近接を効果的に演出している。図21からわかる通りこれには時計塔が見えるか見えないかで道に分節が生じており、この重層性も演出効果の一因であるといえる。

その他の重層性に関しては、新宿区により道路通称名を設定されている①～③の道には幹線道路から分岐する入口に設置された標識によって境界が示されていることが挙げられる（図23）。特に顕著なのは③の道の入口であり閉領域へ至る道程に分節を生んでいる。しかし①③の道ではその入口から大学の門に至るまでに目立った分節性は認められない。



図20 大隈講堂時計塔の視認性

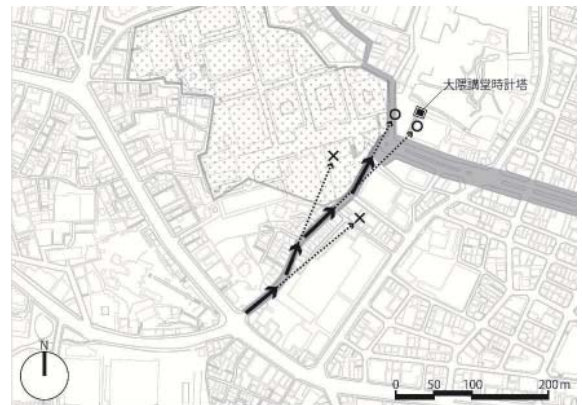


図21 商店街の業種構成比

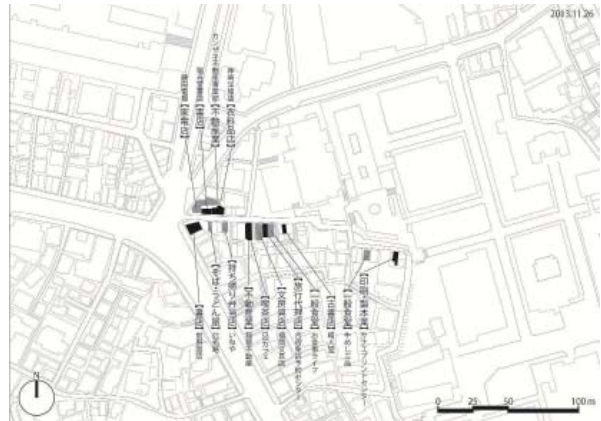
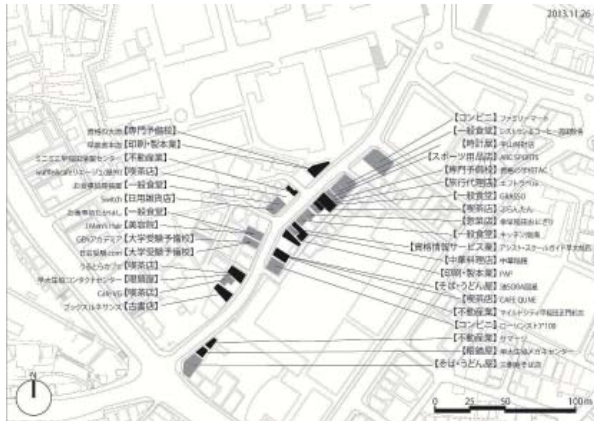
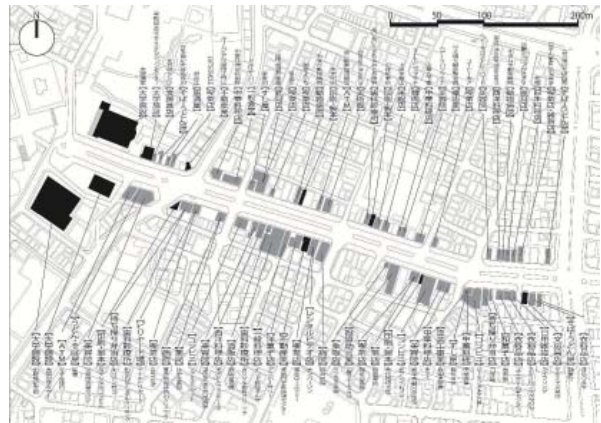
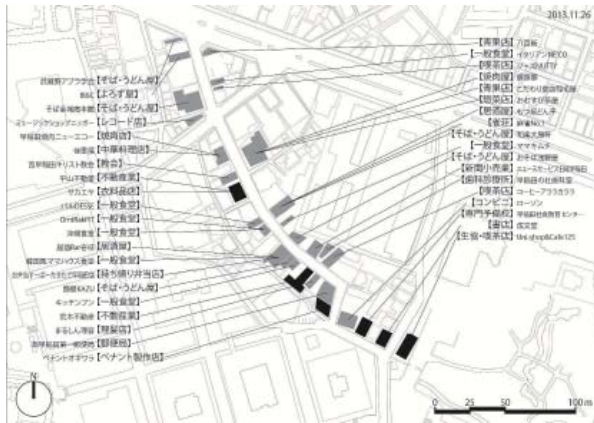


図 22 商店街各店舗の分布（図中の黒塗は大学の関連業種）



図 23 商店街入口



図 24 大学生協提携の不動産業



図 25 大学と関連性をもつ店舗



### ＜参道＞の形成過程

早稲田大学は1882年に大隈重信が創立した東京専門学校が前身であり、創立当初から大隈の別荘に隣接していた現在の場所に校舎が建設されていた。図26の1883年の早稲田大学周辺の地図を見ると、学校の敷地は現在より小さく、周囲は田畑で覆われていて市街化されていないことがわかる。

本研究で着目した道における商店街の形成過程については、早稲田大学百年史にその記述がある<sup>[10]</sup>(pp333-334)。

何と言っても我が学苑の学生達にとっても最も結び付きの深い町は、学校周辺の鶴巻町であり戸塚町であった。慶応義塾大学や東京大学は、三田、本郷という古い町を周辺にもって誕生したが、早稲田は田圃の中に生まれた大学で、大学を中心に、学生を顧客にして、周辺の商店街が形造られたところにその特色があり、文字通り大学の街、学生の街だったのである。

これを見ると東京の市街地が西方に拡大していった明治時代において、既に周辺が市街化していた慶応義塾大学や東京大学とは異なり、この早稲田の地域は大学を中心として市街化が進み、学生向けの商店が多く立地する学生街が形成されていったことがわかる(図26、27、28)。

今和次郎は考現学の一環として1926年の早稲田大学周辺の商店について詳しく調査しており<sup>[11]</sup>、当時の商店街の様子を知ることができる。これを見ると早稲田大学の周辺には多くの商店が立地していることがわかる(図29)。商店は特に鶴巻町に多く、面的に分布しているが、これは鶴巻町には多くの学生の下宿屋があり、当時の学生の多くが下宿住まいであったことに由来する。本研究で着目した②～④の道についてもその道の形態は現在とほとんど変わっておらず、商店街も同様に形成されていたことがわかる。

しかし、鶴巻町を中心に学生街として栄えていた早稲田大学の周辺は戦災によって壊滅的な損害を受け、戦前のような活気のある学生街が復興されることはなかった。鶴巻町の中央通りには戦災復興区画整理事業により並木が設置され、現在では商店街が形成されてはいるが、地下鉄などの交通機関の発展も伴い、戦前に「東京の大世相のひとつ」<sup>[11]</sup>(p310)ともいわれた学生街の雰囲気は失われている。



图 26 1883 年早稻田大学周边

出典：清水靖夫 (1983) 『明治・大正・昭和 東京 1 万分 1 地形図集成』



图 27 1909 年早稻田大学周边

出典：清水靖夫 (1983) 『明治・大正・昭和 東京 1 万分 1 地形図集成』

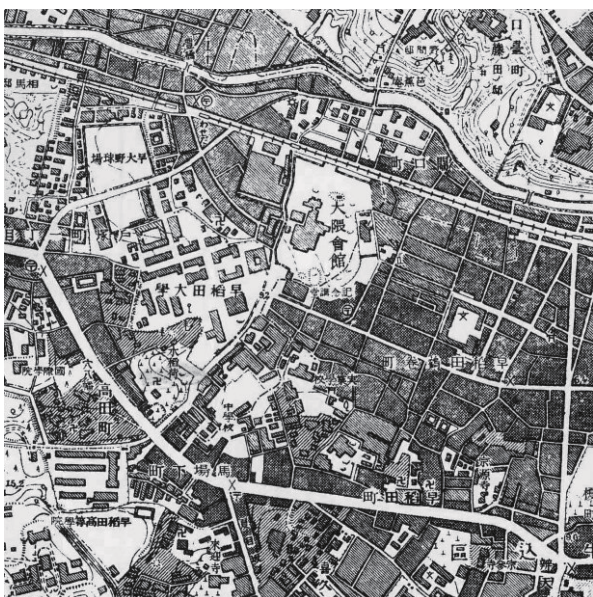


图 28 1937 年早稻田大学周边

出典：清水靖夫 (1983) 『明治・大正・昭和 東京 1 万分 1 地形図集成』



图 29 1926 年の商店街調査

出典：今和次郎 (1971) 『今和次郎全集 第一卷 考現学』 317 項



## 〔東京芸術大学・谷中霊園〕



図 30 東京芸術大学・谷中霊園と〈参道〉

## 〈参道〉の設定

東京芸術大学と谷中霊園の周辺における実地調査の結果、〈参道〉としての可能性をもつ道として図 30 中に示す①②の道に着目した。以下、これを〈参道〉として設定する要因を示す。

これらの道は東京の主要幹線道路である言問通りから分岐し、都市における閉領域である東京芸術大学と谷中霊園の門へとそれぞれ到達する道である。特に①の道に関しては複数の沿道建物に図 31 のような標識が設置されており「芸術の小道」と名付けられている。台東区の観光情報誌<sup>[12]</sup>でも紹介されており一般的に認知されている名称のようである。②の道には名称はつけられていないが、谷中界限に関する既往研究<sup>[13]</sup>によると墓参者向けの店と職人の店が立ち並ぶ道として特性づけられている。そして台東区の土地利用現況図から商業系用途を抽出して作成した図 32 をみると、これらの沿道には商店が並び商店街が形成されていることがわかるものの、商店会のような組織は認められない。これらが東京芸術大学・谷中霊園に端を発するものであることは明らかであり、①②の道が両者とそれぞれ強い関係性をもつ道であると考え、その社寺参道の様相との類似性を検証する。



まず考えられるのは道空間に表出する閉領域の連想性である。図 33、34 は①②の道における商店の店舗業種を調査し、その分布と構成比を示したものである。まず分布をみると、ギャラリーや画材店などの芸術や工芸を連想させる業種が多いことが分かる。そして図 33 中に黒塗りで示したこれらの業種は①②の道にまんべんなく分布している。そこで①②の道は言問通りで分断されているものの一連の商店街であると考えて沿道の全店舗の業種構成比を算出してみると、やはりギャラリーの割合が突出していることがわかる。他には喫茶店と和菓子店が高い割合を示しているが、これらは谷中霊園や東京芸術大学、上野公園を訪れる人々を客層とする飲食店であると考えられる。これらの飲食店の様相をよく観察すると、芸術を店のコンセプトとして店舗設計や絵画販売などのサービスを行っている喫茶店が見られる。また全体における割合は高くはないが、他に芸術や工芸と関連性をもつと考えられる業種として、額装店や画材店などがあげられる。

また、特に①の道で顕著であるが、商店街の装飾にも芸術を連想させる要素が見て取れる。沿道の建物に設置されている図 31 の標識はパリの街路標識を模しており、芸術の都であるパリを模倣することで道に芸術の雰囲気をもたらそうという意図が見受けられる。また、それぞれの建物の外観に目を向けても、ヨーロッパ風の意匠がみられ、周囲とは異質



図 31 建物外壁の通り名標識

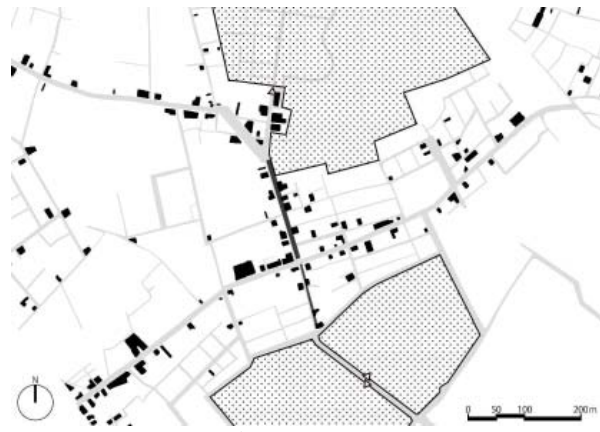


図 32 商業系土地利用分布

出典：台東区土地利用現況図より作成

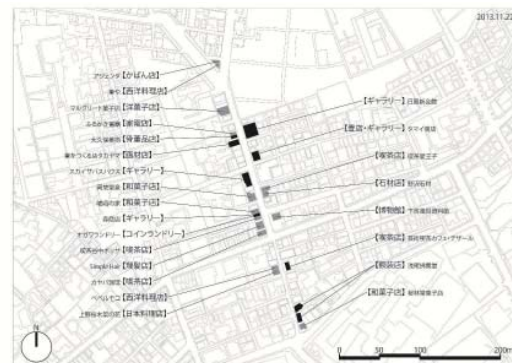


図 33 商店街各店舗の分布

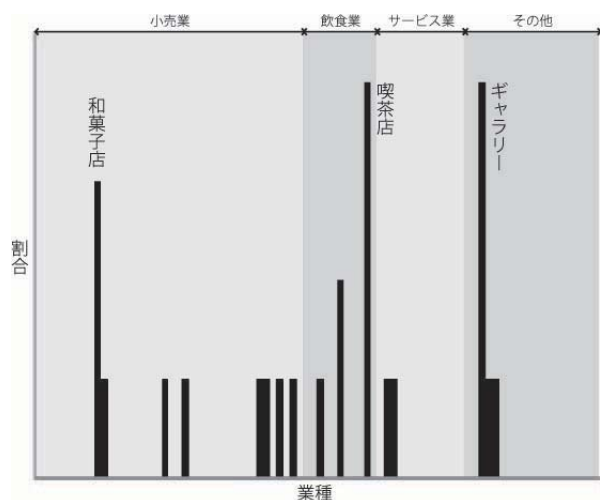


図 34 商店街の業種構成比

な雰囲気をもつ道空間が形成されている。

一方、谷中霊園と①②の道の関連性を考えると②の道に墓石店が一軒あるのみであり、霊園を連想させる要素はあまり認められず、芸術や工芸を連想させる要素の方が圧倒的に多い。

次に道空間の指向性についてである。①②の道ともに東京の幹線道路である言問通りから分岐して、前者は東京芸術大学へ後者は谷中霊園へと到達する道ではあるが、言問通りを起点としてそれぞれの閉領域へと到達する経路をたどる人々は少ないようである。現地では人々の流れを観察してみると、上野駅方面から日暮里駅・千駄木駅方面への流れとその逆の流れはどちらの方が優位であるとは言い難く、①②の道は上野公園エリアと谷根千エリアをつなぐ道として使われているようである。このように明快な指向性をもつとは言い切れないものの、これらの道には前述したように芸術を連想させる要素が多く見られ、東京芸術大学・上野公園エリアとの強い関係性をもつ道空間であると考えられる。

重層性に関しては、言問通りを境に①②の道の様相が異なることがあげられる。前述の既往研究でも両者は異なる特性をもつエリアとして述べられており、①の道が属するエリアは「比較的大きめの住宅」、②の道が属するエリアは「台地の上の寺院群と門前の住宅」と分けられている。特に後者は戦災を免れたことにより戦前からの町割りや建物が図 35 のようにほとんどそのまま継承されており、前者よりも歴史的な趣を感じられるエリアである。これらエリアの様相ははっきりと異なるものの、①②の道空間は芸術という共通した連想性をもつため一連の道空間として認識することができるのである。特に図 36 に示す歴史的な銭湯を改修してつくられた現代アートギャラリーは、まちの歴史性と道空間がもつ芸術の連想性が融合している興味深い事例である。

以上により、①②の道には明快な指向性はみられないが、道空間に強く芸術の連想性が表れていることから東京芸術大学と上野公園へ至る〈参道〉であると設定する。

#### 〈参道〉の形成過程

上野桜木や谷中には江戸時代より天王寺をはじめとする多くの社寺が位置しており、着目した道や現在「初音の道」と呼ばれる日暮里方面へと続く道を中心に、参拝者向けの店舗が並ぶ門前町が形成されていた。そこには和菓子や工芸品、寿司などの多くの職人が住んでおり、技芸の文化が根付いていた。その後明治になって東京芸術大学が開学し、多くの芸術を学ぶ学生が住むようになったことや、戦災を免れたことで現代にまでその文化が

継承されてきた。この地域の特性に着目し、芸術を活用したまちづくり活動を始めたのが「谷中学校」である。

谷中学校は、東京芸術大学建築科前野研究室によって行われた谷中を対象とした調査研究が元となっており、この調査に参加した学生が中心となりまちの人とともに1989年に設立したまちづくりグループである。谷中学校の活動は多岐にわたるが、特にまちの様相に強い影響を与えたのが歴史的建物の保存・再生活用の提案と谷中芸工展の開催である。歴史的建物の保存・再生活用で代表的なものが、前述した銭湯の再生である。ここではオーナーの、建物をまちの風景として残したい、銭湯として果たしてきたコミュニケーションの場としての役割を持たせたいという願いを現代アートギャラリーへの改修という手法で実現した。同様にいくつかの歴史的建造物をギャラリーへと改修していったが、その中の一つである建物の開館記念に行われたのが谷中芸工展である。当初の谷中芸工展はそこでまちの人の作品を展示する小規模なものであったが、1994年より「まちにとびだす谷中芸工展」と銘打ち、谷中のまち中を展覧会場とする大規模なものとなった。

このような谷中学校を中心とした芸術とまちづくりの活動によって、1990年代から谷中界隈にギャラリーや手作り雑貨店や工房ができ始めた。これによりますますまちの様相に芸術との関連性が強く表れていき、若手芸



図 35 歴史的建造物



図 36 銭湯のギャラリーへの改修

術家の育つ場としての地域の特性が形成されてきたのである。

そして1997年には、谷中界隈の主要ギャラリーと、「上野の森公園」、「東京芸術大学大学美術館」が協働して「art—Link上野—谷中」が開催されるようになる。このイベントは「美術館や博物館が集まる上野公園と、隣接する谷中、根津、千駄木地域で拠点に活動するギャラリーなどをアートでつなぐ」という趣旨の下に毎年開催され現在にまで続いている。図37は2013年に行われたイベントに参加したギャラリーなどを地図に示したものであるが、着目した道を含む図37中に示した上野公園から日暮里方面をつなぐ道を中心にイベントが展開していることがわかる。

谷中界隈に芸術のまちとしての土台を築いた谷中学校は2001年に休校し、二つのNPOへと分離していった。一方は専門的な立場から地域のまちづくり活動支援を目的とする「ひとまちCDC」（2009年解散）、一方は「歴史的な建物の維持とその活用の仕組みづくり」を目的とする「たいとう歴史都市研究会」である。

本研究で〈参道〉として着目した道の形成要因を調査したところ、そこには東京芸術大学の影響が強くみられた。この事例では、都市における閉領域である東京芸術大学と江戸時代以来の技芸の文化を継承した谷中という周辺環境が相互扶助的な関係性を形成しており、それが着目した道の様相に表れていたのである。



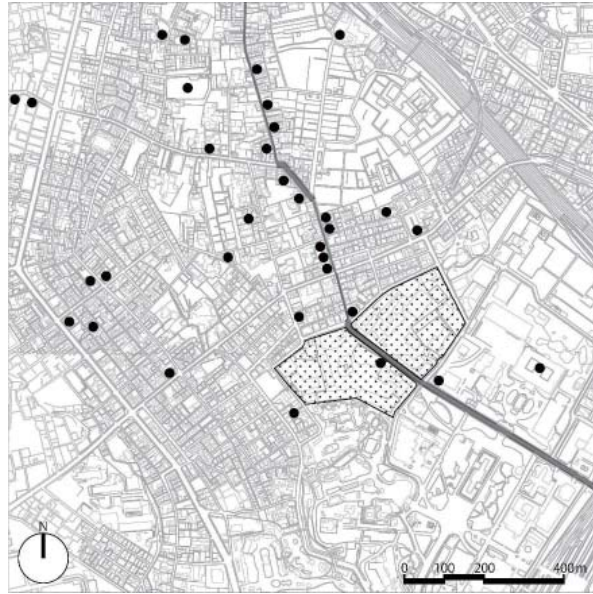


図 37 ギャラリーの分布

出典：art-Link 上野-谷中(2013) ガイドマップより作成

〔青山霊園〕

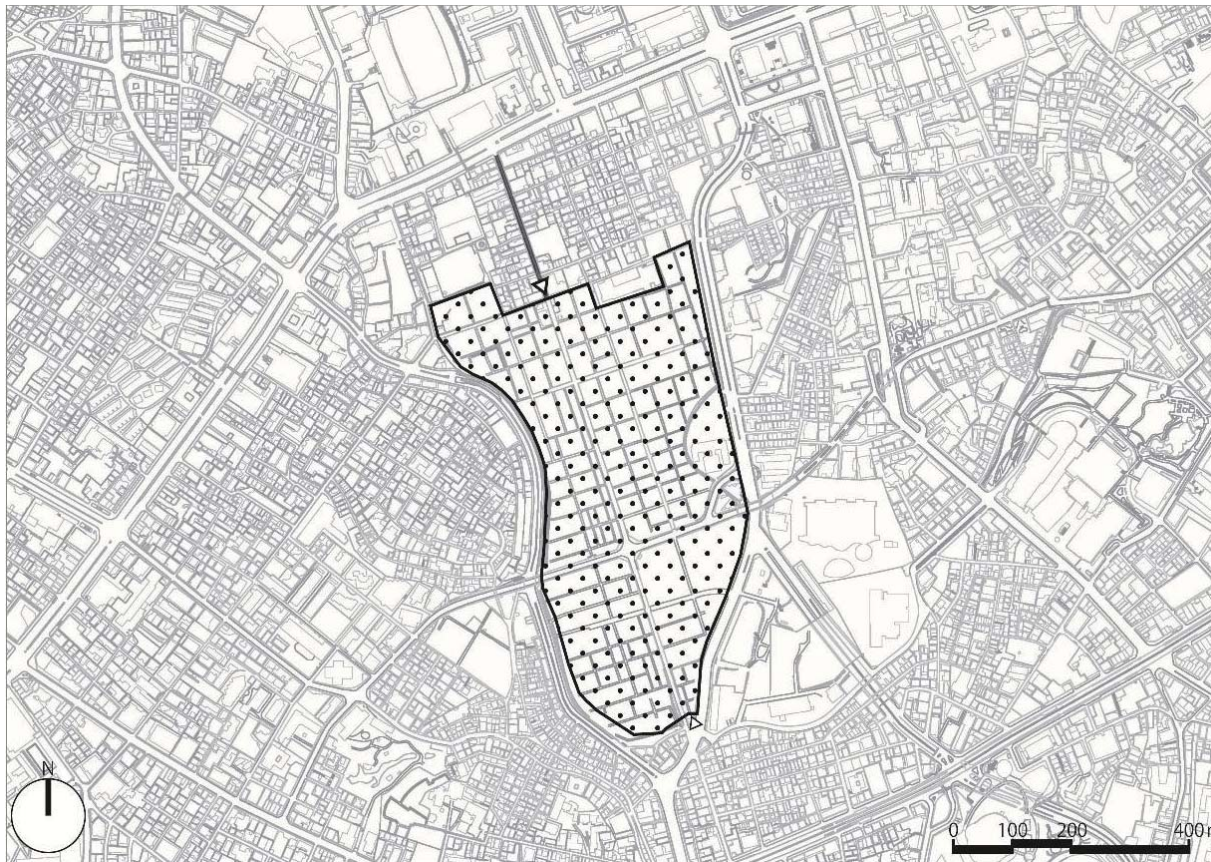


図 38 青山霊園と〈参道〉

〈参道〉の設定

青山霊園の周辺における実地調査の結果、〈参道〉としての可能性をもつ道として図 38 中に示す道に着目した。以下、これを〈参道〉として設定する要因を示す。

これらの道は東京の主要幹線道路から分岐し、都市における閉領域である青山霊園の門へと到達する道である。図 38 中の道は港区により「墓地通り」と道路通称名が設定されている。港区の土地利用現況図から商業系用途を抽出して作成した図 39 をみると、商業系用途は青山通りなどの幹線道路を中心に地域全体に分布しており、図中の道に集中的に集まっているとは言い難く、商店会のような組織も認められない。しかし、青山霊園を紹介する文献には「参道ともいふべき青山通りからの道には石屋、花屋、茶屋などがある。青山霊園入口右に管理事務所がある。明治五年、神仏分離による神葬墓地の必要が始まりで、美濃部上藩青山家下屋敷跡である。」<sup>[14] (p220)</sup> という記述が見られ、図中の道が古くから青山霊園と強い関係性をもつ道であることがわかる。この記述の中でまさに「参道」という言葉が使われていることは図 38 中の道と青山霊園の関係性を考察する上で非常に興味深い。



まず考えられるのは道空間に表出する閉領域の連想性である。図 40、41 は対象の道における商店の店舗業種を調査し、その分布と構成比を示したものである。分布をみると、石材店や花店などの霊園を連想させる業種が多く、先ほどの文献の記述とも合致していることがわかる。沿道の全店舗の業種構成比を算出してみると、やはり花屋と石材店の割合が突出していることがわかる（図 42）。他には日本料理店と西洋料理店が高い割合を示しているが、青山地区は一般的に商業地区であり飲食店も多く存在するため、この道に固有な特性であるとは考えられない。これらの飲食店の様相をよく観察してもそこに霊園との関連性は見られない。また全体における割合は高くはないが、他に霊園と関連性をもつと考えられる業種として葬儀屋の営業所などがあげられる。

次に道空間の指向性についてである。対象の道は東京の主要幹線である青山通りから分岐して青山霊園の門へと到達する道である。1 章において論じたように到達する道は前方にのみ目的をもつときの道のつくられ方であり、指向性をもつといえる。実際に最寄り駅が幹線道路上にあるため、多くの人々が徒歩でこの経路をたどって閉領域である霊園へと到達する。またこの指向性は連想性とも不可分である。前述したように、道に霊園の存在が連想されているからこそ前方に目的をもつことが認識されるのである。そして図 43 に



図 39 商業系土地利用分布  
出典：港区土地利用現況図より作成

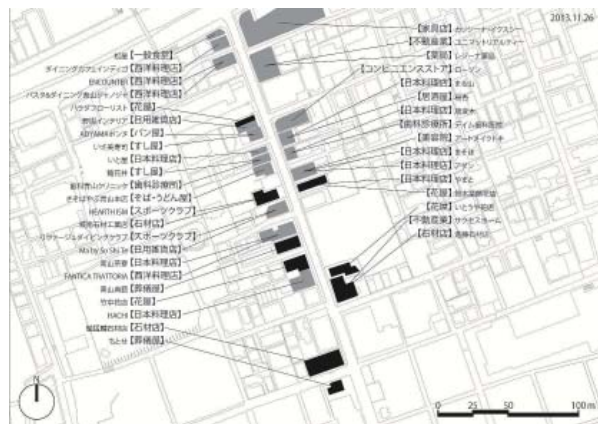


図 40 商店街各店舗の分布

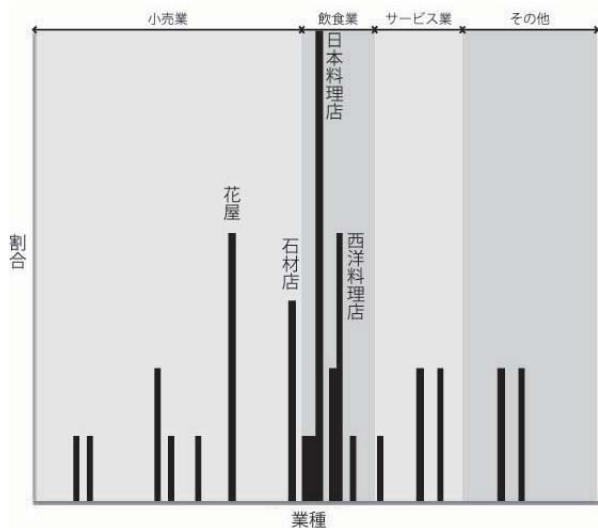


図 41 商店街の業種構成比



図 42 花屋（左）と石材店（右）

示すように対象の道に入ると、前方に霊園の緑を常に視認することができ、目的の方向性が明確であることも指向性の要因であるといえる。

重層性に関しては、幹線道路からの分岐により幹線道路と対象の道は性質の異なる道空間として閉領域へ至る道程に分節を生んでいる。しかし対象の道ではその入口から霊園の門に至るまでに明確な分節性は認められない。ただし、図 40 中に黒塗りで示しているのは霊園を連想させる業種の店舗であるが、これらの分布をみると青山通り側から霊園側に行くに従って密度が高まり、霊園の雰囲気徐徐に強く感じられるという道空間の様相を指摘することができる。

#### 〈参道〉の形成過程

青山霊園は 1872 年に開設された神葬式墓地が発端であり、日本で初めての公営墓地として知られている<sup>[15]</sup>。1903 年発刊の「新撰東京名所図会」で紹介されていることから（図 44）、青山霊園は古くから東京の名所として人々に認識されており、盆の時期には多くの墓参客でにぎわっていたようである。その様子については、1911 年に発刊の若月紫蘭による東京年中行事の「盆の墓参」に記述がある<sup>[16] (p133)</sup>。

試みに墓場の模様はどんなものかと青山墓地にのぞいて見ると、入口の茶屋や花屋は流石に一年中の書入日とて、お墓参りの客を迎ふる準備をさをさ怠りなく、死んで行く人の多きを喜んで迎へる商売気質のありありと見ゆるもあさましい。

このように青山霊園の入口には墓参客を対象とした商店が位置し、それらがにぎわう様子が読み取れる。この茶屋や花屋の正確な位置は不明であるが、1909 年の地図（図 45）を見ると着目した道の入口には都電の青山三丁目停留所が位置しており、多くの墓参客がこの道を通って青山霊園の入口を目指していたと考えられる。つまり着目した道には古くから青山霊園と関係の深い店舗が並んでいた可能性が高く、これが現在に見られる商店街へと継承されていると考えられる。





図 43 霊園の樹木の視認性



図 44 青山霊園の墓参  
出典：新撰東京名所図絵 (1903)



図 45 1909 年青山霊園周辺

出典：清水靖夫 (1983) 『明治・大正・昭和 東京 1 万分 1 地形図集成』に加筆

## 〔日本赤十字医療センター〕

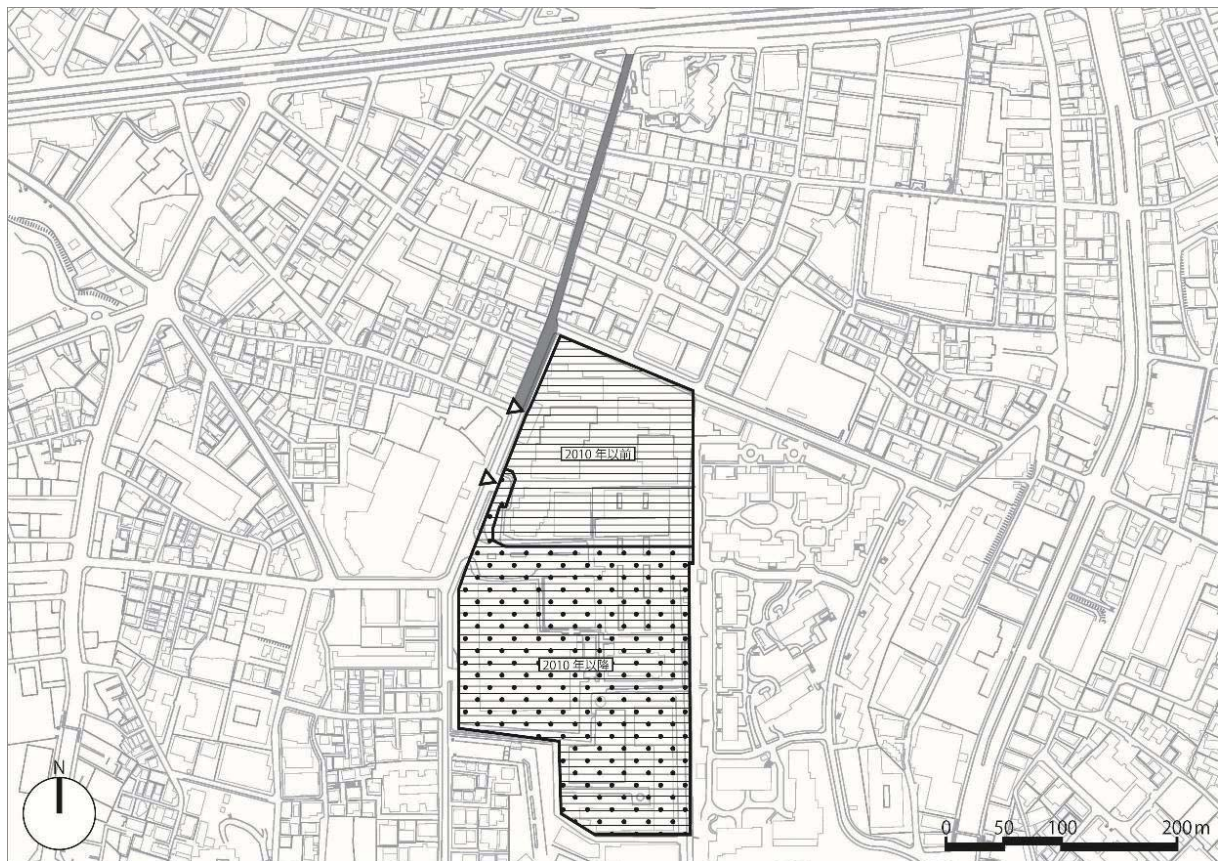


図 46 日本赤十字医療センターと〈参道〉

## 〈参道〉の設定

日本赤十字医療センター（以下、日赤医療センター）の周辺における実地調査の結果、〈参道〉としての可能性をもつ道として図 46 中に示す道に着目した。図 46 中の日赤医療センターの敷地領域に関しては、近年の病棟の建て替えに伴う縮小以前の敷地領域と着目した道との関係性を考慮し新旧を併記した。以下、これを〈参道〉として設定する要因を示す。

この道は東京の主要幹線道路から分岐し、都市における閉領域である日赤医療センターの門へと到達する道である。図 46 中の道は港区により「日赤通り」と道路通称名が設定されている。港区の土地利用現況図から商業系用途を抽出して作成した図をみると、この沿道には商店が並び、商店街が形成されていることがわかり、商店会の名称は「日赤通り商栄会」として港区商店街連合会に登録されている。これらの名称はいずれも日赤医療センターに関連する言葉を含んでおり、図 46 中の道が日赤医療センターと強い関係性をもつ道であると考え、その社寺参道の様相との類似性を検証する。

まず考えられるのは道空間に表出する閉領域の連想性である。図 48、49 は着目した道



における商店の店舗業種を調査し、その分布と構成比を示したものである。分布をみると、病院の門前に集中的に薬局が分布していることがわかる（図 50）。薬局は病院との関係性が強く病院の存在を連想させる業種であるといえる。沿道の全店舗の業種構成比を算出してみると、やはり薬局の割合は突出していることがわかる。他には日本料理店と居酒屋が高い割合を示しているが、この周辺には多くの高層集合住宅が立地しており飲食店も多く存在するため、この道に固有な特性であるとは考えられない。これらの飲食店の様相をよく観察してもそこに病院との関連性は見られない。また全体における割合は高くはないが、病院内に花屋と書店が設置されていることからこれらを病院と関連性をもつと考えられる業種とし図 48 中に黒塗りで示した。

また商店街の装飾として街路灯とそこに取り付けられている広告旗があるが、広告旗には図 57 にみられるように商店会の名称が記載されており日赤医療センターの存在を連想させる要素として考えられる。

次に道空間の指向性についてである。対象の道は東京の主要幹線である六本木通りから分岐して日赤医療センターの門へと到達する道である。1 章において論じたように到達する道は前方にのみ目的をもつときの道のつくられ方であり、指向性をもつといえる。またこの指向性は連想性とも不可分である。前述したように、道に病院の存在が連想されてい



図 47 商業系土地利用分布  
出典：渋谷区土地利用現況図より作成

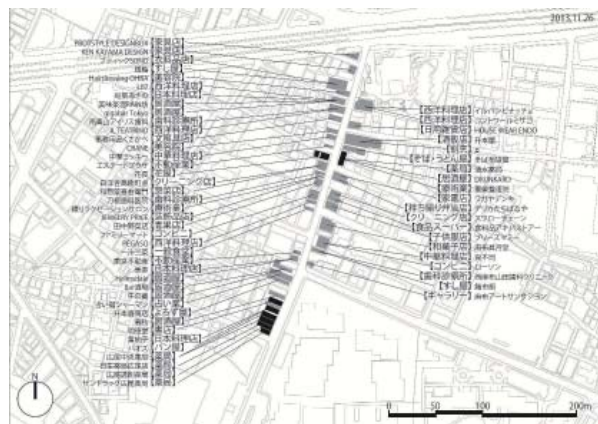


図 48 商店街各店舗の分布

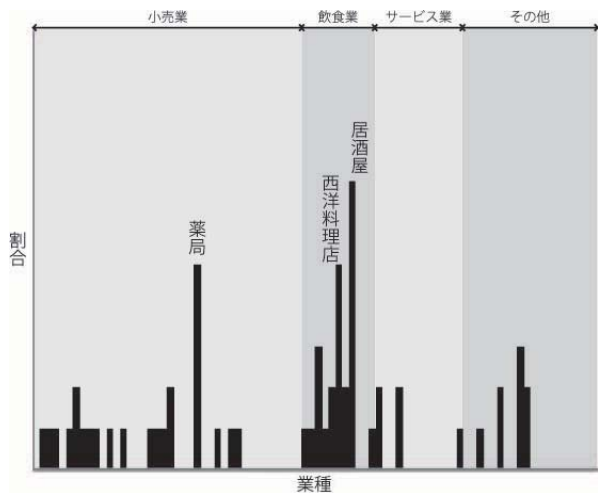


図 49 商店街の業種構成比



図 50 病院の門前薬局

るからこそ前方に目的をもつことが認識されるのである。しかし実際に病院を訪れる人々が着目した道を通っているかという点、最寄駅は六本木通りではなく、外苑西通りの広尾駅であるため、車で通ることはあっても徒歩でこの道をたどって閉領域である病院へと到達するとは考えづらい。現地で着目した道を観察していても人よりもタクシーなどの車の往来の方が激しく、病院直前のバス停までバスで来る訪問者が多いようである。つまり病院へ到達する経路と手段は複数あり、着目した道の指向性を感じながら病院へと到達する人々は訪問者の中でもあまり多くはないように思える。

重層性に関しては、幹線道路からの分岐により幹線道路と着目した道は性質の異なる道空間として閉領域へ至る道程に分節を生んでいる。さらに分岐点に設置された街路灯には通りの通称名が記載され意匠も他のものと差別化されており、日赤通りと幹線道路の境界を明示している。そしてその入口から病院の門に至るまでにおいては、図 48 をみるとわかるように門前に集中的に薬局が立地している区間の方が病院の存在をより強く感じられ、それ以外の区間と分節が生じていると考えられる。

どれほどの訪問者が指向性を体験しているかは疑問であるものの、以上に述べた空間の様相から着目した道を〈参道〉であると設定する。

#### 〈参道〉の形成過程

日赤医療センターの前身は日本赤十字病院であり、1891年の開設当時から現在地である広尾の高台に立地していた。ただし病院の敷地は病棟の高層化と周辺の再開発とで縮小しており、1984年頃に東側の敷地を売却し、図 46 に示した 2009 年の開発で北側の敷地を定期借地として提供している。

一般的に商店街は駅前などの人通りの多い道に形成されるが、着目した道を観察したところ、商店街が形成されるほど人通りが多い道であるとはいえない。病院の敷地が縮小を繰り返していたこともあり、この商店街の形成要因を過去の記録<sup>[17]</sup>から調査した。図 53 は 1966 年の日本赤十字病院の平面図であり、図 54 は 1936 年に撮影された正門の写真である（1966 年当時もほぼ同じ様子であることが文献に記載されている）。これを見ると、病院の正門が敷地の北西の角に位置していることがわかり、その門と背後の建物の構えから病院の正面がここに位置していたことがわかる。次に 1937 年の日本赤十字病院の周辺地図（図 52）を見ると、現在の青山通りと外苑西通りに都電が走っており、それぞれに「高木町」と「赤十字病院下」という停留所が位置していたことがわかる。つまり、着目した

道は1972年頃に都電が廃止されるまで、都電高木町停留所から病院の正門を目指す多くの人が利用する道だったのである。また、高木町停留所周辺は市街化も進んでおり、商店街が形成されるのに十分な人通りがあったと推測できる。そして現在のように商店街と病院の正面が分断されておらず、着目した道は現在よりも病院と強い結びつきをもっていた可能性がある。



図51 日赤通り

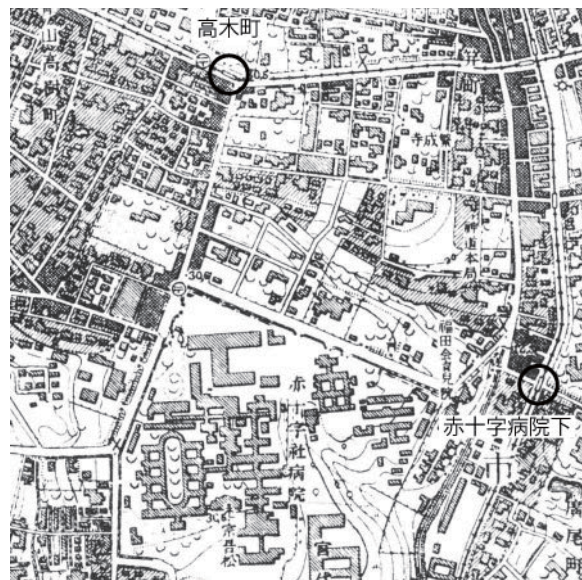


図52 1937年日本赤十字病院周辺

出典：清水靖夫(1983)『明治・大正・昭和 東京1万分1地形図集成』に加筆



図53 日本赤十字病院周辺

出典：日本赤十字社(1966)『日本赤十字社中央病院80年史』



図54 日本赤十字病院周辺

出典：日本赤十字社(1966)『日本赤十字社中央病院80年史』



## 〔明治神宮外苑絵画館〕

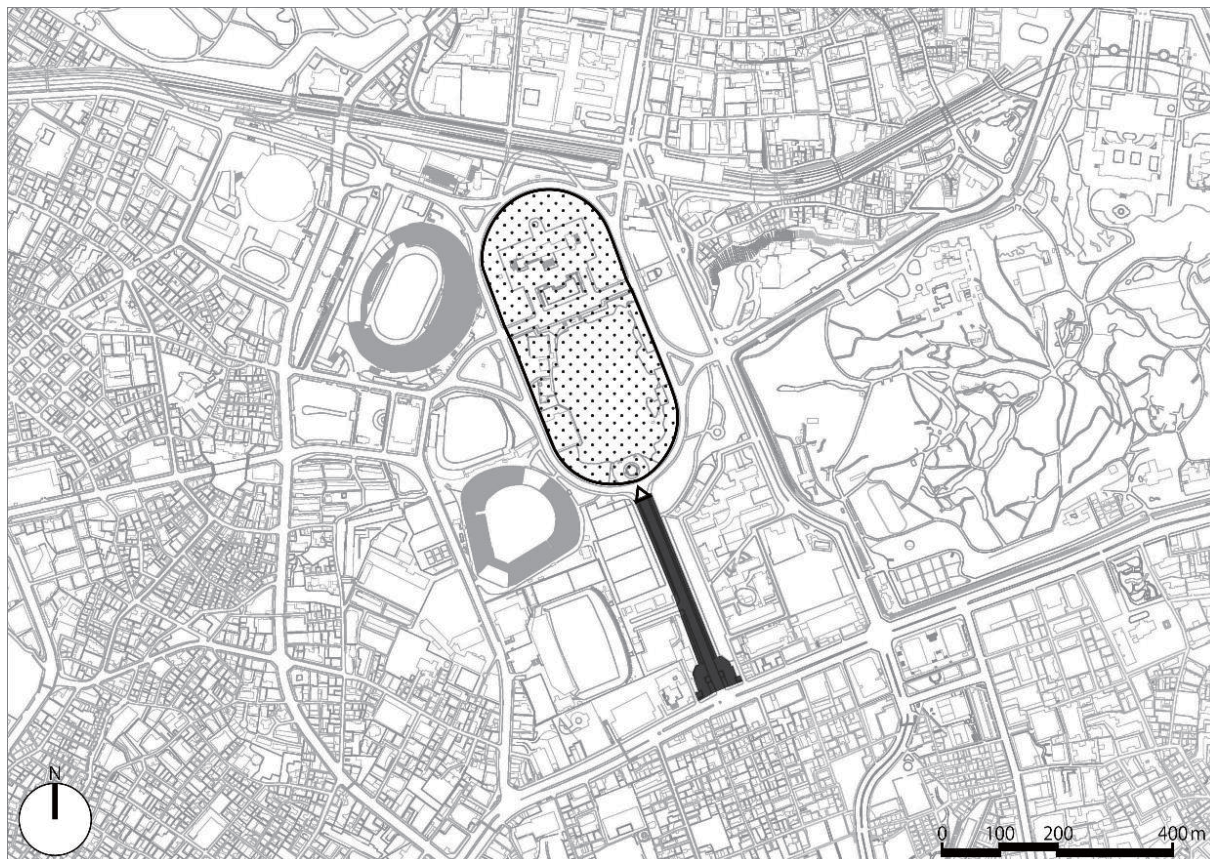


図 55 明治神宮外苑絵画館と〈参道〉

## 〈参道〉の設定

明治神宮外苑絵画館（以下、外苑絵画館）の周辺における実地調査の結果、〈参道〉としての可能性をもつ道として図 55 中に示す道に着目した。以下、これを〈参道〉として設定する要因を示す。

この道は東京の主要幹線道路であり外苑前駅や青山一丁目駅の位置する青山通りから分岐し、都市における閉領域である明治神宮外苑の諸施設を目指す多くの人々が利用する道である。航空衛星写真から樹木を抽出して作成した図 56 をみると、着目した道には幹線道路と外苑絵画館を結ぶように並木が配置されており、明らかな意図をもって公園と道が一体的に計画されていることがわかる。よって図中の道が外苑絵画館と強い関係性をもつ道であると考え、その社寺参道の様相との類似性を検証する。

着目した道におけるイチョウ並木と絵画館は「パースペクティブな街路空間の軸線上にアイストップとなる構築物を置く」<sup>[18] (p210)</sup> という西欧バロック都市計画にみられるヴィスタ景観を形成している。そしてこのヴィスタ景観はその壮麗さから「都市の顔を形成する」<sup>[18] (p210)</sup> とされており、特定の地域や都市を連想させるのである。つまりこの事例に

においては、道と閉領域における建物が一体となって明治神宮外苑周辺の地域を連想しているといえる（図 57）。また、幹線道路からの分岐と絵画館をアイストップとするヴィスタ景観は道空間の指向性を生む。そして幹線道路からの分岐点には図 58 のような喫茶店や石塁によって境界が示され、幹線道路と着目した道の様相の差異が強調されることで、都市の中で絵画館へと至る道程に重層性が生まれている。

### <参道>の形成過程

明治神宮外苑は川瀬善太郎、本多静六、原熙らの造園家によるマスタープランの下、1926年に竣工をむかえた。その中でイチョウ並木の実施設計を行ったのが折下吉延である。折下はこの設計のために九カ月にもわたる欧米出張を経験し、当時の日本ではほとんど知られていなかった欧米都市計画の知見を設計に反映させた。その代表が当初の設計案では二列であった並木を四列に変更したことであり、この設計とバッキンガム宮殿に向かうザ・モールにおけるスタイルとの類似性が越澤により指摘されている<sup>[19]</sup>。またこの設計は、佐々木によっても欧米都市モデルの受容の一例として指摘されており<sup>[20]</sup>、「明治神宮崇敬の信念を深厚ならしめ、自然に国体上の精神を自覚せしむる」<sup>[19] (p99)</sup> という明治神宮外苑の理念を空間的に連想させるために、壮麗さと威厳を感じさせる西欧都市モデルが適用されたと考えられる。



図 56 樹木の分布  
出典：Google マップより作成



図 57 イチョウ並木



図 58 入口の喫茶店



## 〔浜町公園〕

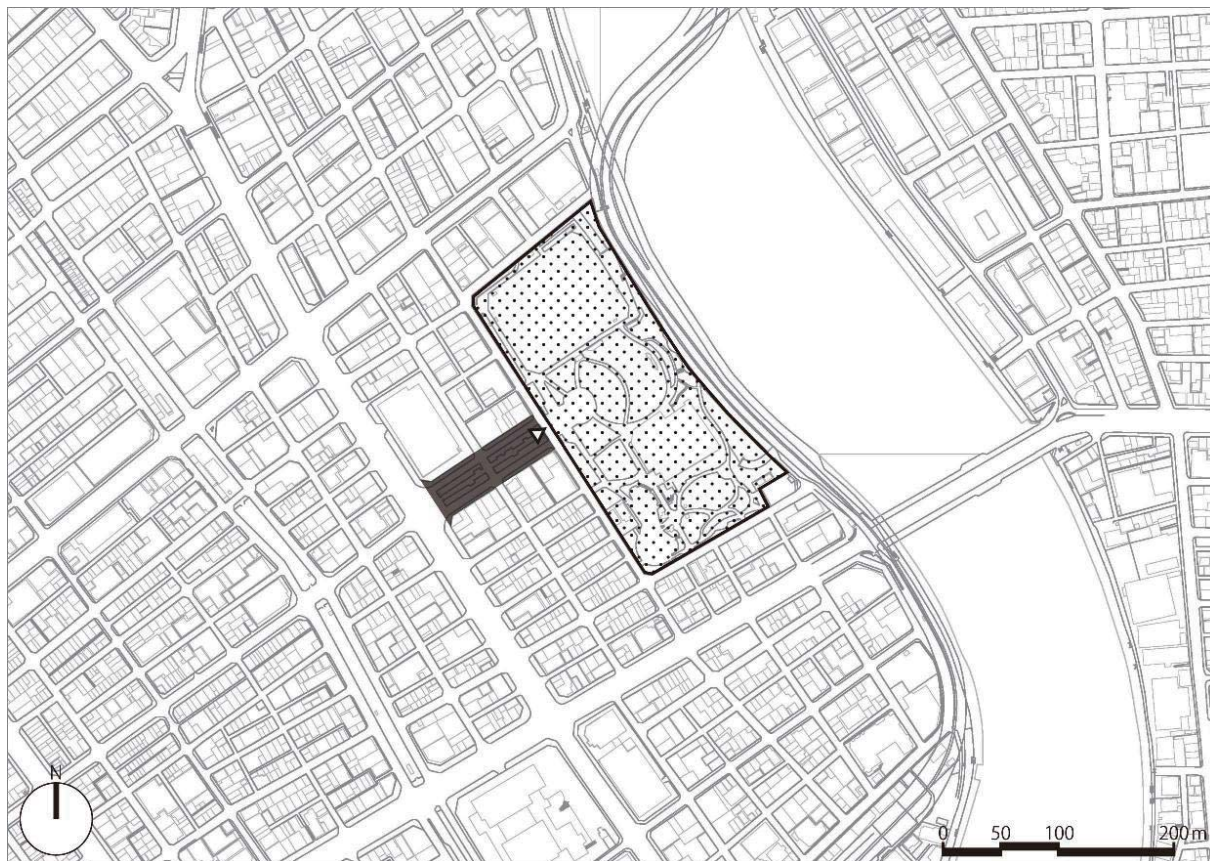


図 59 浜町公園と〈参道〉

## 〈参道〉の設定

浜町公園の周辺における実地調査の結果、〈参道〉としての可能性をもつ道として図 59 中に示す道に着目した。以下、これを〈参道〉として設定する要因を示す。

この道は東京の主要幹線道路である清洲橋通りから分岐し、都市における閉領域である浜町公園の門へと到達する道である。航空衛星写真から樹木を抽出して作成した図 60 をみると、着目した道には幹線道路と公園を結ぶように並木が配置されており、明らかな意図をもって公園と道が一体的に計画されていることがわかる。しかしこの道は沿道に位置する明治座に由来して「明治座通り」という道路通称名が中央区により設定されている。これは着目した道が地下鉄駅出入口と明治座をつなぐ道としての機能も有しているからであると考えられ、浜町公園との関係性を否定するものではないと考える。よって図 59 中の道が浜町公園と強い関係性をもつ道であると考え、その社寺参道の様相との類似性を検証する。

幹線道路である清洲橋通りから覗くイチョウ並木は公園内の緑へとつながり、その奥にある公園の存在を連想させる。また、幹線道路からの分岐と公園内の広場や樹木といった



目的の視認性は道空間の指向性を生み、それを並木の直線的配列が強めている（図 61）。そして幹線道路からの分岐点に設置された標識（図 62）によって境界が示され、幹線道路と着目した道の様相の差異が強調されることで、都市の中で公園へと至る道程に重層性が生まれている。



図 60 樹木の分布

出典：Google マップより作成

### <参道>の形成過程

浜町公園は関東大震災の復興事業の一環として隅田公園と錦糸公園とともに計画された三大公園のひとつであり、1929年に開園した。公園へと続くイチョウ並木の形成については佐々木の研究<sup>[20]</sup>により明らかにされている。図 63、64 は浜町公園の竣工当時の姿である。清洲橋通りに公園の正面を構えるという設計意図の下、通りにまで軸線をのぼし、それに対称形になるように平面計画が行われた。そして現在では失われているが軸線の終点には噴水と記念塔が設置されており、並木は四列で計画されていた。三大公園の計画が明治神宮外苑の設計を担当した折下吉延の指揮のもとに行われたこともあり、この視線の直進性と配置の対称性は明治神宮外苑をモデルとして設計されたようである。つまり、着目した道はヴィスタ景観の形成を意図してつくられたものだったが、後年の計画の上書きによってその形成要素が喪失、変容して現在の状態に至ったのである。



図 61 イチョウ並木



図 62 入口の標識



図 63 竣工当時の浜町公園

出典：越沢明 (2001) 『東京都市計画物語』p54 東京名所図会

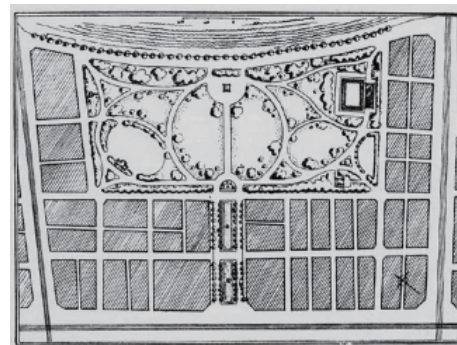


図 64 浜町公園計画図<sup>[20]</sup>

出典：復興事務局 編 (1931) 『帝都復興事業誌 建築篇・公園篇』73 項

### 日本におけるヴィスタ景観の参道的様相

明治神宮外苑と浜町公園において着目した道はヴィスタ景観の形成を意図して計画されたものであった。このヴィスタ景観はバロック都市計画に用いられる手法であり、本研究の論点である<参道>という日本古来の空間のあり方とは一見無関係に思える。しかし、既往研究によると参道の構成手法の中には「障りの連続」、「山あて」などのヴィスタ景観と類似性をもつ空間の様相が指摘されており<sup>[22]</sup>、両者の親和性は高いと考えられる。

ヴィスタ景観の公理として越澤は「アヴェニューの軸線上のヴィスタにシンボリックな記念建築物が置かれ、街路、並木、建物の渾然一体としたレイアウト」<sup>[18] (p86-87)</sup>としており、これが東京で実現したのは明治神宮外苑だけであると述べている。しかし、前述した浜町公園のように不完全ながらもその実現を試みた都市空間が東京には多く見られ、それを未熟さによる模倣の失敗としてではなく、日本文化への受容された際の変容としてとらえて考察を行っているのが平野<sup>[23]</sup>と佐々木<sup>[20]</sup>の研究である。

平野の研究では、ヴィスタ景観の変容を「構成不完全型」「要素欠落型」「役割変換型」「要素付加型」の四種類に類型化している。それぞれの類型の概要は表のとおりである。そして特に「役割変換型」と「要素付加型」に日本人によるヴィスタ景観の意識的変容であるとし、「連想的建造物を裸でさらすこと」の抵抗がその根本的な動機であると考察している。そしてこの変容の背後にある日本の伝統的な空間的思想として、日本庭園の技法である障り、重層構成、自然依存性などを挙げ、「ヴィスタ設計は、街路とその焦点の建築によって、都市内のみで街路景観を強烈に印象づける手法である。しかし、今迄、自然を抛り所としていたものが、にわかには建築物を抛り所とすることには思想的な困難」があり、その困難さが「障り」や「並木重視」によって調和されたとまとめている（表 10）。

佐々木の研究では、東京で試みられたヴィスタ景観の事例におけるその変容を詳細に分析しており、その要因を東京の都市構造に言及しながら考察している。

この研究の中で明治神宮に関しては、「バロックのデザインは、均質な空間に存在する特異点を幾何学的な線で連結することによって、幾何学的、形式的秩序を与えるという空間構成の idea に支えられたモデルである」のに対し、「絵画館とアプローチ、競技場とアプローチ、というように、要素のセットが完結した図像として、全体を支配する形式的秩序をもたないまま、連結されているように見える」と述べている。つまり越澤が明治神宮外苑はヴィスタ景観が実現した唯一の事例であると述べているのに対し、バロック都市計画の手法の一要素としてのヴィスタ景観の原理にまで立ち返ると、「シーンは正確に再現

されるが、ヴィスタのネットワークを構成すること」が欠落しており、完全なバロック都市計画におけるヴィスタ景観とは異なるものであると指摘している。

浜町公園に関しては、「シンメトリーへの細かい配慮が読み取れる」ものの、「実際の景は、道路幅員と延長、および焦点の建造物の大きさのバランスのために、十分絞りこみの利いたヴィスタ景にはなっていない」と述べている。

これらの事例に加え、その他いくつかの事例の分析と合わせて、日本におけるヴィスタ景観の受容について「デザインの型」、「都市構造との関係」、「景の実体化の特徴」の項目ごとにまとめられている。それぞれの詳細な引用は表 11 に示す。

佐々木はこの日本におけるヴィスタ景観の変容の要因として、東京の「独立性の高い特異点的な場の景を内包し、明確な幾何学的都市形態の型を持たない都市構造」を挙げている。そしてこの都市構造によって、ヴィスタ景観という「文化的に不連続、異質なデザインを既存都市の秩序を破壊せずに、特異点的な場の景として挿入すること」が可能となったと述べている。

これらの既往研究で指摘されたヴィスタ景観の変容を本研究の文脈でとらえるとそこに

表 10. 平野の研究によるヴィスタ景観の変容の指摘

類型	特徴	特徴を説明する引用文
構成不完全型	軸線のずれ	街路の軸線と象徴的建造物の軸が、ずれたり傾いたりしている
要素欠落型	絞りの不完全	絞り(視線を絞る要素)の欠落及び不連続
	アイストップの不完全	アイストップがないもしくはその効果が弱い
役割転換型	並木重視	象徴的建造物を目立たせる脇役であるはずの並木が逆に重視され、本来主役であるはずの象徴的建造物を見え難くしている
	日本庭園風植樹	並木で絞りの効果を出すべき所に日本庭園風の植栽が施され絞りの役割を失い、日本風を演出する役割に転換
要素付加型	ロータリー植樹	「障り」の混入、象徴的建造物の前のロータリーに植樹
	ファサード平行列植	「障り」の混入、象徴的建造物のファサードに平行に植樹
	樹木散在	「障り」の混入、象徴的建造物の前に樹木を散在させる

表 11. 佐々木の研究によるヴィスタ景観の変容の指摘

変容の項目	変容の特徴を説明する引用文
デザインの型	デザインの型が表象する権威主義的な特徴が極めて明解であるので、特定の建築に対してこうした象徴性を付与するためにデザインの型を利用した
都市構造との関係	都市形態上の位置づけをもたず、場所の特性を強調するための独立性の高い場の景の型として受容された
景の実体化の特徴	都市形態上の位置づけを持たないために、焦点へのアプローチの短さに代表される空間のプロポーションの違いによって、パースペクティブな印象が十分得られない
	焦点への視線の絞り込みは並木によって行われ、オリジナルでは景の重要な構成要素である沿道の連続した建物は欠落している
	一点透視的な空間認識が実体化されたものである景の構図上の特徴として受容するのではなく、軸線を有したシンメトリーな平面図のパターンとして解釈された



参道的様相との類似性が見られると考える。

本研究では道空間が参道的様相をもつ要因は連想性・指向性・重層性にあるとして分析を行っている。そこで、本来のバロック都市計画におけるヴィスタ景観を形成する道空間についてこれら三つの性質は表れているのかを考察する。まずは連想性についてであるが、前述したようにヴィスタ景観はその壮麗さから地域や都市を連想させるものであり、連想性をもつ道空間であるといえる。次に指向性についてである。沿道建物と並木、そしてアイキャッチとなるランドマークにより形成されるパースペクティブな景観は、前方に明快な視線の焦点を設定し、道空間に指向性を与えるといえる。しかし、本来のバロック都市計画におけるヴィスタ景観は都市空間に設定された複数の焦点とそれらをつなぐ街路のネットワークの中に位置付けられなければいけない（図 65）。このネットワークの中でのヴィスタ景観を考えると、ヴィスタ景観の焦点は前方にだけあるのではなく後方にも存在するのである。それらの焦点の規模や意匠、視点場からの距離などによって、その印象の強さは変化し、焦点と焦点をつなぐ道に異なる向きの指向性を生むと考えられる。これは社寺参道が唯一の終着点をもち、一連の道空間が常に同じ向きの指向性をもっていることとは異なっている（図 66）。つまり、指向性に関しては道空間の部分的に認めることはできるが、一連の道空間で統一された指向性があるとはいえないのである。そして重層性に関してである。重層性はひとつの焦点から空間が段階的に分節されていくときに見られる空間の性質であるため、バロック都市計画における焦点と焦点をつなぐという道のあり方にはみられないと考えられる。

このように連想性と部分的な指向性を道空間に生むヴィスタ景観であるが、本研究では日本で実現されたヴィスタ景観をく参道>の事例として選出した。それはなぜなら、ヴィスタ景観が日本文化に流入し、平野や佐々木が指摘するように日本の変容をきたした時、指向性が強化され、新たに重層性を獲得したと考えるからである（図 67）。

この過程の最も大きな要因は佐々木が指摘するように、ヴィスタ景観が「都市形態上の位置づけをもたず、場所の特性を強調するための独立性の高い場の景の型として受容された」ことである<sup>[20]</sup>。なぜならこれによって多焦点の中に位置づけられていたヴィスタ景観の焦点が一つになったからである。焦点が一つになったことで道空間の指向性の向きが統一されたのである。さらに明治神宮外苑や浜町公園のようにアイキャッチとなる構造物は幹線道路から離れたところに設置され、そこへ至る道は幹線道路から分岐し、街区の奥へ分け入るように作られた。これは社寺参道のつくられ方と非常に類似している。そし

て、ヴィスタ景観が形成される道は周囲から独立性の高い場となり、焦点となる都市施設へ至る道程に空間的分節が生じ、重層性が生まれるのである。これに加え、平野が指摘する「障り」や「並木重視」といった伝統的な空間設計手法が焦点の存在感を希薄にし、「見えざる深さ」<sup>[5] (p219)</sup> が演出されることで参道的様相への類似性が強化されているのである。

以上の考察から、バロック都市計画におけるヴィスタ景観は日本における変容を経て参道的様相へとを帯び、＜参道＞を形成していると考えるのである。

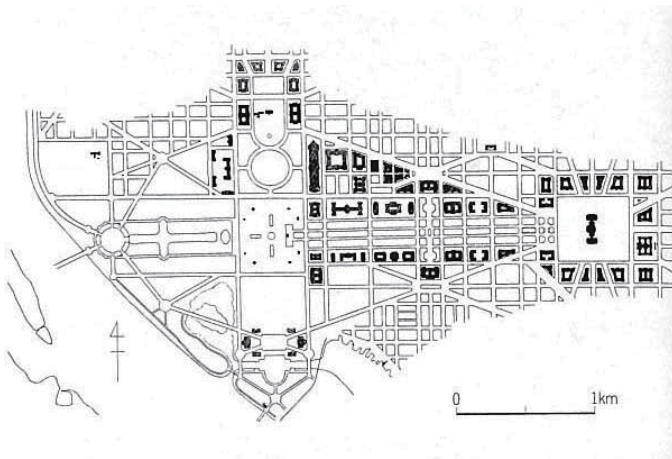
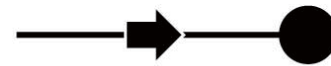


図 65 ワシントン計画図<sup>[24]</sup>

出典：都市史図集編集委員会編（1999）『都市史図集』134 項



バロック都市計画におけるヴィスタ景観



社寺参道

図 66 ヴィスタ景観の指向性

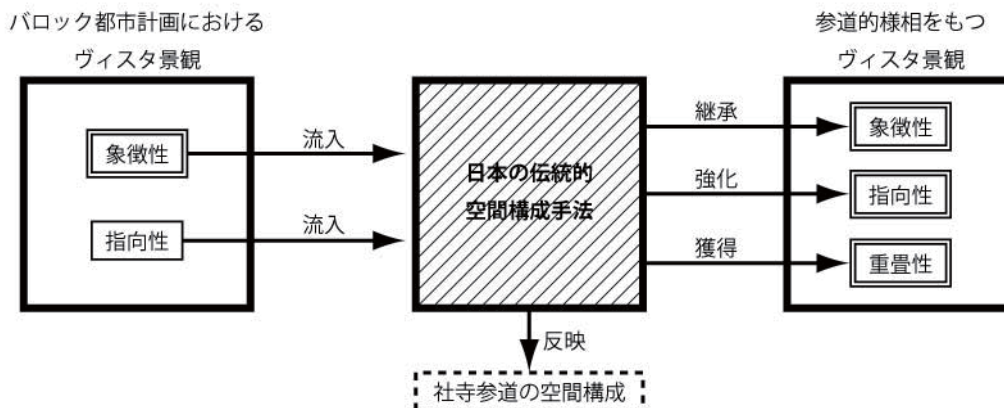


図 67 ヴィスタ景観の受容にみられる参道的様相

## 〔教育の森公園〕

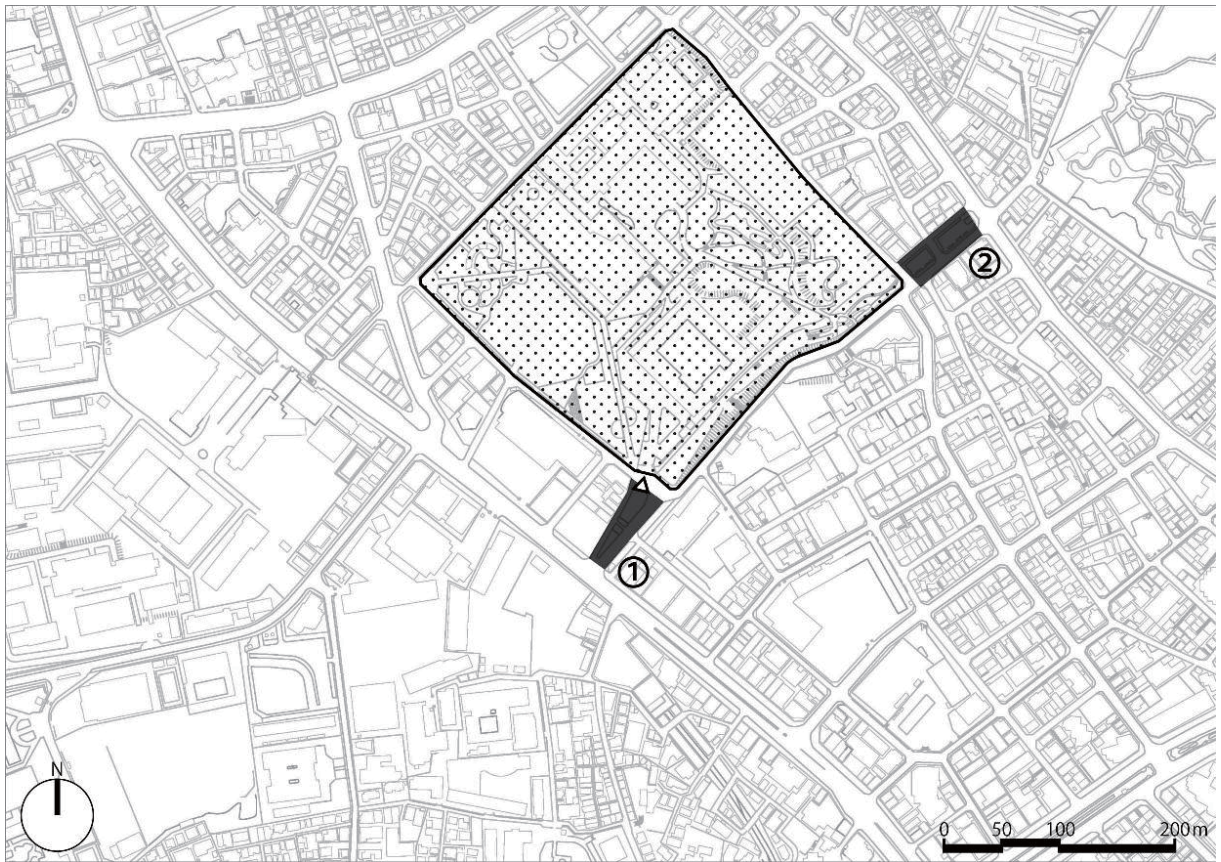


図 68 教育の森公園と＜参道＞

### ＜参道＞の設定

教育の森公園の周辺における実地調査の結果、＜参道＞としての可能性をもつ道として図 68 中に示す道に着目した。以下、これを＜参道＞として設定する要因を示す。

特に①の道は東京の主要幹線道路であり茗荷谷駅の位置する春日通りから分岐し、都市における閉領域である教育の森公園を目指す多くの人々が利用する道である。航空衛星写真から樹木を抽出して作成した図 69 をみると、①②の道には幹線道路と公園を結ぶように樹木が配置されており、明らかな意図をもって公園と道が一体的に計画されていることがわかる。厳密にはこれらの樹木は街路樹ではなく、①②の道に沿うように計画された窪町東公園という線形公園におけるものではあるが、それが特徴的な道空間を形成に寄与していることは明らかである。よって①②の道が教育の森公園と強い関係性をもつ道であると考え、その社寺参道の様相との類似性を検証する。

文京区の公園紹介によると①の道に沿う公園は、「もともと植え込み地となっていました。教育の森公園に向かうアプローチとして重要な位置にあるため、隣接する区道と一体的に整備」されたと記述されており<sup>[25]</sup>、公園に到達する道としての空間的演出が意図



されていることがわかる。その結果、春日通りから覗く樹木は公園内の緑へとつながり、その奥にある公園の存在を連想させる（図 70）。また、幹線道路からの分岐と公園の正門や樹木といった目的の視認性は道空間の指向性を生み、樹木の連なりがそれを強めている（図 71）。そして幹線道路からの分岐点に設置された図 72 のような標識が境界を明示し、幹線道路と着目した道は明らかに性質の異なる道空間として認識することができ、都市の中で公園へと至る道程に重層性を生んでいる。②の道については裏門へと続く道のため①の道ほど特徴が際立ってはいないが、概ね同様の様相が見られる。

### ＜参道＞形成過程

①②の道は 1946 年から順次実施された戦災復興土地区画整理事業の一環として計画されたことが中島の研究<sup>[26]</sup>により明らかにされている。この計画では教育の森の以前の用途であった東京教育大学と周辺の住宅地が精神的、文化的に無関係であったことが反省され、それらに有機的関係を築くことが目的とされていた。そこで当時、湯立坂として名の知れていた①②の道を緑道とし、小石川植物園に至る遊歩道として計画した（図 73）。ここで特徴的な緑の連続性については、復興計画において構想されていた東京全域にわたるグリーンベルトの思想が小規模な地区計画のレベルにおいても表れていたと考えられる。



図 69 樹木の分布  
出典：Google マップより作成



図 70 線形公園



図 71 正門の視認性



図 72 入口の標識



図 73 戦災復興第 3 地区計画図

出典：中島伸 (2009)

『東京都戦災復興区画整理事業における市街化計画からみた計画実態に関する研究』

## 〔上智大学〕

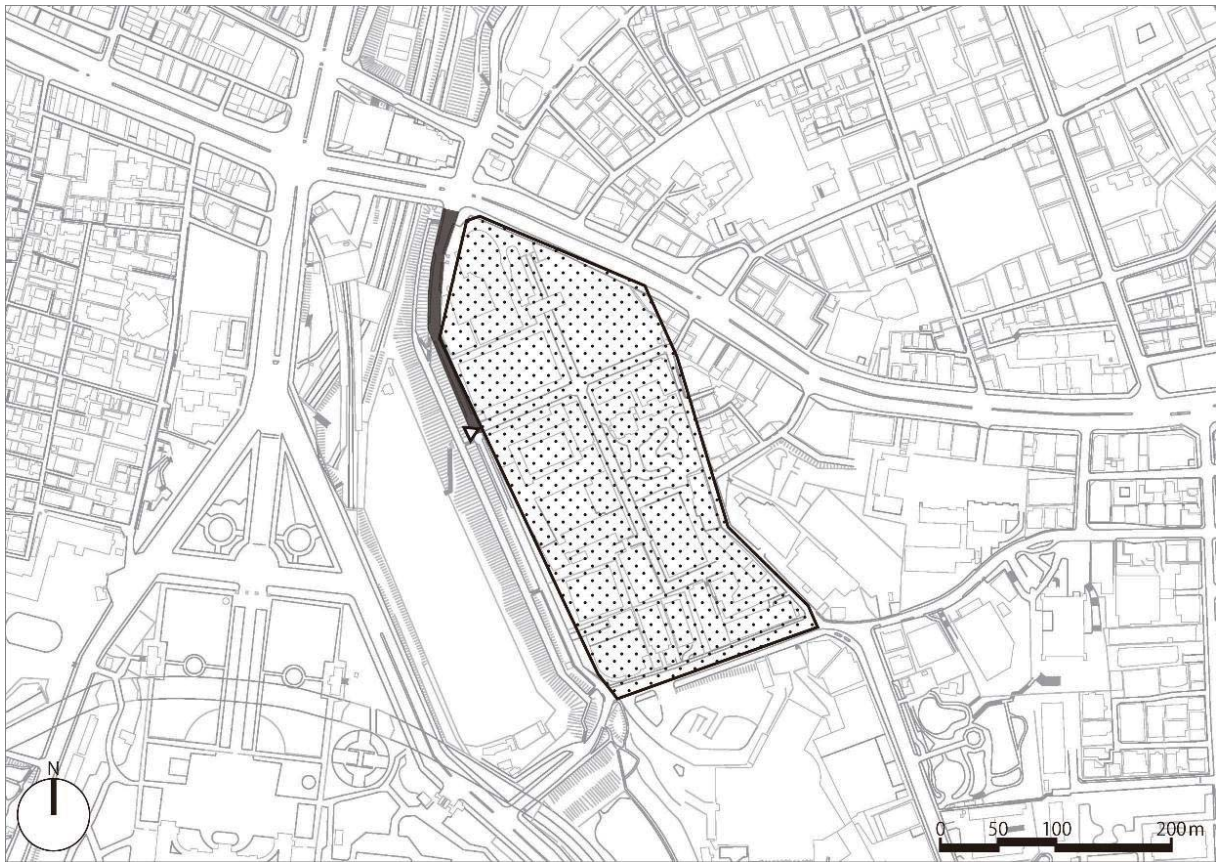


図 74 上智大学と＜参道＞

### ＜参道＞の設定

上智大学の周辺における実地調査の結果、＜参道＞としての可能性をもつ道として図 74 中に示す道に着目した。以下、これを＜参道＞として設定する要因を示す。

この道は東京の主要幹線道路であり四ツ谷駅の位置する新宿通りから分岐し、都市における閉領域である上智大学を目指す多くの人々が利用する道である。航空衛星写真から樹木を抽出して作成した図 75 をみると、着目した道は樹木で覆われており、この樹木の連なりは上智大学構内の並木道にまで続いていることがわかる。さらにこの道は「ソフィア通り」という道路通称名が千代田区により設定されている。これは上智大学が“Sophia University”と英訳され、キリスト教の大学であることから「ソフィア」の愛称で親しまれていることに由来すると考えられる。よって、図中の道が上智大学と強い関係性をもつ道であると考え、その社寺参道の様相との類似性を検証する。

着目した道の起点に立地し幹線道路に面する教会は、キリスト教の大学である上智大学の存在を連想させる建物であり（図 76）、その脇道から覗く桜並木と標識に記された道路通称名はその道の奥に存在する大学を連想させる（図 77）。また、幹線道路からの道の分



岐と大学構内の高層建物の視認性は道空間に指向性を生み、道の屈曲と桜並木が生む空間の演出性がそれを強めている（図 78）。また、この屈曲は着目した道の区間内で分節を生む。そして、幹線道路との分岐点に位置する教会や標識、道を覆う桜並木により、幹線道路と着目した道は明らかに性質の異なる道空間として認識することができ、都市の中で上智大学へと至る道程に重層性を生んでいる。



図 75 樹木の分布  
出典：Google マップより作成

### ＜参道＞の形成過程

現在多くの桜が植えられている土手は元は江戸城の外濠であり、そこには図 79 のように松がまばらに植えられていただけであった。これが現在に見られる立派な桜並木へと変貌したのには上智大学の学生が関与していたようである<sup>[27]</sup>。初めての桜の植樹は 1960 年に当時の上智大学の学生によって卒業記念として自主的に行われた。彼らは「暗くて殺風景な所」であった土手を花見酒の宴会ができる華やかな空間にしようという思いを抱いて 60 本の桜の植樹を行った。その後の 1964 年には大学に隣接する老舗料亭の主によって 100 本の桜が寄贈されたのが植樹され、これらが現在の桜並木の原型となっているのである。

つまり、着目した道は上智大学の学生らに古くから親しまれ、彼らの主体的な空間演出を伴って形成された道空間であり、上智大学を連想させる道空間であることが追認される。



図 76 入口の教会



図 77 標識



図 78 サクラ並木



図 79 サクラの植樹以前の外濠

出典：上智大学 (2013) 『上智大生が植えた眞田濠土手の桜』

[法政大学]

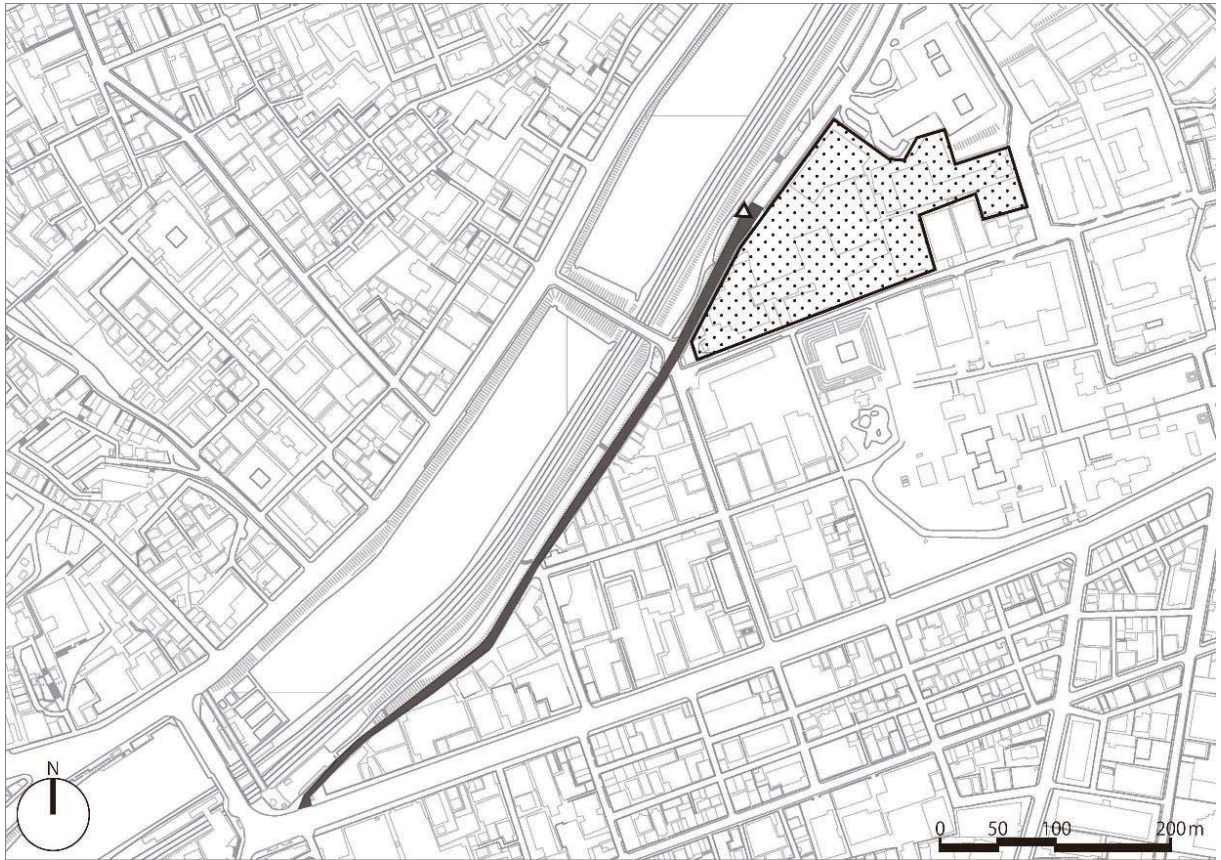


図 80 法政大学と〈参道〉

〈参道〉の設定

法政大学の周辺における実地調査の結果、〈参道〉としての可能性をもつ道として図 80 中に示す道に着目した。以下、これを〈参道〉として設定する要因を示す。

この道は東京の主要幹線道路であり市ヶ谷駅の位置する靖国通りから分岐し、都市における閉領域である法政大学を目指す多くの人々が利用する道である。航空衛星写真から樹木を抽出して作成した図 81 をみると着目した道は樹木で覆われており、この樹木の連なりは法政大学の正門まで続いていることがわかる。また、法政大学の校歌には「蛍集めむ門の外濠」という一節が登場することから、図中の外濠沿いの道は法政大学と強い関係性をもつ道であると考え、その社寺参道の様相との類似性を検証する。

着目した道は図 82 のように外堀公園の遊歩道と一般公道の二種類の道空間が平行しており、どちらにおいても法政大学の学生と思われる多くの若者の往来が見られるが、法政大学の連想性はこれらの道空間だけではなく、より広範な「外濠」という場において表れている。これは前述の校歌の歌詞から読み取れるが、その他に法政大学の記録写真からも読み取れる。図 83 は 1931 年と 1980 年の校舎の写真であるが、いずれも建物は正面を外



濠側に向けて存在感を際立たせている。特に1980年の写真では濠と土手、並木が校舎の前景として演出的に扱われている。現代においても「法政大学」の文字を冠する構内の高層建築は外濠において際立った存在であり、外濠における法政大学の存在を連想的に示している（図84）。また着目した道においては、この高層建築の視認性は指向性を生み、桜並木の演出性がそれを強めている。そして明確な分節とは言えないが、樹木の密度の変化は濠の水面や対岸の街並みなどの見えかくれを生み、雰囲気の変化を生んでいる。このように、幹線道路と着目した道は明らかに性質の異なる道空間として認識することができ、都市の中で法政大学へと至る道程に重層性を生んでいる。



図81 樹木の分布  
出典：Google マップより作成



図82 外濠公園（左）と公道（右）

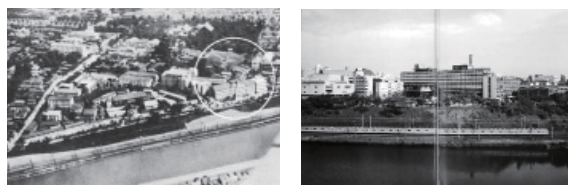


図83 1931年（左）と1980年（右）の校舎と外濠  
出典：法政大学 編（1980）『法政大学の100年』86, 48-49項

### <参道>の形成過程

外堀は江戸幕府の開幕前後に防衛上の目的から普請されたものであり、以来、昭和初年まで一般人の立ち入りは禁じられていた。それが現在のように公園化された経緯には法政大学の学生が関わっていた<sup>[28]</sup>。震災後、学生の急増に伴い憩いの場を土手の芝生に求めた彼らは土手解放運動を起こし、東京市会議員の協力を経て1927年に公園の開設にこぎつけたのである（図85）。つまり、着目した道における土手は法政大学の学生らに古くから親しまれ、彼らの主体的な運動により公共化されたという経緯から、法政大学との関連性が強い空間であるといえる。



図84 外濠と法政大学



図85 解放運動の新聞記事（左）と解放後の外濠（右）  
出典：法政大学 編（1980）『法政大学の100年』84, 85項

〔国立劇場〕

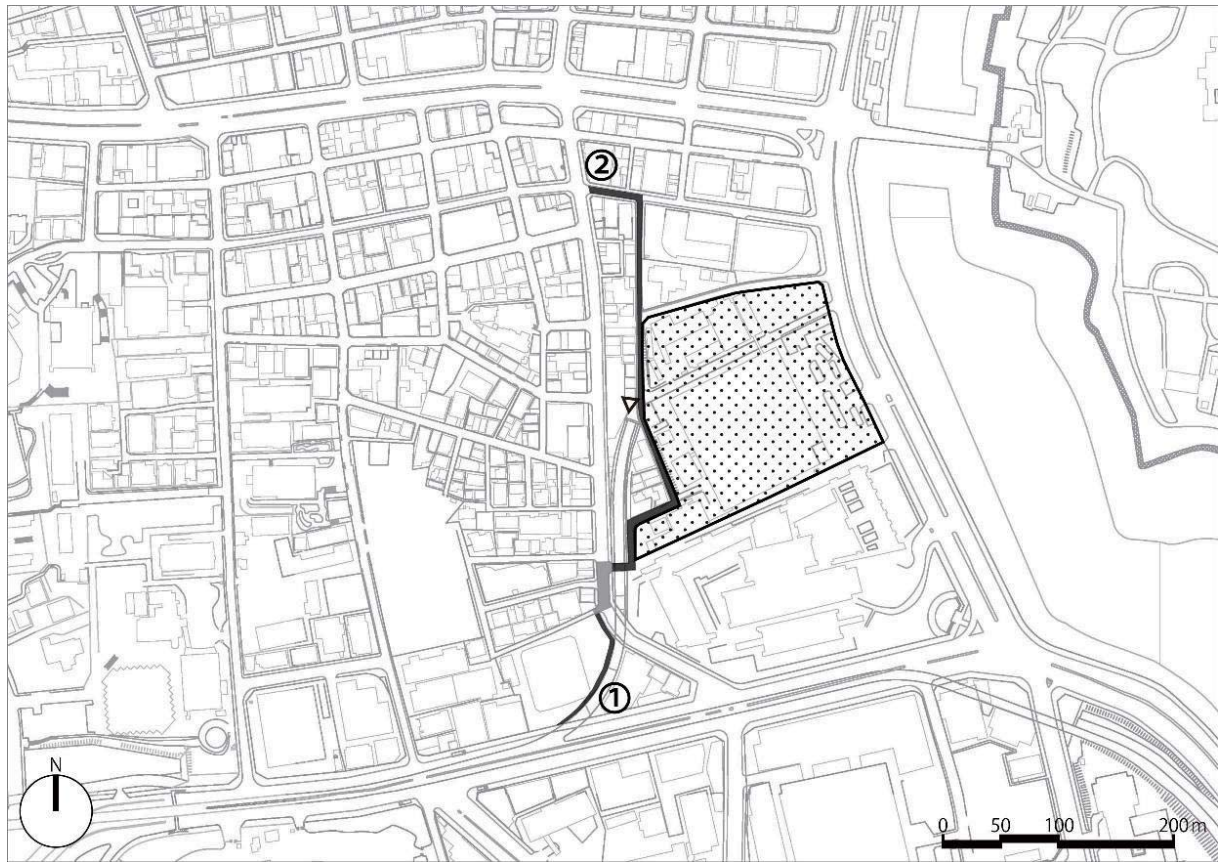


図 86 国立劇場と〈参道〉

〈参道〉の設定

国立劇場の周辺における実地調査の結果、〈参道〉としての可能性をもつ道として図 86 中に示す①②の道に着目した。以下、これを〈参道〉として設定する要因を示す。

①の道は東京の主要幹線道路であり永田町駅の位置する青山通りから分岐し、都市における閉領域である国立劇場を目指す多くの人々が利用する道である。②の道は、主要幹線道路ではないが半蔵門駅の位置する道から分岐し、①の道と同様に国立劇場を目指す多くの人に利用されている。このことから特に②の道には千代田区により「国立劇場通り」と道路通称名が設定されている。国立劇場の正面は皇居側に向けられているものの、こちらの入口から領域内に到達するのは主に車両であり、徒歩による到達は主に①②の道が利用されていると考えられる。実際に①②の道を歩いて調査してみると国立劇場へと誘導する多くの要素が見られたことから、①②の道を国立劇場と強い関係性をもつ道であると考え、その社寺参道の様相との類似性を検証する。

実地調査でみられた、①②の道と国立劇場の関係性を表すと考えられる都市空間の要素を景観のシークエンスとしてまとめたものを図 87 に示す。この景観のシークエンスは、



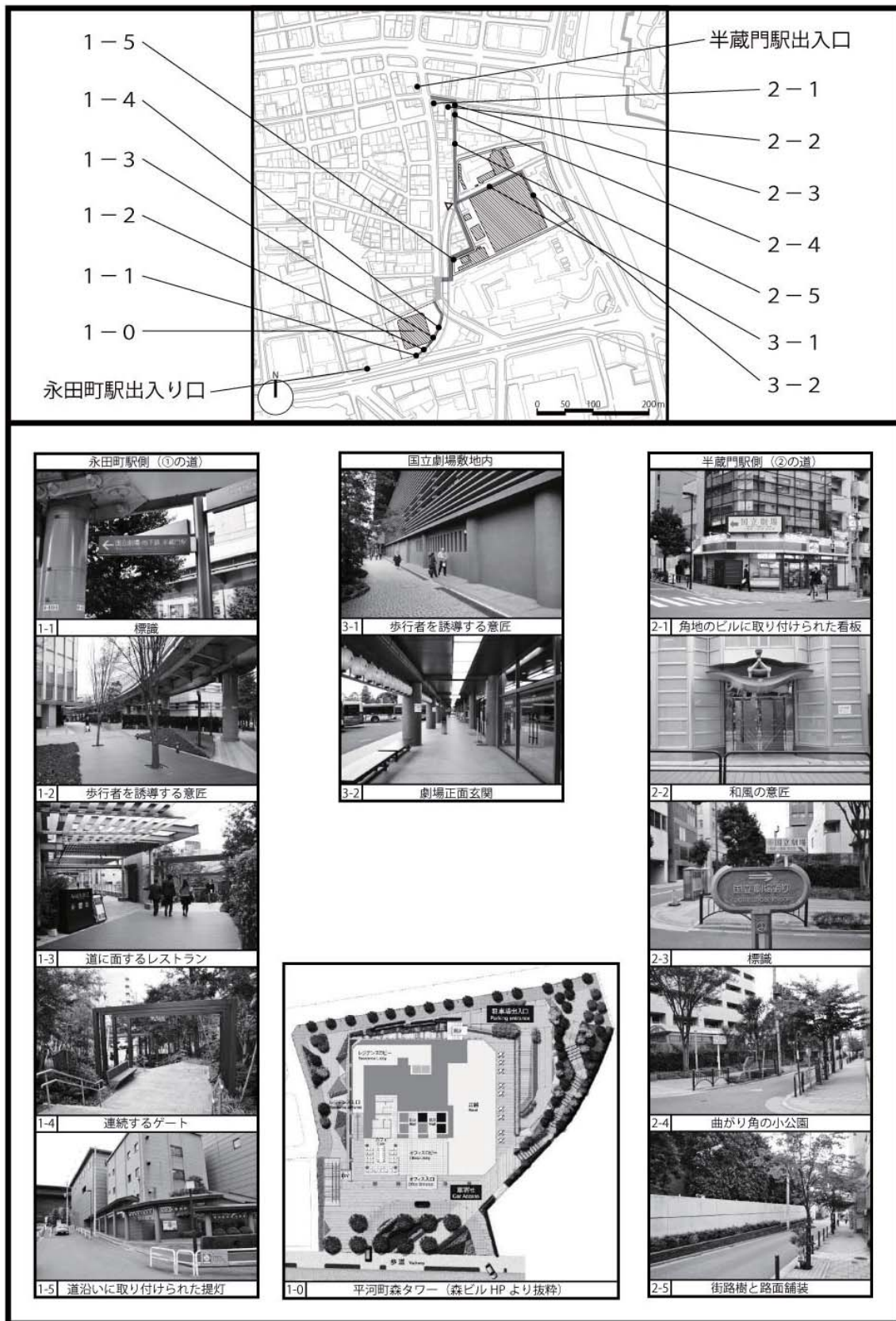


図 87 道空間の景観のシークエンス

国立劇場に徒歩で向かう多くの人々が利用すると考えられる地下鉄駅から出発し、国立劇場の敷地へ入る門を抜け、劇場建物の玄関に至るまでとした。

①②の道ともに経路に屈曲が多く目的地の方向性がわかりにくいため、図 87 に示したように標識や看板が非常に多く見られる。これらの標識が劇場の存在を連想させる要素となっていることは明らかであるが、この事例で特筆すべきことは周辺建物の形態に国立劇場への配慮が見られることである。①の道では角地の建物に看板が取り付けられている(図 87:2-1)。またその真意は明らかではないが、玄関庇に唐破風をモチーフにしたような意匠を施している建物(図 87:2-2)が見られ、校倉造をモチーフにした国立劇場の意匠に和風という点で呼応している。この意匠に関しては推測にすぎないが、②の道の平河町森タワーに関してはその国立劇場への配慮が明らかである(図 87:1-0)。この敷地内に設けられた公開空地には歩行者道が国立劇場のアプローチとして計画されており、舗装や樹木(図 87:1-2)、連続するゲート(図 87:1-4)を設置により道空間が演出されている。そしてその道へ向けて商店や飲食店の入口が構えられており(図 87:1-3)、国立劇場へ向かう人々からの受益を意図していることが読み取れる。このように国立劇場がこの地域の核として認識され、それが①②の道における建物の意匠や計画において連想されるのである。

また①②の道における建物に見られる連想性は、幹線道路からの分岐とともに、道に国立劇場への指向性を生じさせ、標識や看板による方向性の明示はそれを強化する。この標識や看板は図のように①②の道の曲がり角に多く設置されている(図 88)。これらの看板や標識が屈曲によって複数に分節された道空間(図 89)を視覚的につなげているため、国立劇場への経路をひとつながりの道空間として認識することができるのである。そして分節された道空間はそれぞれ異なる様相をもっているのに加え、閉領域の内部においてもその入口から劇場建物の玄関に至るまでに道空間の演出が見られる(図 87:3-1)ことで、都市の中で国立劇場へと至る道程に重層性を生んでいるのである。

#### 〈参道〉の形成過程

国立劇場の敷地は戦前には陸軍衛戍病院として用いらており、戦後には占領軍のパレスハイツとして接收された。その後、1958年の接收解除に伴って国立劇場の計画が構想され、設計コンペを経て校倉造をモチーフとした設計案が採用された。そして竣工をむかえたのは1966年である。この経緯に伴って①②の道はどのような形成過程を経たのかを1925年の地図(図 90)と1947年の航空写真(図 91)から調査したところ、①の道の一部は戦前



より陸軍衛戍病院のアプローチとして、②の道は戦後に区画道路として整備されたものであることがわかった。そしてその後の国立劇場と1979年の国立演芸場の開設に伴って図のような整備が行われていったと考えられる。

①の道における平河町森タワーは平河町二丁目東部地区地区計画のA-1地区として森ビルによって基本設計が行われ、2009年に竣工をむかえた。千代田区が公表する地区計画概要<sup>[29]</sup>によると、①の道の一部である敷地内歩行者道は、元々の街区を分割していた道路が移設されて「必要な機能を確保する」ように整備されたものであるとわかった(図92)。その機能として「地区の北部や国立劇場から永田町駅方面への歩行者の利便性の確保を図る」ことが挙げられており、敷地内歩行者道が地区の核として連想される国立劇場との関係性への配慮から形成されたものであるとわかった。

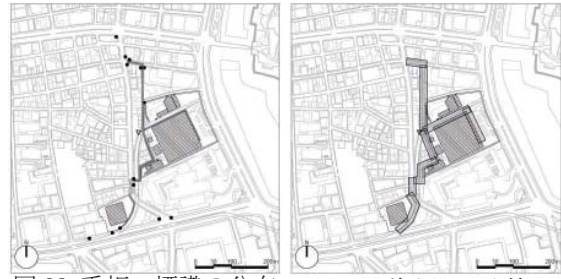


図88 看板・標識の分布 図89 道空間の分節



図90 1925年国立劇場周辺

出典：清水靖夫(1983)『明治・大正・昭和 東京1万分1地形図集成』

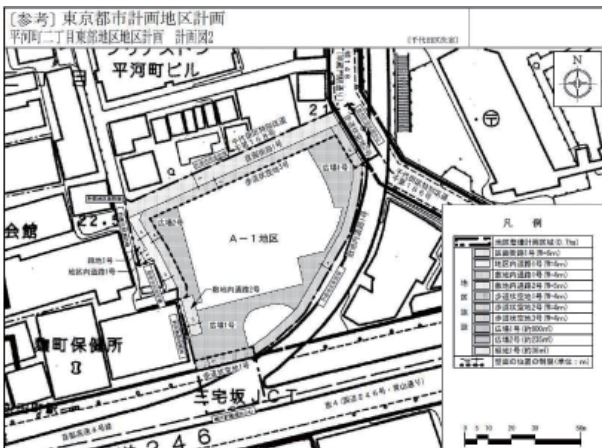


図92 平河町二丁目東部地区地区計画

出典：千代田区(1983)『地区計画概要 平河町二丁目東部地区』



図91 1947年国立劇場周辺

出典：goo 地図



[代々木公園]



図 93 代々木公園と＜参道＞

＜参道＞の設定

代々木公園の周辺における実地調査の結果、＜参道＞としての可能性をもつ道として図 93 中に示す道に着目した。以下、これを＜参道＞として設定する要因を示す。

この道は東京の主要幹線道路であり渋谷駅西口から代々木公園方面を目指す多くの人々が利用する道である。さらにこの道は「公園通り」という道路通称名が渋谷区により設定されている。代々木公園へと突き当たる道の形態上、代々木公園との関わりが強い道であると考えられる。現在ではとりわけ特徴的な通りであるとは言えないが、1970年代から80年代にかけて、代々木公園へと至る坂道であるこの通りに投機的可能性を見出したセゾングループのパルコによって集中的に資本が投入された<sup>[30]</sup>。パルコは駅から500m離れた坂道の上という一般的には商業的に悪条件と思われる立地を逆手に取り、そこまでの経路である道空間に様々な演出を施すことで人々を店舗に引きつけ、さらにその演出により消費行動を喚起するという戦略をとったのである。この渋谷におけるパルコの商業戦略に関しては社会学的なメディア論や都市論の観点からの分析がすでになされている<sup>[31][32]</sup><sup>[33]</sup>。しかし、都市の閉領域である代々木公園へと続く道空間を舞台とし、指向性を意図



した道空間の演出という点で、本研究で扱う  
 <参道>という新しい観点からも捉えること  
 ができると考える。したがってこの観点から、  
 着目した道の形成要因であるパルコの思想と  
 手法の分析を行う。

### <参道>の形成過程

#### —パルコ出店以前—

代々木公園は戦前は青山練兵場として、戦後は米軍の接収住宅であったワシントンハイツとして利用されていた。図95、96に示す1909年の地図と1947年の航空写真を見ると、着目した道はこのころから既に存在しており、現在の青山通りから分岐し、それぞれの施設へと到達するための道だったことがわかる。その後ワシントンハイツは1964年の東京オリンピックにおける選手村の整備に伴い返還され、オリンピック終了後、現在の代々木公園へと整備された。このときの着目した道の様子はというと、「区役所通りとか職安通りとか呼ばれ、途中のめぼしい建物といえば場末風の映画館、コンクリートの教会、喫茶店がまばらにあるだけのうら寂しい通り」<sup>[31]</sup>(p295)であり、渋谷区役所へと向かう人々が通過するだけの「何ともない坂道周辺の空間」<sup>[32]</sup>(p65)だったようである。しかし、オリンピック投資によってこの道の先には渋谷公会堂やNHK放送センター、代々木競技場などの大規模集客施設が登場し、代々木公園を介して原宿方面へと抜けられるようになって



図94 公園通り

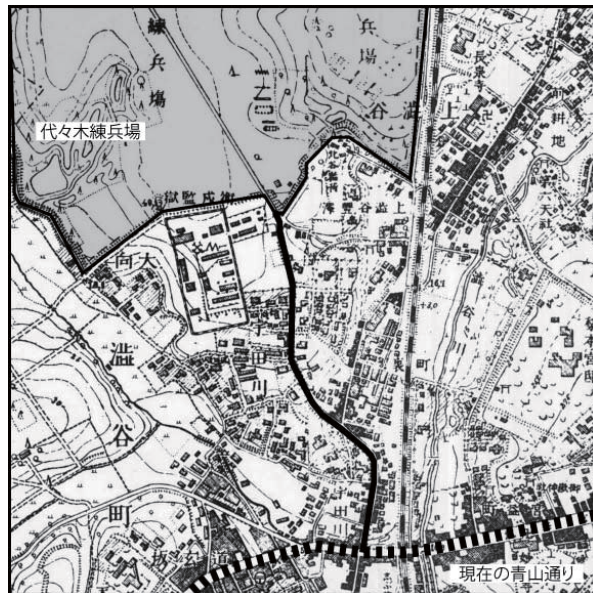


図95 1909年代々木公園周辺

出典：清水靖夫(1983)『明治・大正・昭和 東京1万1地形図集成』に加筆



図96 1947年代々木公園周辺

出典：goo 地図に加筆

た。この周辺環境の転換と「坂道」という特徴的なランドスケープに着目したのがパルコである。

—パルコの商業戦略と公園通り—

当時のパルコは「若者（感性・感覚に価値意識をもつ人）をシンパ化する中で新需要を開発し、それを増幅させる装置・仕掛け・場づくりを行う」<sup>[30] (p36)</sup> ことを商業戦略とし、そのような場としての「ファッション環境」の創出を目指していた。そしてこのファッション環境とは一店舗の内部に閉じて形成されるのではなく、都市空間にまで及び形成されるべきものであると考えていた。パルコはこの戦略の下、1973年の本館の出店に合わせてそれまでの通りの名称であった区役所通りを「公園通り」と改め、「VIA PARCO」の看板を設置し、街灯の全面模様替えを行った。そして、「すれちがう人が美しい—渋谷公園通り」というキャッチコピーに表されるように、行きかう人々が互いのファッションを「見る・見られる」という「ステージ性」を公園通りに演出することで「ファッション環境」の形成を目指していったのである。

パルコは本館の出展後、ファッション環境としての都市開発を点としての本館から線としての公園通り、そして面としての宇田川町界限へと拡大すべく、1975年にはパルコパート2を、1981年にはパルコパート3を、そして1990年代の西武グループの衰退に至るまで次々と施設を展開していく（図97）。本研究では参道的様相の分析という趣旨上、公園通りを中心とした線的展開について詳細に取り上げる。

パルコパート2が開店すると公園通りの重要性がますます高まり、道空間の物理的な環境が整備されていった。1977年には歩道の拡幅と電話ボックスの設置、1978年にはベンチ、ゴミ箱、灰皿の設置、1979年には街路時計の設置と年々新しい要素を加えることで通りに変化を与えていった。その他にも街路樹や花壇の整備、ウォールペイントなど、人々が楽しく歩けるための環境づくりを行っていった（図98）。

建物のデザインも道空間と一体的に考えられていた。本館の設計意図は、「渋谷パルコは坂道の上にあり人々に遠くあるという印象を与えてはならない。そのためビルの最上階に劇場を入れ頭を大きく背を高くし、しかも上層部にガラス張り部分を大きく取って、その部分が手前に見えるデザインにしてある」<sup>[30] (p181)</sup> とされており、公園通りからの見え方を考慮して工夫されていた（図94）。また、人々を街に滞留させるためには建物に高い居住性をもたせるが重要であるとし、「商業ビルのファサードに必要以上にリッ



ちなカフェテラス」を設けることで、居住性の高い空間を人々に提供するとともに公園通りに趣を与えることを意図していた。

そして都市をメディアとして考え、『都市に広告を出す』旧来の屋外広告の方法と異なり、『都市を広告にする』という新たな都市と広告とのかかわりを作り出す試み<sup>[32]</sup>(p67)を行った。広告の形態はウォールペイントやポスターボード、スライドを使ったアドスペース、テレビモニターなど多岐にわたり、いたるところを広告で満たすことで「ファッション環境」としての特徴的な道空間を形成した。

パルコにとっての劇場は広告とはまた異なる側面で「ファッション環境」の形成に寄与する要因であった。元々公園通り周辺にはNHKホールや渋谷公会堂、山手教会の地下にあった小劇場ジャンジャンなどの劇場が多く、この場所の優位性と差別性に着目したパルコは西武劇場やスペースパート3を設立することで、「日本のブロードウェイと呼べるような劇場群を公園通りに出現させる」<sup>[30]</sup>(p140)ことを構想していた。

#### —パルコの商業戦略の影響—

このような公園通りにおけるパルコの複合的な取り組みは当時の人々にどのように捉えられていたのかを検証する。

文芸評論家の前田愛は「道玄坂から『パルコ』の坂、そして国立競技場、神宮外苑とい



図 97 1989年公園通りの西武グループの出店状況



図 98 道空間の演出

出典：アクロス編集室(1984)『パルコの宣伝戦略』145項



うのが、みんな歩ける道としてある。これは東京のプロムナードとしては一番スケールの大きいところのような気がするんです。」<sup>[34] (p219)</sup>と述べており、公園通りとパルコの関係性を認識している。しかし、それはパルコへと到達する道ではなく、渋谷から代々木公園方面へと向かうプロムナードの一部としてなのである。同様に、文献「渋谷区の歴史」も公園通りについて「日本離れしたムードをただよわせて若者を引きつけている」と紹介し、「この通りから公園を抜けて原宿へ出るコースを歩く若者も多い」<sup>[35] (p277)</sup>と続けている。これらの記述を見ると、公園通りはパルコによって演出されて特徴的な道空間とはなっているが、代々木公園や原宿へと連続する道空間の一部として認識されていることがわかる。つまり、パルコは公園通りの核ではあるが、到達点ではないのである。

ミュージシャンの中村正人は、「21年前頃のポップス系は、Take Off 7、クラブ・クアトロ、エッグマン、渋谷公会堂、NHK ホール、国立代々木競技場第一体育館と、公園通りを上るに連れて会場が大きくなることもあり、『公園通りの坂上がり』と呼んで一種のサクセスストーリーの例えとなっていました。」と述べている<sup>[36]</sup>。この記述からもわかるように、パルコの劇場であるクラブ・クアトロは公園通りに位置する劇場群の中のひとつの通過点であり、最終到達点は坂道を登りきった代々木公園にあるのである。

この「公園通りの坂上がり」のエピソードは公園通りという道空間を軸に劇場の規模が段階づけられており、ミュージシャンの成功の過程と都市空間のイメージが結びついていることが興味深い。そしてこのエピソードからは、公園通りにおける若者文化や劇場文化の連想性、代々木公園へと向かう指向性、成功のステップアップという重層性という参道的様相を垣間見ることができるのである。

また公園通りは、中島みゆき、尾崎豊、山下達郎などの1980年代から1990年代のポップソングの歌詞にも多く登場し、若者文化や渋谷の街を連想させる道空間だったことがうかがえる。実際に、パルコによる公園通りの演出によって1975年ごろから「渋谷の人の流れが道玄坂から公園通りに移った」<sup>[35] (p300)</sup>といわれ始めるようになり、吉見は朝日新聞社の調査を引用してそれを例証している（図99）。のているようにいるが、人々の到達点の意識としては坂道を登りきった代々木公園にあるのである。つまり、公園通りはパルコの商業戦略による道空間の演出によって人々が集まるようになったことをきっかけとして、パルコ自身を連想させるのみではなく、それ以上に多様な連想性を得たのである。

—渋谷公園通りの参道的様相—

以上にみてきたように、パルコが公園通りの商業的投機性に着目してその坂道の中腹に店舗を構え、公園通りの演出を行ったことは、一企業の商業戦略を越えた都市的な広がりを見せたのである。そして、公園通りはパルコを連想させる道空間というだけではなく、それ以上に多様な連想性をもつ魅力的な道空間として人々に認識されていたといえる。

最後に、パルコの商業戦略とその影響にみられる参道的様相をまとめたものを表 12 に示す。

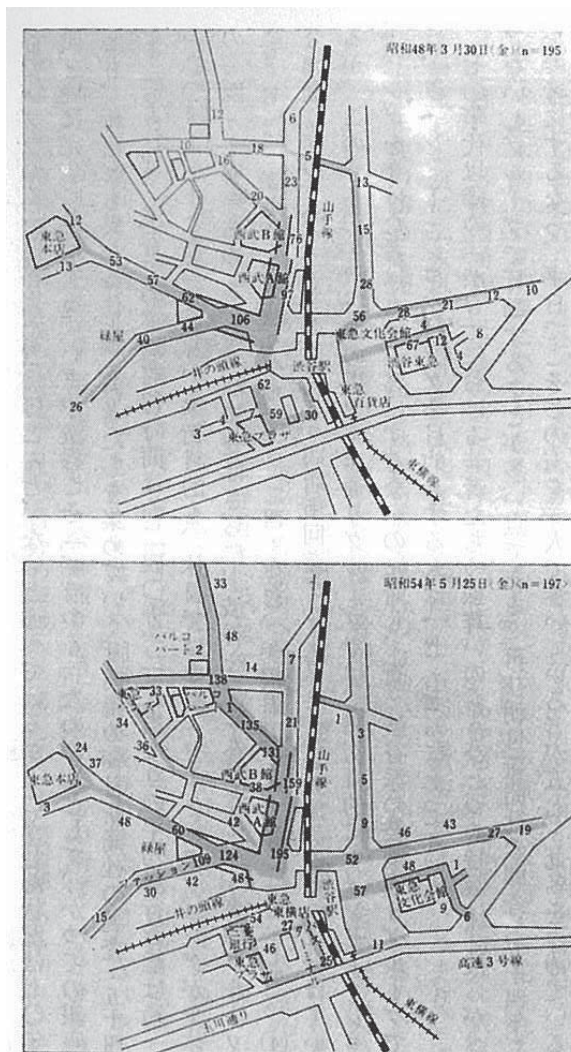


図 99 渋谷における人の流れの変化  
出典：吉見俊哉 (2008) 『都市のドラマトゥルギー』

表 12. 公園通りにみられる参道的様相一覧

連想性	指向性	重層性
<ul style="list-style-type: none"> <li>代々木公園を連想</li> <li>○ 代々木公園へと突き当たる道の形態</li> <li>○ 「公園通り」と改称</li>   <li>パルコを連想</li> <li>○ パルコ本館のデザイン</li> <li>○ 歩道の環境整備</li> <li>○ メディアとしての都市</li>   <li>音楽を連想</li> <li>○ パルコの劇場</li> <li>○ 公園通りの坂上がり</li>   <li>若者の集まる渋谷を連想</li> <li>○ 若者を対象する商業戦略</li> <li>○ ポップソングの歌詞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 代々木公園へと突き当たる道の形態</li>   <li>○ パルコ本館のデザイン</li>   <li>○ 公園通りの坂上がり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 歩道の環境整備</li> <li>○ メディアとしての都市</li>   <li>○ パルコの劇場</li> <li>○ 公園通りの坂上がり</li>   <li>○ 若者を対象する商業戦略</li> </ul>
「公園通り」がもつ多様な連想性	代々木公園へと至る坂道という特徴的なランドスケープがもたらす指向性	公園通りと周辺都市空間との差別化による代々木公園へ至る道としての重層性



## 4. <参道>による閉領域と周辺環境の関係性

---

4-1. <参道>の形成過程

4-2. <参道>の様相

4-3. <参道>の効用

東京の閉領域の周辺における<参道>の存在とその個別の形成要因が明らかになった。本章ではこれらの事例を通観し<参道>を一般化して考えることで、閉領域と周辺環境との関係性を解明する。



## 4-1 <参道>の形成過程

3章において研究対象とした61か所の東京の都市空間における閉領域の中で、11か所の閉領域に<参道>が存在することを明らかにした。そしてそれらの形成過程を個別に論じてきたが、11か所の閉領域の事例の中には類似した<参道>の形成過程をもつものが存在し、それらの形成過程には閉領域と周辺環境との関係性がみてとれることがわかった。

11か所の閉領域における<参道>の形成過程はいくつかのグループに分けることができ、まとめると図のようになる。まず、<参道>の形成過程は「計画型」か「発見型」に分けられる。前者は<参道>の形成を意図して閉領域と道路が一体的に計画されたて形成された道空間であり、後者は既存の閉領域へと至る接続道路がもっていた<参道>としての可能性が発見されて形成された道空間である。そして、<参道>は「計画型」か「発見型」かによって異なる形成過程をもつ。

「計画型」では<参道>は閉領域への「到達経路の計画的演出」のための道空間として計画される。例えば明治神宮外苑絵画館や浜町公園はヴィスタ景観の形成という建物や道空間の意図的な演出を目的として閉領域と一体的に計画された<参道>である。また、教育の森公園では都市の緑をつなげるという意図の下に閉領域と道空間が一体のものとして形成され、早稲田大学の早大通りの並木も正門へと続く鶴巻町の中央通りとして、大学と一体的に考えられて道路計画がなされている。

「発見型」では「関連機能の近接」、「到達経路の加算的演出」、「誘引性の強化」という複数の形成過程がみられる。

「到達経路の加算的演出」は「計画型」と同様に道空間の演出であるが、それが道路計画と閉領域が一体的に考えられているというものではなく、閉領域への接続道路の計画後、閉領域や周辺の関係者がそこに<参道>としての可能性を発見し、既存の道路に演出を加えていったのである。これには学生が外濠の空間に<参道>としての可能性を見出して道空間が演出された法政大学や上智大学や、再開発地区の公開空地に<参道>としての可能性が発見されるなどして演出的な道空間が形成された国立劇場が含まれる。

「関連機能の近接」は閉領域の機能と類似する機能をもつものが集まることで閉領域への連想性をもつ<参道>が形成されるのである。これは大規模集客施設である閉領域の周囲に飲食店や小売店が集積し商店街を形成することに関係しているが、閉領域と機能的関連をもつ業種の店主がその接続道路に商業投機性を発見して集積するという点で、駅前

商店街などとは異なる。この閉領域と機能的関連をもった商店の集積が商店街が閉領域と関連性をもたせ、〈参道〉が形成されるのである。早稲田大学への〈参道〉商店街には印刷・製本店や不動産業、商店などが多くみられること、東京芸術大学の〈参道〉商店街にはギャラリーが多くみられること、青山霊園の〈参道〉商店街には墓石店・花屋が多くみられること、日赤医療センターの〈参道〉商店街には薬局が多くみられることがこれに該当する。

「誘引性の強化」は、閉領域を都市の資源とみなした主体によってそこへの接続道路の〈参道〉としての可能性が発見され、その道空間に人々を誘引するために閉領域を活用した道空間の〈参道〉化が戦略的に行われたものである。これは代々木公園とパルコが行った公園通りにおける商業戦略が該当する。パルコは開店当時人通りの少なかった代々木公園への接続道路の〈参道〉としての可能性を発見した、そして、代々木公園の集客効果やイメージを活用して、人の流れを強化するために、「公園通り」と道を改称したり、劇場群を整備したりと、代々木公園への接続道路を戦略的に〈参道〉化する試みを行っていたのである。そしてこの〈参道〉化の戦略により、人々を公園通りへと引きつけることに成功し、公園通りは若者文化の発信地としての個性を獲得したのである。

以上に述べた〈参道〉の形成過程を図 100 にまとめる。これらの〈参道〉の形成過程には、閉領域による周辺環境への強い影響がみられ、閉領域と周辺環境の関係性を表しているといえるのである。

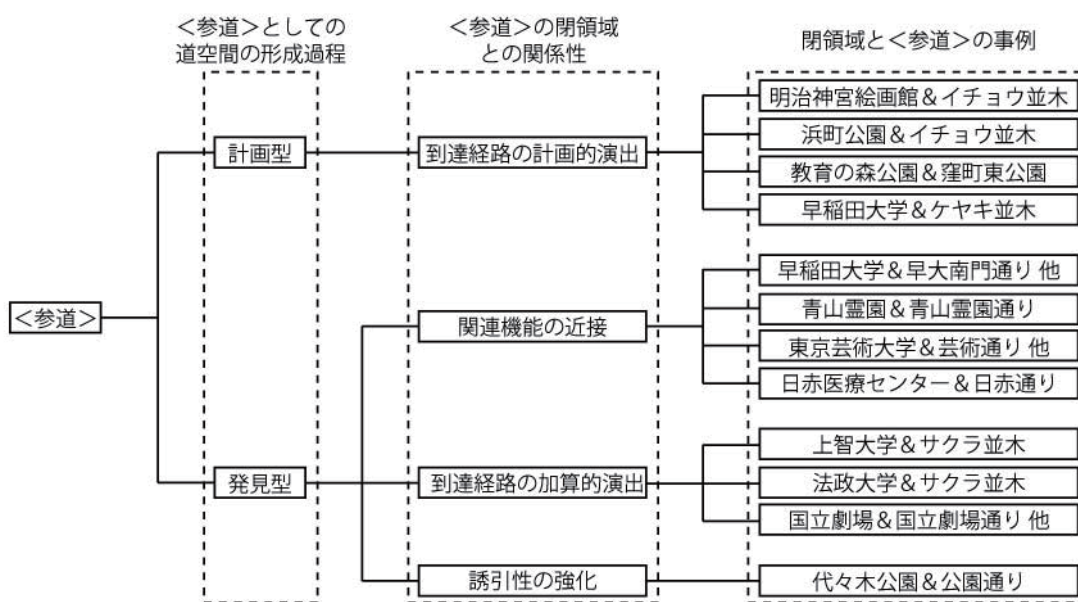


図 100 〈参道〉の形成過程

## 4-2 <参道>の様相

3章で分析した11か所の閉領域と<参道>の事例を通観し、<参道>の様相の一般化を試みる。<参道>の様相とはすなわち閉領域の周辺環境の様相と同義であり、これは閉領域と周辺環境との関係性を示すのである。また、閉領域と<参道>の事例を相対的に分析するため、3章で分類したグループA、B、C、Eの閉領域においても追加で実地調査を行った。したがって、本節では本研究が対象とした全62か所の閉領域での実地調査の結果も踏まえて考察を行う。

11か所の閉領域と<参道>の事例から、<参道>に共通してみられる様相を記述するものとして、「前室性」、「線形性」、「集約性」という三つの言葉が適当であると考える。

### 前室性

3章で行った<参道>の設定を顧みると、参道は幹線道路と閉領域を接続する道であり、なおかつそこに何かしらの意味が表出している道であった。そしてその意味を、道空間に表出する閉領域との関係性であるとして閉領域と<参道>の事例を選出した(図101)。そしてそれら事例の詳細な実地調査の結果、その関係性は連想性・指向性・重層性という参道的様相と類似するものであることがわかったのである。

この連想性・指向性・重層性という参道的様相は、「前室性」という言葉に集約できると考える。これらの様相はいずれも<参道>の空間が閉領域に供するものであることを示しており、主室的である閉領域に対して前室的なのである。

これは1章で言及した、閉領域に付属する結合閥と同義である。東京の都市空間という全体的な領域に属する幹線道路と、東京の都市空間に内包される部分的な閉領域は、結合閥である<参道>によって接続されるのである。つまり、本研究で仮定として提示した「参道的様相をもつ結合閥」の存在が実証されているのである。

### 集約性と線型性

前節で分析した形成過程を見ると、<参道>は商店や樹木などの構成要素が、幹線道路から正門へと至る道に沿って集約されることによって形成されてきたことがわかる。このような要素の集約は閉領域による商業投機性や閉領域へ至るための空間演出などという閉領域の影響によって生じるものであり、この影響は正門へと至る道へ最も大きく及ぶこと



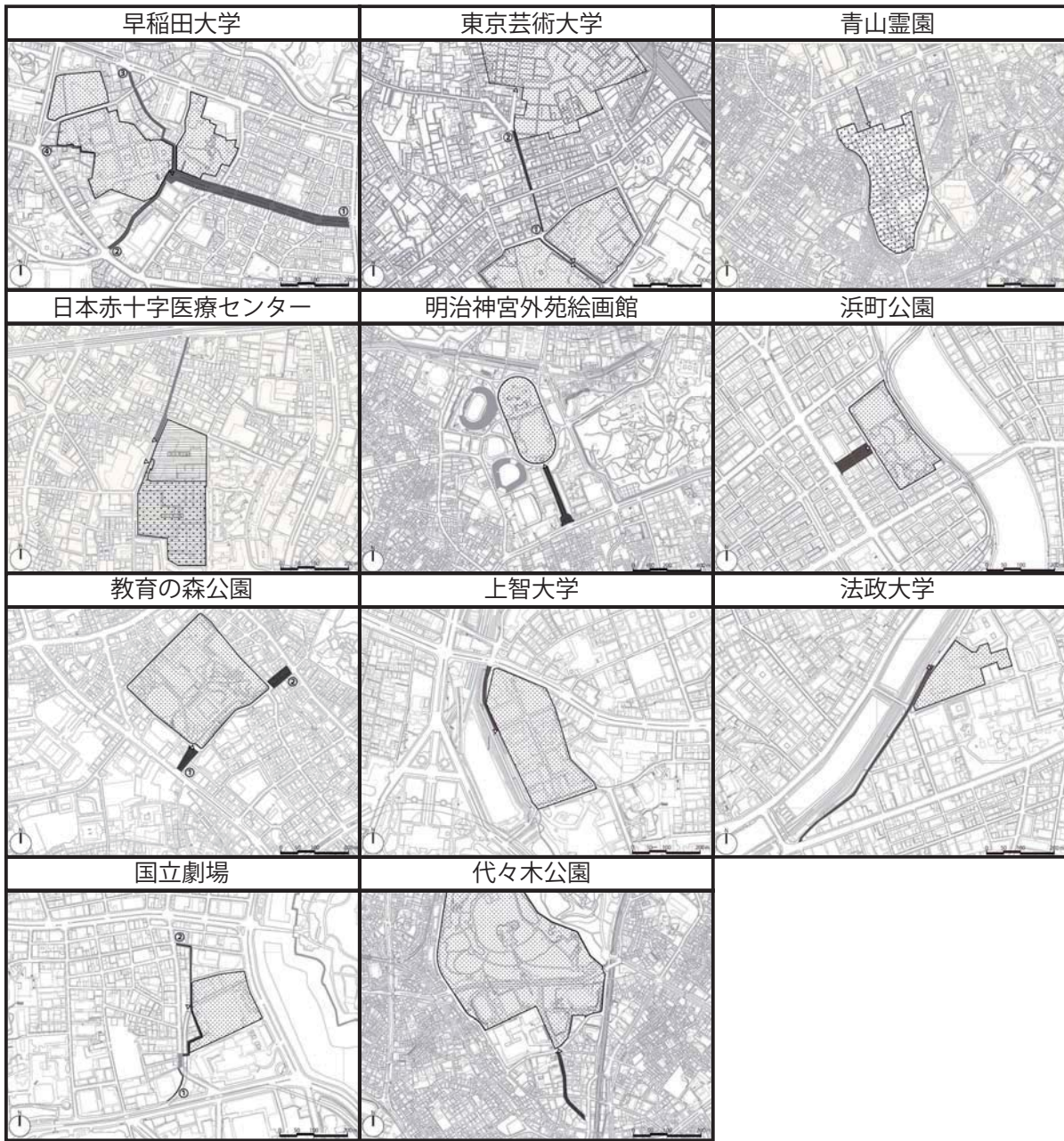


図 101 閉領域と＜参道＞の一覧



から、正門から幹線道路までの道には線形に要素が集約し、卓越した道空間が形成される。このようにして形成された<参道>は根本的に幹線道路とは異なる原理の下に形成されているために独自の様相をもつのである。この独自の様相としての景観の連続性などが都市における<参道>を線的なひとまとまりの都市空間として人々に認識させ、その空間の線形性を強めるのである。

以上に挙げた三つの<参道>の様相を図式化すると図 102 のように表現することができる。これら様相の相互の関係性を考えると、道空間への現象の集約が<参道>の形成要因であることから、「集約性」が「線型性」と「前室性」を生じさせると考えられる。

ここで、<参道>の様相としての「集約性」、「線形性」、「前室性」を閉領域と周辺環境との関係性として相対的にとらえるため、前述した実地調査の結果、特徴的な空間の様相がみられた雑司が谷霊園と東京大学本郷キャンパスを事例として比較検討する。

雑司が谷霊園は3章においてグループBに分類され、境界性が弱く、その正門は幹線道路から離れて位置している。幹線道路から正門が離れているという点で<参道>をもつ閉領域と同じ条件をもつこの閉領域の周辺には、同じく霊園である青山霊園と同様に、複数の石材店や花屋が位置していた。それを地図上に図示したものを図 103 に示す。これを見ると、雑司が谷霊園周辺における石材店や花店は青山霊園のように正門へと至る道に集約して位置しているとはいえず、境界に沿うように散在している。これは、雑司が谷霊園はその領域の境界性が弱く、正門も他の門にくらべて卓越した特徴をもっていないため、特定の道に商店が集中せず、「集約性」もった道が形成されなかったもので、幹線道路からの隔離という同条件にもかかわらず<参道>が形成されなかったのであると理解できる。

東京大学本郷キャンパスは幹線道路である本郷通りと正門が接触しているため、本研究では<参道>の事例対象とはならなかったが、東京大学が面する本郷通りには飲食店や書店などの多くの商店が並ぶ学生街として知られている（図 104）。今和次郎が1926年頃の早稲田大学と慶応大学との周辺商店の比較調査に際して、「赤門と正門とから吐きだされる学生その他をまえにひかえて、一側並びの商店の繁栄は早稲田や三谷はみられない光景だ」<sup>[11] (p321)</sup>と述べているように、ここは古くから東京大学の関係者で栄えた商店街であり、現在でもこの様子は変わっていない。さらに、大学構内の緑や、意匠が施された塀、赤門や正門などの歴史的遺構が道に面して連続的に並んでいることで、本郷通りにおける東京大学が面する区間は独特の雰囲気をかもし出している。これは閉領域の影響によって幹線

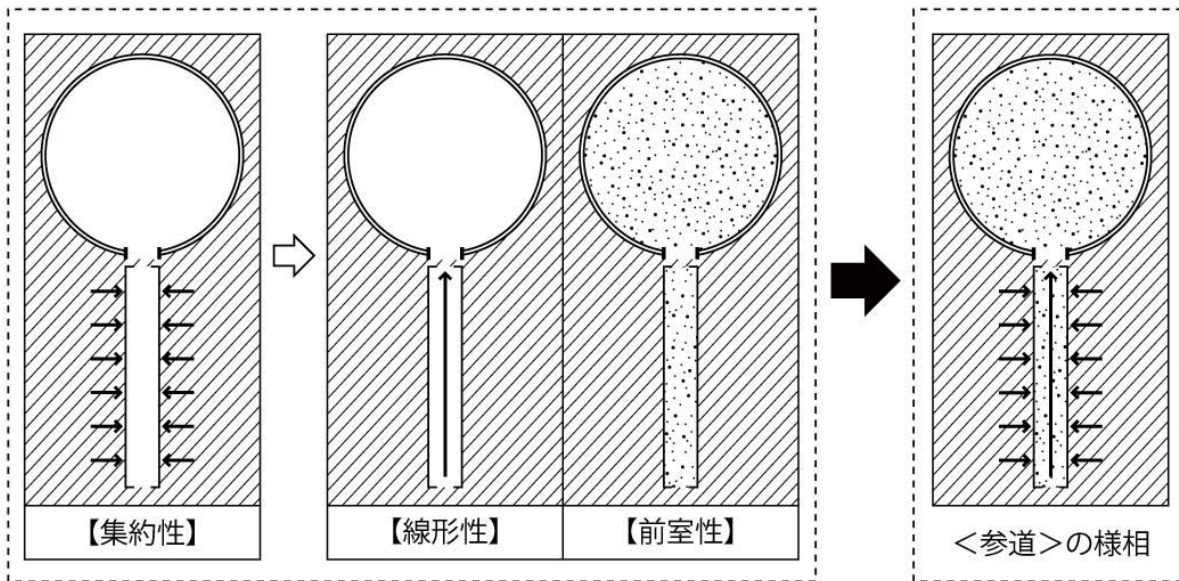


図 102 <参道>の様相

道路が学生向けの商店の「集約性」をもち、本郷通りの一部が東京大学の「前室性」をもっていると考えられる。一見、本郷通りに連なる商店街が「線型性」を生んでいるとも考えられるが、幹線道路に沿って商店が並ぶのは一般的であり、この線形性は閉領域に強く由来するものであるとはいえず、<参道>の線型性と同種であるとは言い難い。また今による記述にもみられるように、この区間には正門と赤門という特徴的な二つ門が並列しており、到達点である門が定まらないことも<参道>との様相の違いである。

以上の<参道>とは異なる閉領域と周辺環境の関係性についての考察により、「集約性」、「線型性」、「前室性」は閉領域の周辺環境との関わり方としての<参道>がもつ独自の様相であると考えられる。

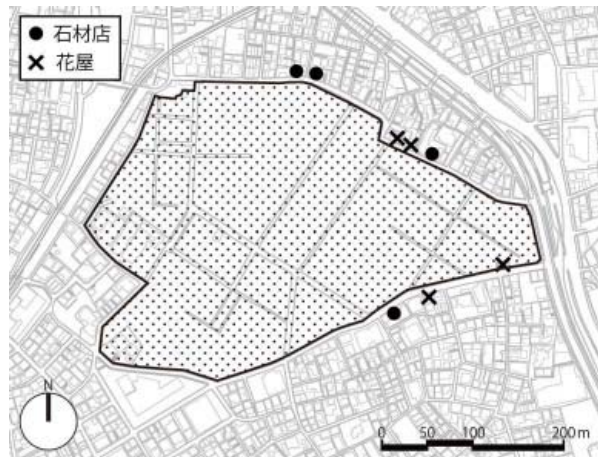


図 103 関連機能の分布



図 104 商業系土地利用分布  
出典：文京区土地利用現況図より作成

### 4-3 <参道>の効用

前節までに<参道>の形成過程と様相による閉領域と周辺環境との関係性を考察してきたが、本節ではこれらが都市空間にもたらす効用を考察する。前節までで、<参道>はその形成過程で「集約性」をもち、それが「前室性」と「線形性」を生じさせると述べたが、ここでは「前室性」と「線形性」の都市空間における効用を閉領域と<参道>の事例を通して分析する。

#### <参道>の「前室性」による個性的な周辺環境の創出と都市の多様化

「前室性」の都市空間における効用とは、個性的な都市空間の創出である。<参道>が閉領域の前室的空間であるということは、そこに閉領域との関連性をもつ様相がみられることから導かれた。つまり、都市における異質領域としての閉領域の個性が自身の領域の境界を越えて、都市空間にまで波及していると解釈できるのである。

ここで3章で調査した事例から、閉領域が<参道>によって創出した周辺環境の個性について考える。

図105は3章で取り上げた商店街のそれぞれの業種構成比を示したものである。ただし比較のため、東京都商店街実態調査<sup>[37]</sup>から作成した東京の商店街の業種構成比の平均値を併記した。これを見ると、総合大学では印刷・製本業や不動産業、芸術大学ではギャラリー、霊園では石材店、病院では薬局というように閉領域と関連する業種の店舗が商店街に多くみられたことから、同じ商店街でもその様相が異なり、閉領域の個性が商店街の個性に反映されていることがわかる。

また特に早稲田大学の周辺商店街では、書店における大学指定教科書の販売や不動産業や日用品点での大学生協との提携関係が見られ、商店街の大学との強いつながりがみられる。これは大学の経営合理化に伴うものであることが考えられ、周辺商店街が大学の機能を補完するような関係がみられる。

東京芸術大学や代々木公園では、<参道>を軸として芸術家やミュージシャンという個性的な人々が集まることで個性的な様相をもつ境界が形成されていた。特に代々木公園ではパルコが商業戦略として似たような価値観をもつ人々を公園通りに集めることを意図しており、その結果公園通りは若者文化の発信地としての個性をもつようになった。

並木により閉領域への経路を演出するという形での<参道>の「前室性」は、都市の名



所となるような個性的な場所を生み出している。法政大学や上智大学では外濠に沿って閉領域に至る並木のプロムナードが形成されたことにより、元々の地形的特徴が顕在化され、都市の名所としての個性を獲得している。また、明治神宮絵画館のイチョウ並木は東京で唯一のヴィスタ景観をもつ壮大な街路空間として東京の名所となっている。江戸名所図会をみると、古くから名所は祭りや季節の行事などと強く結び付いており、この観点からもこれらの名所性を認識することができる。この観点から考えると、外濠では「外濠キャンナレ」というイベントが法政大学の学生を中心に行われており、花見の時期にはサクラ並木目当ての多くの人々でにぎわう。また、紅葉の時期には、外苑絵画館前のイチョウ並木では「いちょう祭り」が開催されてこちらも多くの人々でにぎわっている。以上のことから、江戸において社寺境内と参道が都市の名所として親しまれてきたのと同様に、閉領域と＜参道＞も現代における都市の名所としての個性的な空間を生んでいると考えられるのである。

以上にみてきたように、＜参道＞は様々な用途をもつ閉領域内部の様相とつながりがあることから、周辺の都市空間に個性を生み、都市に多様性をもたらすのである。それぞれの閉領域の個性が＜参道＞の前室性により周囲の都市空間により波及することで、都市には閉領域に由来する多様な個性をもった界限

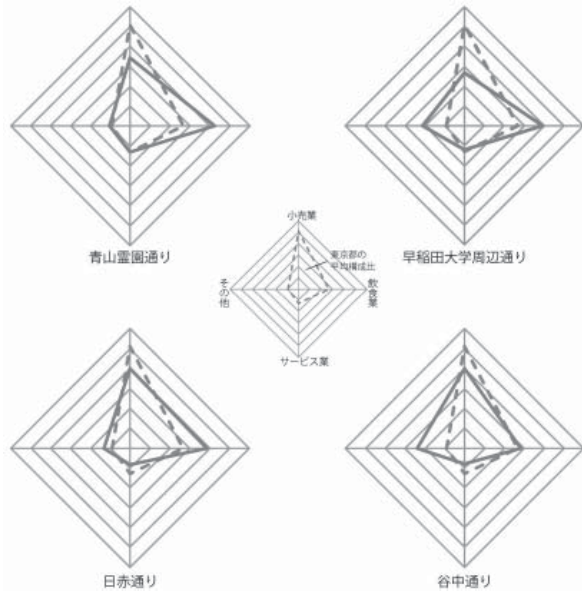


図 105 各商店街における業種構成比

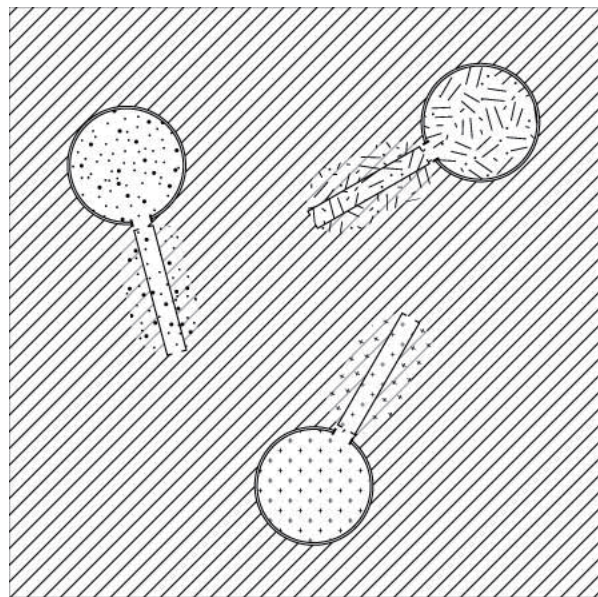


図 106 個性的な周辺環境の創出と都市の多様化



がいくつも出現するのである（図 106）。

#### <参道>の「線型性」による個性的都市空間の広域化

<参道>の「線形性」は「前室性」によって生じた閉領域に由来する周辺環境の個性をより広範囲に波及する効用をもつ。

この「線形性」の効用を商業戦略として利用したのがパルコである。パルコは自身の店舗の前面道路に資本を集約して<参道>とし、「線形性」を生むことによって代々木公園の個性であった集客性や公園としてのイメージを戦略的に道空間にまで伸張させたのである。この結果、多くの若者が集まるようになり、公園通りは 1970 年代から 1980 年代の若者の文化の発信地としてとらえられるようになり、「公園通りの坂あがり」というエピソードに代表されるように、代々木体育館を到達点とした音楽文化や劇場文化が公園通りを中心として隆盛したのである。

東京芸術大学の<参道>は、谷中の商店街における歴史的建造物が谷中学校によってギャラリーへと改修されていったのが始まりであり、谷中芸工展も初めは小規模なものであった。その後、谷中学校が改修をした建物が集まる道を中心として、私設のギャラリーなどが増加していき、<参道>の形成初期には上野と谷中が中心だった谷中芸工展は、現在では日暮里方面にまで範囲を拡大している。

上智大学や法政大学などの樹木の集約によって形成された<参道>は並木による魅力的な緑の空間となっている。ここで<参道>の「線形性」は、都市において人々はその緑の空間の魅力を享受する機会を増加させている。その一例が図 107 に示す法政大学の<参道>に位置する喫茶店であり、並木道に面してオープンテラスがつくられ、並木の魅力を享受するような店舗設計がなされているのである。

一般に閉領域と周辺環境との関係性で、商業性、緑環境などの点で恩恵を受けるのは入口付近の都市空間のみである。しかし、その入口へと到達する道に<参道>が形成されることで、<参道>の「線形性」は自身の個性的な空間を広域化し、その恩恵を受けることのできる都市空間の範囲を拡大しているのである（図 108）。



図 107 外濠に開かれた喫茶店

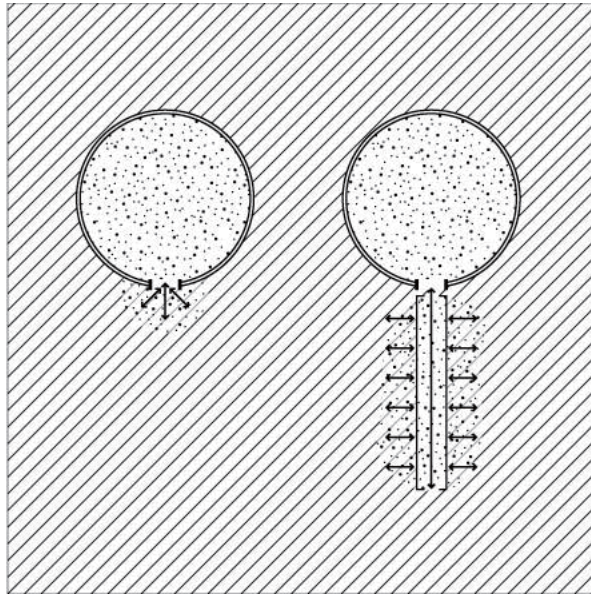


図 108 個性的都市空間の広域化



## 5. 結論

---

本章ではこれまでの事例研究とその分析の結果を総括する。そして、それを〈参道〉モデルとして提示することで閉領域とその周辺環境の関係性について結論づける。



### ＜参道＞モデルによる閉領域と周辺環境の関係性の記述

本研究の目的は現代の東京の都市空間における閉領域とその周辺環境との関係性を解明することであった。その手がかりとして＜参道＞という閉領域とその周辺環境との関係性を築く、社寺参道に類する様相をもった道空間の存在を仮定して研究を進めてきた。以下にその結論を述べる。

1. 現代都市における閉領域において、社寺参道に類する様相をもった道空間である＜参道＞は存在する（仮定の実証）。
2. ＜参道＞という観点をもつことで、以下の閉領域と周辺環境の関係が明らかになった。
  - i. ＜参道＞は閉領域の周辺環境において、閉領域への「到達経路の計画的演出」、「関連機能の近接」、「到達経路の加算的演出」、「誘引性の強化」が生じることにより形成される。
  - ii. これらの現象は閉領域の門へと至る道空間に集約して生じる。
  - iii. 閉領域の周辺環境における＜参道＞の空間の様相は「集約性」をもち、さらに「集約性」は「前室性」と「線形性」を誘発する。
  - iv. ＜参道＞の「前室性」は閉領域の個性を、その境界を越えて周辺環境に表出させる。閉領域の個性に応じて周辺環境の個性も異なり、都市空間に多様性をもたらす。
  - v. ＜参道＞の「線形性」は「前室性」によって表出した閉領域の個性を広域に波及し、その個性による受益範囲を伸張する。

上記は、現代都市における閉領域と周辺環境の関係性を、＜参道＞という観点から明らかにする＜参道＞モデルであるといえる。以下、＜参道＞モデルについて述べる。

1. ＜参道＞モデルは東京都心部における閉領域と＜参道＞の事例調査により導かれた。
2. ＜参道＞モデルは、＜参道＞の形成過程、様相、効用という諸相における閉領域とその周辺環境の関係性を示す。
3. ＜参道＞モデルは都市における閉領域とその周辺環境との関係性を理解するための手法のひとつである。

---

本研究の意義にさかのぼると、〈参道〉による都市の閉領域とその周辺環境の関係性を明らかにすることは、都市空間における異質な閉領域を都市の個性と捉え、都市の資源として有効に活用していくための一助となることであった。

〈参道〉モデルは閉領域と道空間の強いつながりが生み出す特徴的な都市の様相やその効用を示すものであった。これは閉領域の都市の資源としての有効活用するための都市デザインを思考する動機となる。そしてその思考に、閉領域と道空間を一体的な空間としてとらえることが生む可能性という重要な視座を提供するのである。

---

## 参考文献一覧

- [1] 原研究室，住居集合論 I，鹿島出版会，1973
- [2] 陣内秀信，東京の空間人類学，筑摩書房，1992
- [3] 鈴木博之，東京の地霊，筑摩書房，2009
- [4] 中沢新一，アースダイバー，講談社，2005
- [5] 槇文彦 他，見えがくれする都市，鹿島出版会，1980
- [6] 松村明 編，大辞林 第3版，三省堂，2006
- [7] 田阪美徳，神社の参道一境内林苑論の序説として一，神社協会雑誌第三十六年第三号，1937
- [8] 上田篤，空間の演出力，筑摩書房，1985
- [9] 寺田幸司，線分都市 東京の都市構造における線分性の研究，東京大学工学系研究科建築学専攻修士論文，1999
- [10] 早稲田大学大学史編集所 編，稿本早稲田大学百年史 第3巻 上，早稲田大学出版部，1980
- [11] 今和次郎，今和次郎集 第一巻 考現学，ドメス出版，1971
- [12] 台東区役所文化産業観光部 にぎわい計画課，街歩き台東散歩 第2回（谷中コース），台東瓦版 Vol.2, pp10-11, 2012.7
- [13] まちを生きる～地域の住まい・まちづくり活動史研究（谷中界限編），住まい・まちづくり活動推進協議会調査研究報告書，2009
- [14] 俵元昭 著・東京にふる里をつくる会 編，港区の歴史，名著出版，1979
- [15] 田中きよし，青山霊園（東京公園文庫 ;33），郷学舎，1981
- [16] 若月紫蘭，東京年中行事，春陽堂，1911
- [17] 日本赤十字社，日本赤十字社中央病院 80 年史，日本赤十字社中央病院，1966
- [18] 篠原修 編，景観用語辞典 増補改訂版，彰国社，2007
- [19] 越澤明，東京都市計画物語，筑摩書房，2001
- [20] 佐々木葉，近代都市景観デザインにおける欧米モデルの受容の手法と思想，東京大学大学院工学系研究科土木工学専攻博士論文，1994.3
- [21] 復興事務局 編，帝都復興事業誌．建築篇・公園篇，復興事務局，1931
- [22] 斎藤潮，神社参道の空間構成に関する研究，第24回日本都市計画学会学術研究論文集，457-462, 1989
- [23] 平野勝也・篠原修，日本におけるヴィスタ設計の受容と変容に関する研究，土木計画学研究・講演集 No.15(1), 1992.11

- 
- [24] 都市史図集編集委員会 編，都市史図集，彰国社，1999
- [25] 文京区ウェブページ，窪町東公園，[http://www.city.bunkyo.lg.jp/sosiki\\_busyo\\_kouen\\_annai\\_kuritukouen\\_kouen\\_kubomachihigashi.html](http://www.city.bunkyo.lg.jp/sosiki_busyo_kouen_annai_kuritukouen_kouen_kubomachihigashi.html)，2008.5，2013年アクセス
- [26] 中島 伸，東京都戦災復興区画整理事業における市街化計画からみた計画実態に関する研究：東京都市計画復興土地区画整理事業地区事業計画書を用いて，都市計画論文集 pp811-816，2009.10
- [27] 上智大学ウェブページ，上智大生が植えた眞田濠土手の桜 Web で知る SOPHIA，[http://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia\\_spirit/websophia](http://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia_spirit/websophia)，2013.3，2013年アクセス
- [28] 法政大学 編，法政大学の100年，法政大学，1980.9
- [29] 千代田区ウェブページ，地区計画概要 平河町二丁目東部地区，<http://www.city.chiyoda.lg.jp/>，2013年アクセス
- [30] アクロス編集室，パルコの宣伝戦略，Parco 出版，1984
- [31] 吉見俊哉，都市のドラマトウルギー，河出書房新社，2008
- [32] 北田暁大，増補 広告都市・東京：その誕生と死，筑摩書房，2011
- [33] 三浦展，「自由な時代」の「不安な自分」—消費社会の脱神話化，晶文社，2006
- [34] 清水徹，都市の解剖学，ポークラ文化研究所，1981
- [35] 林陸朗 他 著・東京にふる里をつくる会 編，渋谷区の歴史，名著出版，1978
- [36] 中村正人，中村正人の赤ドリ青ドリブログ 記事 (2010.6.14)，[https://yorimo.yomiuri.co.jp/servlet/Satellite?c=Yrm0302\\_C&cid=1221753489470&dName=Yrm0302Def&pagename=YrmWrapper](https://yorimo.yomiuri.co.jp/servlet/Satellite?c=Yrm0302_C&cid=1221753489470&dName=Yrm0302Def&pagename=YrmWrapper)，2013年アクセス
- [37] 東京都産業労働局商工部地域産業振興課，平成22年度東京都商店街実態調査，2010

#### 図版作成資料

- ゼンリン株式会社，ゼンリン住宅地図，2009
- 清水靖夫，明治・大正・昭和 東京1万分1地形図集成，柏書房，1983
- Google，Google マップ，<https://maps.google.co.jp/>，2013年アクセス
- Goo，Goo 地図 古地図，<http://map.goo.ne.jp/history/>，2013年アクセス





---

## 謝辞

この論文をまとめるにあたり、多くの方々にお力添えをいただきました。

指導教官の大野先生には、何度もご指導いただきましたが、いつも熱心にご指導くださり、次々と新しい知見を与えてくださいました。

副指導教官の出口先生には、中間発表、提出直前にご指導いただき、貴重なご意見をいただきました。

この論文のテーマを考えるきっかけになったのはファイバーシティ研究会での大野先生のお話でした。私にとって大野研究室の研究会は非常に有意義な時間でした。そのような機会を与えてくださった研究室の皆様に感謝いたします。

最後に、長きにわたる学生生活を支えてくれていた家族にも感謝したいと思います。

ご協力いただいた皆様に感謝の意を表します。

2014年1月27日 加藤 大樹

---